

---

# 狐と鬼と私の妖怪学園

ゲレゲレ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

狐と鬼と私の妖怪学園

### 【Nコード】

N9446U

### 【作者名】

ゲレゲレ

### 【あらすじ】

人が妖怪の存在を認めた時、妖怪たちは、自分達を危険と判断し、排除しようとする人間達との徹底抗戦を決めた……また、人は、それまで絶対とされていた兵器の火力が、妖怪たちには通じないと見ると、これまでインチキと罵り、時には見世物にしていたオカルトに可能性を見出した。

当初は未知の勢力であった妖怪が押していた戦況も、オカルト……とりわけ、陰陽師やエクソシスト、ヴァンパイア・ハンターなど

の活躍によつて、互角の状況へと持ち直していた。

しかし、そこである事件が起きた

これは、それから一世紀以上の時が経った現代のお話。

人と妖怪が、ある事件を切欠に、一世紀以上の交流を深めた、現代のお話……。

## プロローグ（前書き）

この小説に登場する全てのものはフィクションです、実際の人物・団体・事件等とは一切関係がありません。

## ブローグ

### 廃都市東京

夕闇に染まる夜空を、赤いランプが鉄の腹に焚かれた軍用輸送機『R-01（レイシズム）』が。両翼の先端に着けられている、巨大なドラム缶の様な飛行装置を駆使して、大気を切り裂くように飛行している。その無骨で、ましてや輸送機だということで、通常の航空機よりも腹の大きな機体は、まるで空を駆けるバファローを彷彿とさせるが。機体を安定させるために着けられているスタビライザーや、先ほどから、微妙な操縦をする度に、巨大なドラム缶の底の向きを変えている飛行装置が、そのイメージを地上動物から飛行動物へと払拭させていた。

『そろそろ新宿上空に到着する。学園序列一位と三位は、各自の装備をチェックした後、ハッチの前まで移動しろ。繰り返す』

もはや植物が生えるぐらいに古く、破壊し尽くされたビルが寂しく立ち並び、廃都市東京上空を飛ぶ輸送機内で。そんな機内放送が流れた……。

「だそうだぞ童子<sup>どうじ</sup>」

すると、輸送機のキャビンで偉そうにふんぞり返りながら、座席に座っていた一人の女性が立ち上がり。何とも面倒くさそうに後ろにいる人物へと告げた。

「分かった」

女性に童子と呼ばれた男は、短い返事を返すと。そのまま背筋を伸ばしながら座っていた座席から“のそり”と立ち上がり。視線をきめ細かく、それでいてどこか透明感がある長い金髪が特徴的な女性へと向けた。

「ならば、気は進まんが行くとするかの。遅れても面倒なだけだし」

「ああ」

ロングストレートの金髪の前髪を掻き揚げながら、視線を向けられた女性は身を翻し。そのまま輸送機のキャビンから、スラリと伸びた優美な脚線を描く足で出て行く……また童子という男も女性の後に着いて行った。

『R-01』機内の最後尾……そこにはハッチを開放する際に、コンテナに積まれた物資が外へと飛び出ないため地面に嚴重に固定され。更には確りと通路を確保するために、等間隔で並べられていた。

そこを、先ほどキャビンを出た二人が。カンカンと、鉄の地面を叩く足音を鳴らしながら歩いている。

前を歩くのは、流れる様に艶やかな長い金髪を揺らす、白面の女性……。

身長は女性にしては高い175？。スラリと伸びた長い足に、確りとクビレと臀部にメリハリが出来ている腰は、柳腰と称しても良いぐらいに細くしなやかで。均整の取れたプロポーションの割りに存在を強調する形の良い胸は、ウエストのサイズも相まって、通常のサイズよりも大きく見える。肌は白く、細く整った輪郭や優美な曲線を描く眉毛。それでいて、少しだけ吊り上った切れ長の美しい瞳は、同性の者ですら眼を奪わせる魅力を持っていた。一言で言えば、モデルの様な女性だ。

そして、そんなモデルの様な女性の後ろを歩くのは。先ほど童子と呼ばれた男性だ……。

彼を一言で表すのなら、正に筋肉という芸術的な鎧を身に纏った男だ。

身長は190cmと大柄で。まるで岩石の様に鍛え上げられた腕周りに、何者も貫くことを許そうとしない、膨らみを持った鉄板が

並べられていると錯覚しそうな大胸筋郡。太い首をサポートするために、それ相応に丸みを帯びた僧帽筋に、理想的な逆三角形を表現している、分厚い背中。胸囲とは反比例したサイズを持つウエストには、鉄球を並べたかのような六角筋が存在を強調している。臀部はキュツと引き締まり、太ももは太木のように頑丈そうで、脹脛は短距離が非常に早そう、アキレス腱が細くダイヤモンドを思わせるカットを浮き彫りにさせている。ザンバラで眼にかからない程度に伸ばされた白い前髪に、刈上げたように短い、それ以外の黒髪……瞳は眠そうにしているが、眉毛は少し太く、鼻もそれなりに筋が通っているため、それほどだらしのない顔には見えない。輪郭は、体格が大きいために頑丈そうに出来ているが、基本的に引き締まっているために、あまり太くは見えず、むしろ普通の輪郭に見える。

男の顔が、普通な整い方をしているために。二人が一緒に歩く姿を『美女と野獣』と名づけるには厳しいものがあるが、体格的に見れば、まあ名づけても良いだろうと思える構図だ。

そんな二人は現在、体にフィットした『パワーセーブ』という、所々露出した着衣を身に纏っている。

「しかし……毎度毎度。この“お勤め”の度に着せられる服には馴れんのう」

「だが、これが無ければ。俺は安易に妖力を使う事を許されていない……」

「知っておる。だが、それは碌に妖力の制御が出来ない、おぬしだけの話であろうに。それがなぜ、私にも着せられるのだ？」

女性が今、自身が身に纏っている体のラインがハッキリと分かってしまう。引っ張ろうが何しようが破ける気配のない、ラバーに似た素材で出来た、やたら頑丈なフィットスーツを触りながら、うんざりとした表情で文句を垂れる。それに、同調はするが、仕方が無いといった表情で続く童子と呼ばれる男。

広い空間を誇る、このコンテナが並べられた場所を歩く二人は、そろそろ輸送機最後尾のハッチ扉前に到達するところであった。

すると、そんな時だった……。

『ハッチの前まで来たな。では、お前達の横に設置されているコンテナを開ける。そこに、今日お前達が使用する武器が入っている……ああ、それと。パワーセーブのチェックはしたのか？ しなければ、そこに入っている武器のセキュリティが認証を出さず、使えないからな』

「そんなもんは来る途中で済ませたわ……いちいち指図をするな」  
機内放送から聞こえてきた男の声に従いつつも、少々苛立たしげに言う女性……。

『口を慎め序列三位。お前たちは、この“お勤め”によつて社会の信頼を得ている事を忘れるな』

「得ているのは、貴様らの様な腐った水を啜る汚物どもからであろう？ それと、私の名前は九尾妖狐だ。偉そうに番号で呼ぶな」

九尾妖狐と名乗った女性は、機内放送から聞こえてくる男の声に對し、少しだけ口調を強めた。

『ふん……まあいい。我々は、お前達にとりあえず働いてもらえば良いだけなのだから。何とでも言っていれば良い』

しかし、妖狐の口調を強めた言葉は、男に軽く流されてしまった。それに「ちつ！」と忌々しげに舌打する妖狐。だが、これに反応する者は誰一人としていなかった。

「妖狐。コンテナを開けるぞ」

「……分かった、そうしてくれ」

機内放送の男と、妖狐のやり取りを何事も無かったかのように聞いていた童子が。男の指示通り、ハッチ扉のすぐ手前に設置されていた、一際横に長いコンテナの二つの取っ手に手をかけた。

そして、妖狐の言葉と同時に、二つの取っ手を手前に引いた……。すると

バシユウウウ……。



棺桶の様に開いたコンテナの中から、何やらエアの抜ける音がすると同時に。二種類の武器が姿を表した……。

「ほつ……」

一際横に長いコンテナから姿を表した武器に、妖狐が思わず感心の声を漏らしてしまう。

そこにあつたのは、一本の扇と……やたらデカイ、破城槌のような長く太い武器だ。

「大きさ的に見て当然、私がこれだろうな」

そう言いながら、コンテナを開けた童子の横から。妖狐が一本の扇の方と手に取った。

この一本の扇は、あくまで“形だけを扇っぽくした”と言う様なデザインをしており。基本的な材質を、“妖力変化金属”と呼ばれる、妖怪が発する妖気の伝導によって、形などを様々なものと変える特殊な合成金属で作られており。持ち手の部分以外。全てがシンプルな白色のデザインで統一されている。

妖狐は、これを何度か開いたり閉じたりした後。扇を閉じた状態の持ち手部分を右手で握り、マジマジと不思議そうな視線を送り始めた。

「……どう使うのだ、これは？」

『一度、自分が使いたいと思う武器を想像しながら。それに妖気を送ってみろ』

使い方の分からない武器を見ている最中に、機内放送から男の声が割り込んでくると。妖狐は不機嫌な表情を隠そうともせずに、再び先ほど同様「ちっ！」という舌打を発した……が、従わねば、この武器の特性も理解できないので。渋々といった形で、言われたとおりの事を実行した。

妖狐の体から、青い炎の様な妖気が不気味に揺らめきながら。自身の右手を通して、手に持っている武器へと流れ込んでいく……すると。

「おおっ!？」

所有者の妖気を感じ、全体へと伝達させた、もともとは扇の様な形をしていた武器が。一瞬にして、一振りの刀に姿を変えた。<sup>ブレイド</sup>

これには驚きの声を隠せなかった妖狐……。

「ほお……これは奇怪な武器だのう」

一振りの刀へと姿を変えた、白色のシンプルなデザインをした武器に、興味津々な視線を向ける。

刀……というよりも、刀の様な長さを誇るカッターとでも表した方が良い様な、その刀は。<sup>ブレイド</sup>まるで、妖狐のために予め設計されていたかの様に、自然と手に馴染んだ。

『その武器は、まだ試作段階の物なのだか。今回の簡単な任務、もとい“お勤め”の内容を考慮して。上から直々に試験運用を言い渡された物だ。あまり手荒く使ってくれるなよ？』

「知ったことか、好きに使わせてもらう」

<sup>ブレイド</sup>機内放送の男の注意を一蹴した妖狐は。そのまま右手で持っていた刀を、軽く左から右に払うように振ってみる……。

ヒュン！      という空気を切り裂く、鋭い音を発した刀。<sup>ブレイド</sup>

「なるほどのう……やはり軽い」

一度振ってみた感触を確かめながら、妖狐は持っていた刀を<sup>ブレイド</sup>気に入ったという表情で見つめる。

「ところで童子、おぬしの方はどうなのだ？」

自身に送られた武器を気に入り、それを肩に担ぐようにして持った妖狐は。そのまま相方でもある童子に目をやった。

「使い方が分からない」

すると、コンテナの前で、いまだやたらデカイ、破城槌の様な長く太い武器と睨めっこをしていた童子が。素直に答えた。

『序列一位の武器は、まあ簡単に言ってしまうば。一世紀半以上前に、架空の武器として創作された“パイルバンカー”という物だ』

「“パイルバンカー”だと？ 何だ、それは？」

機内放送の声に、童子の代わりに反応する妖狐。

どうやら、いくら声を聞いただけで機嫌を損ねる相手でも、気に

なるものは気になる様であった。

『私個人は、よく分からのだが……どうやら資料によれば。所有者が手に持った瞬間、内蔵された空砲（ブランク弾）に向かって自動的に所有者の妖力が流れ込み。計三発の空砲が満タンになると使用可能になるらしい。明確な発射過程は……あゝあった。その満タンになった空砲を内部で爆発させ、その反動を利用して、先端から特殊金属製の“杭”を射出させるみたいだ。そして射出された杭は、再び内部へと戻り、次弾に備えて待機状態に戻る』

男の説明に、妖狐が“何を馬鹿な事を言っているのだ”と言外に語るかのように「はあゝ」と深いため息をついた。

「童子よ、悪いことは言わぬ………それを使うのは止めておけ。どう考えても、役に立つとは思えぬ」

刀を肩に担ぎながら、“パイルバンカー”と呼ばれる武器を見つめる童子に、諭す様な声音で、やんわりと止めるように言う妖狐。

「いや、これも“お勤め”の一環だ。ありがたく使わせてもらう事にする」

だが、妖狐の諭も。どうやら真面目そうな彼には効果を成さなかったみたいだ。

「知らんぞ、どうなっても」

「構わない」

そう言つて、童子は己と同じぐらいの大きさを誇る、パイルバンカーと呼ばれる武器を手に取りうと。コンテナの中に手を近づけた。童子の大きな掌が、パイルバンカーの表面にゆつくりと接触する……すると。

「っ！？」

「童子！」

突然、パイルバンカーの表面が、童子の頑強に鍛え上げられた右腕を“取り込む”様に液体状に変化する。

「おい！！これは一体何のまねだ！！」

相方が、手に取ろうとした武器に取り込まれようとしている光景

に、機内放送の男に妖狐が声を荒げる。しかし、それは「待つてくれ、妖狐」童子自身によって止められる。

見れば、童子を取り込もうとしていた武器が、太く鍛え上げられた右前腕の肘関節辺りで、液体化させた部分の進行を止めていた。

「どうやら、これが、この武器の装備の仕方だったみたいだ」

「……何とも理解し難い武器だの、そのパイルバンカーとやらは」「ああ、だが俺には丁度良いみたいだ」

そう言いながら、童子がコンテナの中から、自身の右前腕に取り付いた巨大な武器を取り出す……。

“ズモ……”と、重量感のありそうな雰囲気を持たせる、その巨大な武器は、まさに体が大きく筋骨隆々な童子には御詔えの武器であつた。

「うん？ 体から妖力が抜かれていく様な感じがするな……」

『どうやら、それが空砲（ブランク弾）に妖力を送り込んでいる作業みたいだな。しかし……やはり凄いな、妖怪という“もの”はそのパイルバンカーという武器自体、総重量が0.5tは超えているというのに。何ともまあ軽々と……』

「童子は妖怪の中でも特別な存在だ、これぐらいは当然の事。それと、おぬし今、我ら妖怪の事を“もの”と言ったか？」

機内放送の男の言葉に、妖狐が少し吊り上った切れ長の眼を、更に鋭いものへと変えながら反応する。

『さて、勘違いはするな。今のは言葉のあやというやつだ……いちいち反応をするな』

「ふん……どうだかな」

先ほどから続く、二人の険悪なやり取りの中、童子は己の右腕に取り付いた武器を眺めている……。

「うん？ 形が変わるのか？」

ぼくっと眺めていると突然、手に取り付いた武器が先ほどの同様その円柱のシルエットを液化化して崩し始めた……。

みるみるうちに形を変化させていくそれは。最終的に、長さは半

分ぐらいまで縮まるが、その代わり、“杭”が射出されるであろう先端付近に四本の爪の様な存在が現れ。武器の中に取り込まれた右手には、何やらストックが握らされる感触が伝わってきた。

そして童子は、それらの新たに現れた存在の役割を瞬時に理解できた……。

この現象は、童子や妖狐が現在着用している『パワーセーブ』と呼ばれる着衣がもたらした恩恵で。肌に密着させている素材に埋め込まれた、電気信号を生成または読み取り送信できる装置を使って童子が装備した武器から様々なデータを読み取り、それを記号として変換し、筋肉や細胞に流れる微弱な電流に乗せて送信する。これを脳が情報として処理し、自動的に一つの知識として認識できるのだ。だが、これにはまだ微妙な障害も残っており。現段階では、今回の様な童子が装着した大掛かりな武器や、セキュリティ登録した装置以外からは、情報は読み取れない事になっている。原因は、いまだ不明だ。

童子が己の武器の使用方法を理解すると同時に、突然、これまで廃都市東京の上空を飛行していた『R-01』が飛行をやめ、滞空状態へと運行状況を移行した。

『うん？ どうやら新宿上空に到着したみたいだな……』

輸送機の変化に気付いた機内放送の男が、そのような事を呟いた。しかし、そんな事を呟かれたとしても、この空間にいる二人には状況を確かめようが無い……なぜなら、ここには窓という外を確認できる媒体は無いからだ。あるとすれば、妙に明るく照らしてくれる無数の証明ぐらいなものか。

だが二人は、そんな事など気にしてないかのように、機内放送の男の言葉を待つ。

『よし。これから学園序列一位と三位の二人は、開いたコンテナを閉じたあと、すぐに廃棄地区“新宿”へと降りてもらおう。ハッチの前まで進め』

機内放送の男の声を妖狐は無視……童子は従い、開いていたコン

テナを閉じ、取っ手の部分を元に戻した。ちなみにパイルバンカーの着いていない左手のみでだ。

『コンテナを閉じたな？　なら、ハッチを開くぞ。馴れていると思うが、開いた瞬間の風に足を取られるなよ？　その分、任務もとい“お勤め”の時間が延びると思え』

すると、二人のいる空間に、何やらブザーの様な喧しい音が響き始める……もう何度も経験した、目の前の巨大なハッチが、下へと倒れるように開く合図だ。それを確認すると、二人は各々スーツのプロテクターが着けられた胸元から小型のインカムを引っ張り出し、手馴れた手つきで左耳へと入れた。

それと同時に、ついに目の前のハッチが、まるで鯨の口が動くようにして、上から下へとゆっくりと倒れこむ形で開かれた……瞬間。ブオッ！！　これまで遮断していた外の大気が、一斉に機内へと入り込む。

これに、別段体勢を崩すことも無く、ただ頭髪を流れ込んでくる大気に揺らしながら、悠々と佇む二人。童子はただ単純な筋力で体の軸を固定し……妖狐は、足元に青い炎の様な妖気が揺らめいている事から、何らかの術を用いていることが見て取れる。

完全にハッチが下へと開くと、まずは妖狐が前へと出た。

『その武器は信用できんからの。“わらわ”から降りさせてもらうぞ？』

流れ込んでくる大気のせいで、通常の会話がしづらいために、耳に入れているインカムから声が聞こえてくる……見れば、前に出た妖狐の頭から、一對の狐耳が生えていて。また、一人称や口調すらも、どこことなく変化が見られていた

『もう“先祖帰り”をしたのか？』

そんな妖狐に、意外そうな表情をする童子。

狐耳の生えた妖狐は、それに振り向かずには答えた。

『今日はすぐに帰りたい気分じゃからのう、だから飛ばす事にした……まあ、相手の数は伝わっている限り人3に妖5。丁度いい数字

じゃ』

『そうか……なら、俺も早く終わらせるように努めよう』

『そうしてくれ』

一通りの会話を終えると、妖狐が斜めに開かれたハッチに向かって、突然走り出す……。

その体重を感じさせない、軽快かつ歩幅の広い走りは。彼女のしなやかな動きも相まって、まるで風の流れを彷彿とさせる走り……そして、そのまま何のためらいも無く、パラシュートも無しに身一つで、開放されたハッチから飛び出した。

高度3000mからのダイビング……。

おそらく、これがオーストラリアなどで行なわれるスカイダイビングなら、さぞ気持ちのいい事であろう。だが今、妖狐が行なっているのは、身一つでの降下だ。つまり、パラシュートなしのダイビングである。しかし、形状を刀に変化させたままの試作武器を右手に持つ、妖狐の白面とも言える表情には、焦りの色は全く伺えない……むしろ、大気の壁を全身に感じるのすら意に介していない、静かな雰囲気醸し出しながら、じっと眼を瞑っている。

きめ細かでガラス細工の様な長い金髪が、落下する際に生じている突風に煽られ上方へと立ち上がっていても、じっと眼を瞑った妖狐には、何の感情の起伏も起こらない。

バババババ！！ と、大気の壁を突き抜けていく音。

確りと握っていなければ、すぐに放してしまいそうになる右手の刀。<sup>ブレイド</sup>

しかして、それでも妖狐には意に介するものが何も無い。

そうこうしていると、禍々しく荒廃した新宿の町並みが、ハッキリと伺える距離まで近づいてきた。

すると、妖狐がゆっくりと瞼を開ける。

視線の先には、荒廃した新宿のひび割れたアスファルトの地面が広がっていた。

それを確認すると、妖狐は降下中だった身を翻し、全身で感じていた大気の壁を貫くような、直下降の姿勢を取る。

みるみるうちに上がっていく速度……もはや線で流れていく周りの景色。

瞬間

ドンッ！！！！

地上で待ち構えていた、ひび割れたアスファルトの地面の上に。

妖狐が破片や、土ぼこりなどを巻き上げながら衝突する。

パラパラと巻き上がった破片や土ぼこりが、ゆっくりと晴れていく中……妖狐は、落下したことで作った、ちよつとしたクレーターの中心で、何の問題もなく着地していた。

そして、まずは周囲の確認をする。

破壊しつくされた建物が目立ち、紫がかった霧……“瘴気”が漂う廃棄地区新宿の情景。

「ふむ……いつ見ても、酷い有様じゃのう」

人と妖怪の戦争が終わって、既に一世紀半以上の時が経った今ですら。この主戦場となった廃都市東京の景色は、どこも似たようなものののだ。

背の高かった筈のビルは、見るも無残に破壊され無くなっているか、穴だらけになっているかの二つで。他の商店だった場所や、何らかの娯楽施設だった場所も、大抵が瓦礫の山と化している。

加えて、この紫がかった禍々しい霧……これは、通常の人間では吸うことすら出来ない、非常に特殊な毒ガスの様なもので。この主戦場となった場所で死んだ人間の霊や怨霊、または妖怪の魂が発しているのだという噂がある。だが噂は噂……真相は、最先端の技術を持つ人自身が立ち入れない場所となってしまうているせいで、謎



のままだ。

しかし、こうもガスが出ていると、視界が制限されて仕方が無い。先ほど妖狐が落下した事で、一瞬だけ霧が散ったのだが、それもすぐに元通りになってしまう始末。ここまで“瘴気”が酷いのは、新宿だけだと言われている。

「他の場所と違って、植物すら生えぬ土地……」

自身が作り出したクレーターから、いつも通りの悠然とした歩みで出る。

「更には訓練された人間や、わらわの様な“混血”<sup>ハーフ</sup>、もしくは妖怪でなければ立ち入れぬと来たものだ……」

右手に持っている刀を、歩きながらもゆっくりと“腰だめに構える”

「だからこそ、なのであろうな……」

瞬間、紫の霧を掻き分けて、一人の男性と思われる影が、妖狐の後ろから飛び掛ってきた。

「ッー!!」

妖狐に飛び掛った一人の男は、そのまま持っていた錫杖を振り上げ、相手の脳天に打ち付けようと真垂直に振り下ろす……が。

「このような下賤な輩が集まってくるのは!!」

いつの間にか左回りで後ろへと振り向いていた妖狐が。相手が錫杖を振り下ろすよりも先に、腰だめに構えていた刀の刃を、男の両手で錫杖を振り上げていたためにがら空きとなっていた腹部に向けて薙ぎ払った。

瞬間、相手の着ている白装束の着衣を切り裂き、内部の肉体を切り裂く生々しい感触と音が、妖狐の触覚と聴覚、そして視覚に飛び込んできた

「~~~~ッー!!?」

胴体を背骨ごと切り裂かれた男は、“糸で塞がれた口”が思わず開いてしまいそうになるぐらいの絶叫を、口内で響かせる……が、しかし。胴体の半分以上を切り裂かれ、残り左脇腹の筋肉や皮膚だ

けで下半身と繋がっている男には、これ以上の行動は起こすことは出来ない。

故に、大量の鮮血と、生々しい内臓を周囲に撒き散らしながら飛び込んできた勢いそのまま、男はアスファルトの地面に落下してしまう。

「まずは人1……」

そんな切り捨てた男など見向きもせず、妖狐は刀にこびり付いた血を払うと。再び、歩を前方へと進めようとする。

しかし、今度は前方の紫色の霧が爆ぜる様にして掻き分けられてきた……。

現れたのは、ハイエナのような頭部をした巨大な人型の妖怪。全身を“瘴気”と同じ紫色の体毛に覆われ、腕や足の関節は、四足歩行の動物のそれと一緒に逆に向いていた。獣臭がしそうな涎塗れの口元には鋭い牙が何本も並べられ、手や足の爪には引つかいた相手をズスタにしてしまいそうな黒光りした鉤爪が生えていた。

「そうか……なるほどのう」

そんな身の丈2mは超えていそうな妖怪が目の前に現れたとしても、妖狐には何の危機感も感じられない。むしろ腰に手を当て、相手が間合いに入ってくるのを待っているぐらいの余裕がある。その立ち姿は、場違いにも女性としての美しさと妖艶さを演出していた。間合いに、霧を掻き分けて出てきた妖怪が、無用心にも走りこんできた

刹那

妖狐と、ハイエナの頭部が特徴的な妖怪が衝突したと見られた瞬間。突然、妖狐の体が“すり抜けた”様に相手の後ろへと、悠然と前を歩く姿で現れ。同時に、ハイエナの頭部が特徴的な妖怪の“頭部”が、ゴロンとアスファルトの地面に転がり落ちた……。

首を落された妖怪の胴体を伝って、大量の赤い血が滝の様に流れアスファルトを赤に染め上げる。

その様子を、また見向きもしないで、刀に付いた血液を確認する妖狐。

「よくスパスパと切れるのう、この武器は。奴等からの物というのが気に喰わんが、気に入った」

刃の部分に付着した少量の血液を確認した後。妖狐は返り血一つ浴びていない綺麗な白面で嬉しそうに笑みを作る。

すると、後ろの方から“ドサリ”と、先ほど首を落した妖怪の胴体が倒れる音が聞こえてきた。

同時に、何やら燃やされている音も、妖狐の耳に届いた。

そこで初めて、妖狐が後ろを振り向けば。そこには、今さっき切り捨てたハイエナの頭部をしていた妖怪の体が、緑色の炎に焼かれ、身を灰に変えている光景が見られた。

「妖怪と人の融合か、まるで狂気の沙汰じゃのう。姿もどっち付かず、知能もどっち付かず……ただ力のみが底上げされる研究」

もつとも、わらわも人と妖怪との“混血”<sup>ハーフ</sup>じゃがのう……。

誰とも付かない眩きを漏らしながら。完全に灰となってしまうた人と妖怪の融合体を見送る妖狐。

出来上がった灰の塊が、ここ廃棄地区新宿に、少しかだけ吹いている風に巻き上げられれば。そこから何やら一枚の札の様な物が現れた。

それを確認した妖狐は……。

「しかも即興と来たか……馬鹿な連中じゃな。まあ、これで残り人1、妖4となつたわけじゃが」

呆れたように、今回の相手の思考を疑った。

すると突然、妖狐が左耳に入れていたインカムに通信が入った。

「なんじゃ？」

『こちらで今、お前が計三対の目標を排除したのを確認した。どうやら、妖怪と人の融合体がいるようだな』

「別に、その程度の事、わらわには特に問題にもならぬ。何の用も無いのなら、わらわに話し掛けるな。耳障りだ」

入ってきた通信は、さきほど機内放送で妖狐と陰悪な空気を醸し出していた男からのものだった。

それに、嫌悪を隠そうともしない声音で対応する妖狐。だが、男の方は事情が違ったようだ。

『お前がどう思おうが勝手だが。こちらもそう余裕を持てる状況じゃないくてね』

「どういうことだ？」

周囲の気配を、頭に生えた狐耳で確認しつつ。インカムから聞こえてくる声に耳を傾ける。ちなみに、刀は右手に持ったまま、ぶらぶらと揺らしている。

『融合体がいたということは。そこから100m先に固まっている、残りの目標が全員“くついている”可能性が出てきた。一旦、お前はそこで待機したまま。今しがた降下した序列一位の到着を待て』  
くつついている……つまり、端的に言えば、全員が融合している可能性があるとこの事だ。

その光景を想像したのか、妖狐が「うげえ」と露骨に気持ち悪いといった顔をした。

『これから、こちらの赤外線カメラで地上を見ているが。相手がどれ程のものか確認できたとしても、お前を単体で出す気は無い。だから、そこで絶対に待機している』

「面倒な事を……だったら、わらわに科せられている“封印札”と、このスーツを外せば良いだろうに」

『それは出来ない。まだ、お前が社会の秩序を乱さないとは判断出来ないからな。それに、そこでスーツを脱いだら、お前は全裸だぞ？』

「別に構わん。里ではほぼ全裸で過ごしてきたからのう……まあ、その気になれば、お前達の信頼などいらぬからの。自分で取り外す事も出来る」

『ふん、実際にやってみろ。お前は、その瞬間に社会から危険と見なされ、追われる身か、最低でも一生監視が付く身になるぞ？』

「軽々しく、貴様の様なやつが“社会”と口にするな」

『現に、今は“我々の社会”だ。言って何が悪い』

「……切るぞ」

妖狐は、静かにそう告げると。相手の答えも待たずに、一方的に通信を切った。

相手に対する憤りや憎悪が膨らむのを感じるも、それを「ふん」といった短い鼻での溜息で抑えると。妖狐は、そのまま紫色の霧がかかった前方に視線を向けた。

「気持ち悪いのう……これは」

先ほど通信を受けた地点から、100mほど進んだ場所で。妖狐は右手に持った刀を肩に担ぎながら、思わずそう呟いてしまった。

前方に見えるのは           おそらく、一世紀半以上前は皆がワイワイと騒ぐ場所だったのであろう           横に長い広場の中心で、

もはや人の形すらしていない、醜悪で巨大な何かが蠢いている姿であつた。

「即興の融合体は、様々な過程を省略して出来たもの。それらを無視した結果、何が起こるかわからない……と、聞いてはいたが。これは酷いのう……まるで甲殻類じゃ」

妖狐の言つとおり、広場の中心で蠢いていた何かの姿は、どこか蟹……いや、缺のデカイ海老の様にも見え。その体色は、やはり、先ほどの融合体同様、紫色の霧と同じ色をしていた。これは多分、融合する際に、周りの大気もある程度取り入れてしまうのが原因であらう。

「じゃがまあ取り合えずは、一度切り結んでみて……ッ!？」

妖狐が、余裕綽々といった様子で、肩に刀を担いだまま、相手へと歩を進めようとすると。突然、その甲殻類にしか見えない巨大な融合体の口元から、細く鋭いオレンジ色の発光体が発射された。瞬間

ドドドドドッ！！！！

もともとひび割れや、地盤沈下の酷かった広場の地面を一直線に切り裂く様に。そのオレンジ色の発光体が、下から上へと振り上げられた……。

このオレンジ色の発光体を通り過ぎた箇所からは、老朽化してしまったコンクリートやアスファルトの地面が赤い熱を持って、信じられないぐらいにドロドロに熔解していた。

しかし、そのオレンジ色の発光体を放たれた当の妖狐は、難無く回避に成功しており。既に近くにあった、五階建ての建物の屋上に移動していた。

「ふむ……狙いを着けられるぐらいには。一応の思考は残っているようじゃが……あれでは無差別と変わらん。視界の中に入った瞬間にぶっ放しおった」

五階建ての建物の屋上から、甲殻類に似た融合体の右横の姿を観察する妖狐。

やはり、蟹というよりは海老……それも、微妙に尻尾が細い事からザリガニに見えなくも無い、その姿は“どうすれば、この様な融合体が生まれるのか？”という疑問を見るものに持たせた。

『おい！ 何を勝手に交戦しているんだ！！ 聞いているのか！？』

ブッン

待機と命令された時から、ここに向かっていている間、ずっと偉そうに通信を入れてくる相手を一方的にあしらいつつ、妖狐は、どう倒すかの対策を練る事にした。

（一度切り結ぶにしても、相手の硬そうな表面に傷をつけられるのか？ それとも、微妙に存在している関節部分に狙いを絞るか？ いや、まだあるな。“五行妖術”の“火気”で焼き殺したり、“土気”の雷で感電死させたり……）

挙げれば切が無いのう……と、胸中で疲れた様に呟きを漏らす。

実際、目の前で広場の中央を陣取っている融合体は、妖狐の敵で

はない……しかし、融合体というのは、不確定な要素がいまだ強いために。さつきから顎で自分達を使っている上の連中が、妖狐の交戦を許そうとしない。

何なのだ、この状況は、面倒にも程がある。

ある意味であり過ぎる選択肢に、妖狐は、今日何度目か分からない溜息を、胸中で吐いた。

(……あゝもう面倒になってきたのう。武器は気に入ってたが他が詰まらんのでは、面白くもなければ早く終わらそうという気にもなれん)

最初の『早く帰りたい』という考えはどこにいったのか？

もはや、五階建ての建物の屋上で、胡坐すらかく始末……。

目の前では、いまだザリガニの様な融合体が、獲物を探そうと蠢いているが、一向に歩き出す気配が無い。どうやら、体に存在している六本の足は、まだ上手く動いてくれない……もしくは、融合する際に失敗して、動かなくなってしまったのかのどちらかだ。

張り詰めていた空気が、どんどん緩んでいくのを妖狐が感じた……その時だった。

「うん？ この感じは……そうか、やっと降りてきたか」

言いながら、妖狐は上空に視線を向ける。

だが、上空の大気には、やはり紫色の霧がかかっていて……いや、突然、その霧が波紋を広げるようにして、円形に霧散していった、そして。

ドオン！！！！

融合体の正面から、少しだけ離れた地点を中心に、凄まじい衝撃波に似た突風が吹き荒れた。

視界の殆どを支配していた紫色の霧が、一気に霧散し、晴れ渡っていく。

その衝撃波に似た突風を生み出した地点を見れば、そこには、

先ほど妖狐が作り出したクレーターよりも、更に大きな蜘蛛の巣状にひびを入れたクレーターを作り出した男がしゃがんでいた。

あまりの出来事に、いまだ狙いをつけるぐらいの思考があった融合体は驚いた様であったが。すぐに本能の赴くまま。再び口元からオレンジ色の鋭い発光体を発射する。

ドドドドド！！！！

と、下から上に振り上げられる発光体。しかし、それは上へと振り上げられる途中……空から落ちてきた男に衝突すると同時に、三股ぐらいに枝分かれして、周辺に破壊をばら撒いた。……が、当の命中した本人には、何の障害も見られない。

（相も変わらず、あの特性は便利じゃのう。自分が普段身に纏っている妖力に馴染んだ肉体が、それ以下の妖力による攻撃を弾くとは……）

妖狐の言うとおり。空から落ちてきた男……童子は、甲殻類に似た融合体のオレンジ色の発光体を。まるで蛇口から出てくる水のように弾きながら、ゆっくりと立ち上がり、歩を進めていく。

右前腕には、『R-01』で取り付けられた“パイルバンカー”が、やたら存在感を強調している。

『妖狐』

「なんじゃ？」

すると、砲撃に似た攻撃を、いまだ何食わぬ顔で受け続けながら歩を進めている本人から。ノイズ交じりの通信が入った。

『この武器を試したい。だから、妖狐は手を出さないでくれ』

「分かっておるよ。勝手にするといいい」

ちよつとした苦笑交じりに返すと、通信は何事もなかったかの様に切られた……。

「本当に、滅茶苦茶な奴じゃな、あやつは」

その呆れたという声音で発せられた呟きは、相手には届かない。



オレンジ色の発光体を肉体の真正面で受け止め続ける童子……しかし、感じるのは多少の衝撃と痛み、そして熱だけだ。また周りの老朽化したアスファルトやコンクリートおも溶かす、この攻撃を受け続けてもなお、身に纏っているスーツや、右前腕に取り付いている武器には、一切の損傷は見られない。

これだけで、相当な高性能を誇っているのが頷けるのだが……それにしても、この蛇口から流れ出る水を、少しずつせき止めていくような、この行進は。誰が見ても馬鹿げていると感ずるであろう。ゆつくりと、一歩ずつ目標へと近づいていく。

目標との距離が、残り10mを切ったのと同時に。目の前の甲殻類の口から、更なる威力と勢いを持ったオレンジ色の発光体が噴出す……が、結果は一切の変動が見えない。

ゆつくりと、また一歩ずつ歩みを進めていく。

すると、目標が砲撃での攻撃を諦めたのか、急に口から出していたオレンジ色の発光体を収めた。

「っ！？」

これまで前から来る衝撃に耐えるために、微妙な前傾姿勢で進んでいた童子が。突然前から衝撃が消えてしまったために、一瞬だけバランスを崩してしまう。

そこに、目の前の甲殻類が、巨大な右の鋏を振り上げ、一直線に童子の頭上へと落下させる。

しかし……。

ドンッ！！ 短くも鈍い衝突音を周囲に響かせながら。その振り落とされた鋏は、童子空いている“左腕”一本によって受け止められてしまった。

だが、受け止めた童子の左腕に手首の関節を圧迫される痛みや。下半身にまで内臓が降りたのではないかと錯覚するぐらいの重い衝撃を与え。踏みしめていた地面には、空から落下してきたとき同様に蜘蛛の巣状のひびを作りながら、ちよつとしたくぼみを作り出して

いた……両の足が、老朽化したコンクリートの地面にめり込む。

「なるほど……確かに融合体だ。妖力よりも、単純な力の方が強い……」

グラグラと震わせながらも、確りと相手がこちらを押し潰そうとしている右の鋏を、鍛え上げられた左腕一本で押さえる童子……しかし、地面にめり込ませていた両の足が、さらに周りのコンクリートをせり上げながら、深く沈んでいく。

流石に、これでは拙いと感じた童子は、ある行動に出る。

上から来る圧力を押さえていた左の掌から、今度は前腕の外側へと押さえる箇所を移動させる。すると、巨大な鋏が、更に童子の頭部へと迫る。

しかし、ここからが童子がやろうとしていた事であった。

「す……」

深く、体内に空気を取り込むために。鼻で空気を吸い込む……。すると、童子の胸が、腹が、次第に一回りほど膨らみを持ち始めた。

そして、動きはまさに一瞬であった。

「ふんッ!!」

これまで溜めていた空気を、一息で鼻から噴出すと。童子は左前腕の外側で押さえていた相手の鋏を、自身から見て左の外側へと振り払うのと同時に。めり込ませていた左足から、右斜めへと踏み込み、そのままの勢いで、この状況を突破した。

童子に右の鋏を振り払われてしまった事で、甲殻類に似た融合体は、右の鋏を標的よりも少し後ろ側の地面に振り落としてしまい、前のめりにバランスを崩した。

その大きな隙を、振り払うと同時に踏み込んだ童子が逃すはずは無かった。

踏み込みの勢いで、突貫する速度も得られた童子は。巨大な相手の懐へと、一瞬で侵入すると。そのまま足の回転数を上げて、遂には融合体の腹の部分へと到達した。

同時に、右腕に取り付いた“パイルバンカー”を後ろへと振りかぶる……先端付近に存在する、四本の爪が、まるで蜘蛛の足が開いたかのように口を開ける。そして

「ふっ！！」

ガンッ！！

前進の勢いと、腰や肩甲骨を上手く使い、童子は“パイルバンカー”の先端を、融合体の腹に打ち付ける……瞬間、蜘蛛の足の様に開いていた四本の爪が、相手を放すまいと、融合体の硬い甲羅の様な腹に爪を突き立てる。たったこれだけで、相手の腹の甲殻にはひびが入ったが、この“パイルバンカー”の真価は、ここからであった。

「すまないな、これも“社会に貢献するための勤め”なんだ」

童子が、取り付いている“パイルバンカー”の内部で、右手に握られているストックを捻るように回転させる……刹那、内部で空砲（ブランク弾）に込められていた童子の妖力が爆発を起こし、その反動で、先端の穴から人の足ぐらいの太さがありそうな鋭い“杭”が、相手の腹の甲殻を打ち貫いた。

ガアアアアン！！！！と、これまで聞いた事も無いような重量感のある音と、硬い何かを、同じ硬いもので打ち砕いた轟音が、辺りに響き渡る。

そのあまりの威力に、融合体の腹の甲殻は粉々に砕け。突出された“杭”の威力の余波に、射線上にあった他の部位も、貫かれるように“風穴を空けていった”。

「……」

童子にとっても驚くほどの反動を感じた“パイルバンカー”の“杭”が、何の問題も無かったかのように元の場所へと戻る……すると、それに連動して、相手を固定するために突き立てていた爪が、ゆっくりと閉じ始めた。

一通りの待機状態へと戻ると、“パイルバンカー”の後ろにある排熱口から、余剰妖力も混じった熱が、ものすごい勢いで吐き出され。外側に備え付けられていた排熱口からは、エジェクション・ポートバケツぐらいの大き

さの空薬莢が外へと吐き出された。同時に、次弾を装填する機械的な音が、童子の耳に入った。

しかし……すでに目の前の標的は、腹から真後ろにまで“風穴”を空けていて、とても再び動き出すとは思えなかった。

「はあ……とんでもない威力じゃのう」

頭に生えた耳を逆立てながら、五階建ての屋上で高みの見物を決め込んでいた妖狐は。あまりの非常識な威力に、驚嘆を覚えるしかなかった。

確かに、あの武器が無くとも、童子は敵を一蹴できた……しかし、それにしたって、作った人間の頭を疑うレベルの威力であった。

実際、あの“パイルバンカー”が真価を発揮した瞬間。童子の後ろでは紫色の霧が一瞬で吹き飛び、その威力を誇示するかのように、風穴を空けた先の建物にまで、“杭”を突出させた余波だけで、ちよつとした破壊をもたらしていた。

“杭”は出れば戻ると言っていた……ということは、インパクトの最大を迎える地点では、どれだけの衝撃がもたらされたのか想像すら出来ない。

「妖力を使うということとは、あやつの馬鹿みたいな妖力も関係しているんじゃないが……まあ、考えても仕方が無いしの。これで帰れるというものじゃ！」

もはや考えるのも馬鹿らしくなってきたと感じた妖狐は。胡坐をかいていた体勢から立ち上がると、そのまま五階建ての屋上から、ゆっくりと飛び降りた。

その嬉しそうな表情には、もう帰った後の事しか考えていないといった考えが見て取れた。

明日は学校……新しく第二学年に上がって、初めて迎える授業の

日。

いや顔にも、ちょっとした楽しみを与えてくれる、その事は。自  
然と、妖狐が童子の下へと向かう足取りを軽くしていた。

## プロローグ（後書き）

次回から本編です。

ちなみに、妖狐のイメージ絵です。

> i 2 9 2 3 0 — 2 3 7 9 <

## それぞれの朝（前書き）

この小説に登場する全てのものはフィクションです、実際の人物・団体・事件等とは一切関係がありません。

## それぞれの朝

まだ四月も初めといった、月曜の早朝……。

おそらく、まだ外には新聞配達員が駆るカブのエンジン音と、野良の動物たちの鳴き声やゴミ置き場を漁る音以外、何も聞こえてこないだろうと言う時間……。

私、九尾妖狐<sup>くわいようこ</sup>は、月曜の早朝という、前日の休みの余韻に浸りながら、そろそろ朝の目覚めを迎えようとしている浅い眠りの時間帯に、出来るだけ瞼を閉じきって、学校の準備をする時間ギリギリまで眠りきってやろうと、無意識下のもと、密かに決意していた。

前日に日干したシーツや布団の温もりに包まれながら、ベットの上で寝返りをうつ……すると、私の体と布の生地から、朝の頭には少しだけ鬱陶しい衣擦れ音が聞こえた。

「うー……」

その鬱陶しい音に、つい、私はいやそうな唸りをあげてしまう……まずい、あまりにも浅い眠りだったために、一生懸命に閉じていた瞼が開いてしまいそうだ。

私は、それを防ぐために、寝返りをうつたために横寝になっていた体を、すかさずベットにうつ伏せる形に移行した……ああ、胸の重みが消えていく。

しかし、そんな安心を得たのも束の間

ジリリリリ！……！！

どこからか、けたたましく非常に耳に障る騒音が聞こえて来た。

目覚まし時計……そう当たりをつけた私は、とりあえず、横を見たら目の前にあった“壁”を、なるべく壊さぬよう、絶妙な足加減を加えながら蹴飛ばした。



ドン！ という“壁”を蹴飛ばす音と共に、目覚まし時計の音も鳴り続ける。

しばらくの様子見……だが、いまだ、どこからか聞こえてくるというより、壁を跨いだ向こう側から聞こえてくる目覚ましの音は、消える気配が無い。

すると新たに、壁の向こう側から“ダダダダダッ！”という、よく映画などで聞ける、自動小銃による発砲音が連続して聞こえて来た。

これも、とてもうるさく、非常に耳に来る音なのだが……初めに鳴った、目覚ましと同時に鳴らされると、もはや鈍器で破壊したくなるほどに鬱陶しい。

「……るさいッー!!」

私は、早朝の早い時間帯だというのに、大声を出しながら、再び目の前にあつた壁を蹴飛ばす……すると、また新たに『I will p . T . you all until you fuck ing die!』という、とてもじゃないが、和訳したくない程の下劣な英語の目覚ましが唸りを上げた……もう、我慢の限界だ。

瞬間、私は床に着いていたベットから、布団を放り投げるようにして飛び起きながら、早朝の時間帯だというのに、下の階に住む住人など気にしない、ズカズカというよりドカドカという、力の籠った歩みで、部屋の窓扉を“バン！”と開けた……下手をすれば、ガラスが割れていたかもしれないが、その時はその時だ。この寮の管理人である“ぬらりひょん”の坊主にでも、請求すればいい。

とにもかくにも、自分の部屋の窓扉を開けた私は、段差の下に置いてあつたサンダルに足を入れながらベランダに出た……同時に、寝起きの寝癖が目立つ、私の長髪を揺らしながら、ベランダの右に顔を向ける。

そこには、私の部屋のベランダと、隣りの部屋のベランダを仕切る、何とも現代的だが脆そうな、白い仕切りが存在していた。

それを見た私は、寝起きでまだ開ききれない眼つきを、鋭利なも

のへと変えながら　　もともと、眼つきが悪いと言われるのだ  
が　　ベランダとベランダを仕切る壁に、ゆっくりと、静かに  
右の人差し指を当てた。

「邪魔ッ！！」

瞬間　　私が苛立たしげに叫ぶと同時に、壁に当てていた右  
の人差し指の先っぽで、紅色とも見間違えるほど美しい、大量の“  
炎”が“爆発”した。

その炎が爆発した瞬間、辺りに暴風とも呼べる衝撃を生み出し、  
私の寝癖が目立つ長髪を後ろに吹かせ、洗濯物をかけるために吊る  
してあった竿竹がどこかに吹き飛び、窓ガラスは衝撃に揺れ“ピシ  
！”と嫌な音を発しながらひび割れを起こした……だがそれは、私  
側の被害状況で、爆発を発生させた向こう側の状況は、もっと悲惨  
だ。

先程まで、そこにあつた筈の現代的な仕切りは、周りに黒い炭を  
残しながら消し飛び。爆発の熱で黒くこげたコンクリートが、衝撃  
や熱が流れた方向を示すようにして、前方に広がっている……うむ、  
流星は私、今日も“五行妖術”の冴えはバツチリの様だ！！

多少汚れはしたが、風通しの良くなったお隣さんのベランダに、  
私は遠慮などせずに入っていく。

そして、再び右を振り向くと、そこには先程の爆発で全てのガラ  
スを吹き飛ばした窓扉が、無残にも存在していた……。

しかし、それでも尚、私にこの様な行動を決起させた目覚まし時  
計の騒音は鳴り止まない。

眉間に皺が寄るのを感じた……米神がピクピクと引き攣つたのを  
感じた。

ああ、私は今、本当に頭きてるのだ……。

現在の心境を再確認すると同時に、私は一気に、そのガラスが全  
て吹き飛んだ窓扉を開けた。

ガシャン！　　と、脆い音を発しながら、ボロボロの窓扉は  
開かれる。

そして、窓扉の向こう側……つまり、お隣さんの部屋へと踏み入った私はまず、ある一点に向かって素早く歩を進めた。

ベランダは原型は残しているが、無残にも黒焦げになり、外と中を仕切るはずの窓扉も、もはや役割をなせない姿となってしまった……。

そして、部屋の中にも、吹き飛んだ窓ガラスの破片が散らばり、一種の襲撃を受けた情景をなしていた……だが、それでも尚、部屋の所々に置いてある目覚まし時計は、騒がしくなり続ける。

しかし、そんな状況下になっていたとしても、この部屋の主は、窓際と壁の角に設置されたベットで布団に包まったまま、起きる気配を見せない。

とんでもなく神経が図太い人物なのだろう。

「毎度毎度……」

すると、そこに、寝巻きを着崩した、寝起き姿の女性という欲情的な格好をした九尾妖狐が、長い髪で俯かせた顔を隠しながら近づいて来た。

しかし、妖狐は部屋の主の枕元に立つ前に、先程からうるさい、部屋の目覚まし時計たちに“キッ！”という鋭い視線を向けた……瞬間。

「うるさいのだ！！ この糞時計どもがッ！！」

同時に、妖狐の足元を中心として、部屋の床全体に、枝分かれした無数の紫電が走った。

その紫電に目覚まし時計たちが接触すると、デジタル表記の時計はデジタルの画面を吹き飛ばし、針時計は、中から黒い嫌な煙を漏らしながら、目覚ましの機能を停止させた。

すると、とたんに静かになる、お隣さんの部屋……しかし、中は既に滅茶苦茶である。

妖狐は、その様子を不機嫌そうに一瞥すると、再び、この部屋の主である、ベットの布団に包まっている男に視線を落とした。

「たく……隣りに住んでるだけだというのに、どうしてこう、毎朝起こしに来ならなくてはならんだ」

面倒臭そうに、朝の白光を反射する、きめ細かな金髪の前髪をかきあげる妖狐……すると、そこから白面と言っても過言ではないほどに白い肌をした、細く整った顔立ちが露となった。

細く、それでいて優美な曲線を描いた眉毛に、少しだけ吊り上った、切れ長の美しい瞳、口元は不機嫌そうに“へ”の字”に今はなっているが、普段は可愛らしく、少しだけ膨れた唇が印象的な口をしている。スタイルはモデルを思わせる、スマートなラインを誇っているが、着崩れた寝巻きから見える胸元は、ウエストと比較するととても大きな部類に入り、形も美乳といっても差し支えない理想的な造型をしている。そして、腰の位置は高く、足もスラリと長い……更に言えば身長は175cmと、非の打ち所が無い、まさに完璧と言って違わない容姿をしている。

そんな完璧な容姿をした妖子に、不機嫌そうに見下ろされている人物はと言つと……。

「ええい！ 起きぬか、この馬鹿者！！」

妖狐が、見下ろしていた人物が包まっていた青いシーツの掛け布団を、勢いよくひっぺがした。

そしてそのまま、ひっぺがした布団を、後ろへと投げ捨てる。

「走るのだらう！？ だから、朝早くから、こんな大量の目覚まし時計を用意したのだらう！！ 起きろ！」

掛け布団が無くなり、その体が露となった人物を、妖狐はユサユサと揺する。

どうでもよいが、相手を揺するたびに揺れる妖狐の胸が、妙に艶めかしい……これは多分、寝る時にブラを着けなかったのだらう。

「う、うう……」

「ほれ、起きろ！！ 木偶の坊！！ 起きろ！」

しかし、どんなに妖狐が、その厚く彫刻を思わせるような相手の胸を揺すったとしても、一向に起きる気配がない……このとき、妖狐は心底面倒くさいと感じた。

故に

「いい加減に起きろ、この馬鹿“鬼”!!」

瞬間、妖狐が地面につけていた足から、相手の胸に置いていた両手にかけて、瞬く紫電が走る。

バリバリバリ!

という、無数の破裂音が、今まで起きてこなかった相手の人物を中心に響き渡った。

土気という五行の要素のうちの一つを使った、地熱のエネルギーを紫電という電力に変換させた、軽い“五行妖術”なのだが、明らかに、その紫電の光量は、人が直接浴びせられて良いものではなかった。証拠に、無数の紫電を浴びせられているベットのシーツやマットなどが、化学繊維を燃やしたときの煙を発生させながら、その焦げ目を広げていた……が。

「ぐぬぬぬぬッ!!」

「……」

「のおおおりゃあ!!」

「……」

どんなに妖狐が齒を食いしばっても、気合の叫びを上げ、紫電の威力を上げたとしても。

ベットで寝ている、筋肉の鎧とでも表すような、屈強な肉体をした男を起こすことはできない……。

次第に、妖狐が発生させる紫電の量が、どんどん減っていき……。

「ハア……ハア……クソつたれめ」

仕舞いには、額に汗を浮かべながら、妖狐は息を切らせてしまった……。

既に、この部屋には様々な物が焼け焦げた臭いと、そこから発生した黒い煙が充満していた……が、それでも男は、起きる気配を見

せない。

「無駄に打たれ強い肉体をしおってからに……」

言いながら、妖狐が、そのガラス細工の様にきめ細かな長い金髪を、ベットで寝ている男にしなだれかける……というより、完全に朝一番の寝起きで全力を出したせい、疲れたように、額を前かがみで、寝ている男の胸板に預けた。

すると、今まで寝ていた男に変化が起きた……。

「うゝ……あ？ ああ、妖狐か……おはよう」

なんと、これまで、大量の目覚まし時計や。

ハートマン軍曹のありがたい『I will p . T . you all until you fucking die!』のお言葉。

さらには、妖狐の“五行妖術”ですら目を覚まさなかった男が、言葉を発したではないか。

その様子に、額を男の胸元に預けていた妖狐は、顔を赤くするのではなく。

「毎度毎度、どれだけ寝起きが悪いのだ!! おぬしは!!」

再び、大量の紫電と共に、寝起きの男の視界が、真っ白に染まった……。

もはや迫撃砲をぶち込まれたのか？

室内で爆薬でも使ったのかと言うくらいに、荒れかえっている自室の惨状に、男は特に反応を見せず。

寝起きから、すぐにトイレに行き、早朝のロードワークへと出かけるため。ランニング用のTシャツに、軽い素材を使った短パンに着替えた男は。男の体格には、いささか狭い玄関で、陸上用の軽量化されたシューズを履きながら、わざわざ朝早くから起こしに来てくれた妖狐に振り返った。

「じゃあ、行つて来る」

「おお、途中で二度寝をかますでないぞ？」

おそらく、寝るときに下着は着けない派の、パジャマ姿の妖狐は、シューズの靴紐を結び終え、厚い鉄製の扉のドアノブに手をかけた男に、面倒くさげに“いてらっしやい”の言葉をかけた。

男は、そのまま妖狐から振り返り、ドアノブを開け、寮の廊下へと出て行つた。

その様子を見送つた妖狐は、自身が荒らしに荒らした男の自室を、あくびをしながら歩きつつ、台所の近くの台に設置されていた、部屋の子機の子機を手にとつた。

そして、手馴れた手つきで、頭に記憶されていた番号を押す……。番号を押し終わると、妖狐は、子機に耳を当てながら、コールの音を、眠そうな瞳のまま聞き続けた。

しばらくすると、向こうが電話に出た。

『もしもし？ どうしましたか、こんな朝早くから……』

「ぬらりひょんか？ すまぬな、朝早くから。とりあえず、“今日も”頼むぞ」

子機から聞こえてきた、相手方の声は、どこか、少年のようなあどけなさを感じさせながらも、それでいて、朝早くということ、眠そうな声であつた。

妖狐は、そんな相手のコンディションなど気にするのも億劫といった様に、一方的に相手に向けて言いつける。

『またですか……これで何回目ですか？』

「うるさい。寮長とは名ばかりで、碌に仕事をせん貴様に、私が自ら仕事を与えてやっているのだぞ？ 感謝こそされ、咎められる覚えは無いわ」

『別に咎めてませんよ。ただ、新学期が始まって、部屋が隣同士になつた日から、もう四日連続ですよ？ 毎朝、所要する妖力を半分以上くらい使われる身にもなつてくださいよ』

「知らん。だいたい、貴様が部屋割りをしたのであろう？ だつた

ら、貴様が最後まで面倒を見ぬか」

『童子こどうさんの隣になりたいってゴネたのは、妖狐さんじゃないですか……』

「私はゴネてなどいない！！　むしろ、皆のために思って、あやつの隣になつてやつただけだ！！」

『はいはい……はあ。これは本気で、もう一度部屋割りを考えないと駄目かなあ』

「な、何を言っておるか！！　私以外の者が、あやつの隣で住むことになってみる！！　あやつが夜な夜な無意識に発する大量の妖気に当てられて、最悪死人が出るのだぞ！！」

『そんな事を言ったら、上の階や下の階の人だって、もうご臨終してますよ……けど、してないでしょ？　見苦しい嘘を付くのはやめて下さい。“三大妖怪”と呼ばれた、ご先祖様の名が泣きますよ？』

「嘘ではない！！　あやつの……」

これまで高厚的な態度を取ってきた妖狐であつたが、ぬらりひよんと呼んだ、寮長の呆れた物言いに、どこか、その少しだけ吊り上つた、切れ長の美しい目を焦つた様に見開かせながら、更なる言い訳を発しようとするが……。

「妖気に長いこと晒されては……うん？」

妖狐が耳に当てていた子機から、向ここの相手が通話を一方的に切つたときの、寂しいというより虚しい電子音が聞こえてきた……。

しだいに、妖狐の肩が、わなわなと震え始める……。

顔を見れば、その白く艶やかな眉間に皺を寄せ、口からは、妖狐の体内からもれ出る妖気が、青い炎となつて不気味に揺らめいていた。

「なんなのだ……今の会話は」

言いながら、明らかに怒の感情を露にさせている妖狐が、持っていた子機を、再び五行妖術の土気を用いた電気でショートさせる……嫌な臭いがする煙が、子機の隙間から漏れ出てくる。

「まるで、この私が、あの馬鹿“鬼”から離れたくないと、ダダを



捏ねているかのような、情けない感じだったではないか……」

すると今度は、妖狐の女性にしては長身の体から、無数の紫電が発生し始めた……そして。

「あのぬらりひよんのクソ坊主がああああ!!」

実は寝起きの際には不機嫌真つ盛りな妖狐が、理不尽な怒りの怒声をあげながら。再び、先ほど朝のロードワークへと出かけた男の部屋を、無数の紫電で滅茶苦茶にし始めた……。

その時、寮長室で、軽く寝なおそうと考えていた、明らかに、まだ青年にまで達していない体系の男の子“ぬらりひよん”は「ああ、また、これで僕の一日は決定するのか……」と、再び包まった布団の中で、深いため息を吐くのであった……。

春真つ盛りの、暖かく気持ちの良い朝……。

ここは、とある引越し準備を整え、荷物を梱包し終えたダンボールの山が築かれた、寝具以外、何もない部屋……。

カーテンを取り外された窓からは、床のフローリングに、快晴の朝の日差しが差し込んでいた。

既に、この部屋で唯一置かれた、寝具であるベットの布団には、これまで睡眠を取っていた部屋の主の姿は無い。なぜなら、部屋の主は、寝具であるベットからずり落ち、犬畜生よろしくの床寝を決め込んでいたからだ……心なしか、床が固いせいで、寝顔が気持ち良さそうではない。

すると、このダンボールの山が築かれた部屋に、何者かが扉を開けて、ズカズカと入り込んできた。

突然の侵入者……その姿は、線の細い体に、着物と割烹着かっぽうぎを身に纏った、どこか、儚げな雰囲気醸し出す女性。手には、凶器なのか……フライパンとオタマという、いかにも、これから何かをするといった装備を所有していた。

侵入者である女性が、その着物からでも分かるぐらいに“無い胸”を反らし、長くも繊細そうな黒髪を揺らしながら、ゆっくりと息を吸い込み始めた……そして。

「朝ですよー！！！！ 起きなさい！！」

ガンガンガンガン！！！！ と、持っているフライパンとオタマを叩きまくる侵入者！

その突如、睡眠中の耳を襲った騒音に。これまでベットがあるにも関わらず、床に身をあずけ、睡眠を取っていた部屋の主が「く、空襲ですかっ！？」と、時代錯誤も良いところの台詞を吐きながら、飛び上がるように跳ね起きた。

「お、お母さん！！ 敵はどこですか！？」

跳ね起きた部屋の主は、あたふたと周囲を忙しく周囲を見回しながら、その乱れた浴衣を更に乱れさせていく……。

この朝一番の様子に、フライパンをオタマで殴りつけていた、線の細い女性は「はあ」と深く、それでいて呆れたようなため息を漏らす……。

「敵などいません。いるとしたら、年頃である“箒”の娘が、恥も何もへつたくれもない姿を晒すのを見て、呆れている母親だけです」  
「……へ？」

言われて、年頃である“箒”の娘が、自身の姿を確認するために、視線を下に降ろすと……。

「ッ！？」

顔を真っ赤にして、肌蹴たせいで、胸が丸見えになっていた浴衣の胸元を正した。

「そこだけではないわよ？ ほら、下なんてもう隠すきないでしょ？」

さらに、年頃である“箒”の娘は、浴衣の上前と下前が完全に“後ろ”へと流れている事に気づき、急いで、それを正した。

「帯なんて、ほら」

年頃である“箒”の娘の母は、さらにベットの方に、持っていた

オタマの先を向けた。

そこには、本来なら部屋の主が占領している筈であつたベットが、もはや脱ぎ捨てられていた帯に占領されている光景があつた。

それも、年頃である“筈”の娘が、急いで回収し、正した浴衣に締めていく。

「も、もう無いよね？」

朝一番から畳み掛けるように、様々な事を指摘された、年頃である“筈”の娘は、心配そうな上目遣いで、母である女性に問うた……。

「別に無いけど……とりあえず、速く顔を洗つてきなさい。そうしたら、すぐに朝ごはんを皆で食べるから、急ぎなさい」

「は、はい！」

「返事は確り！」

「はい！」

「よろしい……じゃあ急ぎなさいな。皆、アナタ待ちなのよ、鏡花」  
急げと、自身の母に促された鏡花こと、阿倍鏡花は、正したばかりの浴衣と、寝癖だらけの、母と同じ黒髪を揺らしながら、ダンボールの山が築かれている部屋を出て行つた。

「本当に、あの娘を修行にやつて、大丈夫なのかしら……？」

鏡花の母 安部春花は、扉の向こうの廊下から聞こえてくる、娘の騒がしい足音に、悩ましい仕草で、頬にオタマを持った方の手を当てながら、本当に不安そうな呟きを漏らした。

うわ……ひどい顔。

私の家で、父の修行を受ける皆が共同で使っている洗面台とは違う。

私やお母さんが使う、真っ白な汚れ一つ無い洗面台の前で、自分の寝起き顔に、思わずうな垂れるような氣分に陥ってしまう。

だって、花も恥らう年頃の娘が、目脂や寝癖を盛大にアピールさせた、何の可愛げも無い寝起き顔を晒しているんだもの……うな垂れても、仕方の無いことだと思っただ。

「どうしてこう……私って、寝相が悪いのかな？」

口から自分に対しての愚痴を零しながら、私は急いで、洗面台の棚からドライヤーや櫛を取り出し、ひどい寝癖を直していく……。

私の髪は、本来なら真っ直ぐな長い黒髪なのだけど……ああ、寝癖が全然治らない。

いくらドライヤーや櫛で、荒れに荒れた寝癖を梳いたとしても、再びヒョコツと、髪の毛が跳ねてしまう……も、時間が無いのに！そう考えた私は「こうなったら、朝シャンでも浴びようかな」と、時間に縛られない、大胆な決断をした

……………。

……………。

……………。

……………。

結論から言えば、気持ちよかったです

朝一番のお湯って、どうして、こうも人の体を覚まし、癒してくれるのでしょうか……。

ポカポカと湯上りの陽気に、暖かい気持ちになりながらも、私はすぐに、当初の目的であった、寝癖直しに取り掛かった。

ふふふ、こうなってしまったては、あれだけ手強かった寝癖も、私の敵ではありません。

ドライヤーのモーター音と共に、濡れた髪の毛を乾かし、櫛で梳いていく……。

別に、習慣づいたことなので、難しい事ではありません。

よし、いつも通りの出来に仕上がったぞ！

前髪は、私の眉毛辺りで、綺麗に切り揃えられ、唯一の自慢でもある、真っ直ぐに流れる、長い黒髪も、至って綺麗にセットされている。友達から、ハッキリとした綺麗な丸い目だねと言われた通り、

あれだけ眠そうだった目も、今はちゃんと見開かれてるし。

これなら、安部家の一人娘としてだけではなく、ようやく修行に出る一人の“見習い陰陽師”として皆の前に出ても恥ずかしくは無いね。

寝起き姿のだらしない格好を、確りと直した私は。意気揚々と、これまで寝癖を直すためにいた、風呂場の脱衣所から出ようとする……。

引き戸の扉前まで近づくと、モザイクガラスの向こう側から、誰かの影が、引き戸を開こうとする仕草を見せていた。

すると、その影が、ガラガラと引き戸を、ノックも何も無しに開いた。

そこに現れたのは、私を、そのまま大人まで成長させたかのような人物。

お母さんであつた。

「ごめん、お母さん。もう、準備できたから、今すぐ行くよ！」

「待ちなさい」

「へ？」

お母さんのすぐ隣を、私が通り抜けようとすると。

お母さんが、私の手を掴み、皆が待つ食堂へと行くのを静止した。そして、手を掴んだまま、私と向き合い、しばらくの間、じつ々と、真剣な表情で見つめられる。

「よし、確り寝癖も、だらしない顔も直したみたいね」

「お母さん心配しすぎ！ 私だって、もう修行に出ていいって、お父さんに許しを貰うぐらいに成長したんだよ。あまり子ども扱いしないですよ！」

本当に失礼したらありやしない。

私だって、もう背も150後半にまで成長したし、一人でラーメン屋にだって入れるぐらいに、“大人の女性”になったのに……この扱いは無いよ！

「別に、子ども扱いはしてないわよ……。でも、アナタは変なところ

るで、色々抜けてるからね」

「もー酷いよー……」

「腐らない腐らない。とにかく、食堂に行きましょう。皆、もうお腹が空いて、我慢の限界に来てるかもしれないから」

「はい」

何か微笑ましそうに、私のことを見る、お母さんの目に「あ、これ分かってくれてない」と、私は内心で察した。

あーあ……どうしてもう、お母さんは私のこと子ども扱いするんだろう？

自分だって、胸が小さいくせに……む、胸が小さいくせに。

ははは……思いのほか、自分にもグサッとくる言葉だね、これ。

我が家の食堂は、まるでお寺の住職たちが、集団で食事を取るような、純和風の畳が敷き詰められたお座敷だ。

そこに私は、これもお寺の様な廊下から、襖を開けて入っていく。

「おはよう、お父さん。皆も、待たせてゴメンね」

「早く自分の場所に座りなさい、鏡花。お前のせいで、皆の朝食を遅らせてしまっているのだからな」

「はい」

“食堂”と呼ばれる、皆が集まっている座敷へと入ってきた私に、いきなりご機嫌斜めの声をかけてきたのは。威厳たつぷりの顔をした、まだ40代だというのに皺が目立ち始めている、私のお父さん、あべのたいきょう安部大鏡。

私のお父さんは、この日ノ本に数多く存在する、陰陽師の長で、かの有名な安部朝明あべのせいめいの直系の子孫だと言われている……というより、国にも、そう認められているので、まず間違いない。ただ、何代目かは、いまだ不明だということらしい……理由は、どうやら文献などの記録が、あまりにも古すぎて、読み取れなくなっていたためと

か、家系図自体、すでに、この世には無くなっていたからだそうなら、なぜ直系の子孫だと認定されたのかというと、どうやら、その血に混じった“神通力”や“霊力”が、高祖父の代の頃に測ったところ。大昔に、お父さんや私のご先祖様である、安部朝明あへもんじゅいんが行したといわれる、安部文殊院から測定されたものと、一致したからだと言うからだ。

更にいえば、その時代……世界中の人間と“妖怪”が、自分達の生存のために争い、その後おとずれた、世界の危機のために立ち上がり、協力した時代に、最強の陰陽師として、高祖父が名を馳せていたのが、最後の決め手となったのだという。また、陰陽師にも、様々な家が存在するが、現在の代でも、阿部家のお父さんが、全てにおいて最強らしい。

だけど……。

「なんだ鏡花？ そんな、お父さんを残念な眼で見る前に、早く席に着いたらどうだ？」

この、どうみても、その辺の休日中のオッサンみたいな格好をした、40代の男が、当代最強の陰陽師だとは思えないんだよね。白い無地のＴシャツに、着古された甚平じんぺいって、絶対、娘に好かれる気ゼロでしょ。

「別に、何でもないよ」

でも、それでも当代最強と謳われる陰陽師で、現代の陰陽師たちを束ねる長なのだ……ついでに、私の父親でもある。

この食堂に集まっている修行中の方々には、仏様にでも見えているんだろうな……陰陽道いんやうだうって、仏教とか儒教は関係ないんだけどね？

心の籠かごっていない返事を返しながらも、私は、上座に座る、お父さんと、まだ来てないお母さんの席を曲がった、修行中の方々の中でも上座に最も近い席に正座で座った。

ふう〜ようやく朝ごはんだよ。

メニューはご飯に鮭にワカメと豆腐の味噌汁……そして、三枚の

海苔だ。

あゝ、私も、洋風なスクランブルエッグとかで朝を迎えられるようになりたいな。

私が、毎日ヘルシーにも程がある、朝の献立にがつかりしていると、着物に割烹着を着けたままのお母さんが、この食堂に入ってきた。

「お待たせしました、お父さん」

「おお、ようやく来たか春花。ほれ、早く隣に座りなさい」

「ふふふ、お弟子さんの前でしょ？ そんな嬉しそうにハシャがないの」

言葉とは裏腹に、高校生の娘をもつ一児の母とは思えない、若い微笑みを見せるお母さん。

それを見て、更に嬉しそうに、鼻の下を伸ばすお父さん。

娘として、両親が仲が良いのは嬉しいことなのだけど……正直、毎日見せられると、鬱陶しいにも程がある。

それにほら、他の弟子の人たちも、若干『またかよ、くそ……』

みたいな顔で、苛立ちを見せてるし。迷惑だよ、本当に。

「では、皆、席に着いたようだし、朝食にするとしようか」

お母さんが、所作の正しい正座で、自分の作った朝ごはんの前に座ると、お父さんが、朝食を始める言葉を発した。

我が家の食事は、本当に静かだ……。

もう、静かとしか言いようが無いので、その辺は語ることもありません。

ですが、朝食を負え、皆が片付けに入っている最中、私は、お父さんに呼び止められてしまいました。

「鏡花よ、少し待て」

「え、なに？」



自分が使った食器類を纏めて、お母さんが中心にまわしている、調理場の方へと行こうとしていた私に、お父さんは胡坐をかき、背を向けたままの姿勢で、真剣な声音で言葉を続けた。

「お前は、確かに“神通力”や“霊力”だけを見れば、私以上の素質を持っている」

「ふふん それはどういたしまして！」

「威張るな！ それ以外は、その辺のひよっこにも劣るくせに！」

「な！ それは言わないでよ！ 私だって、努力してるんだから！」

「努力していたとしても、占いの一つも出来ない陰陽師など、聞いた事も無いぞ！」

「う、占いなんか、現代に必要ないじゃない！」

「馬鹿もの！ 基本中の基本だろうが！ これくらいの事は、150年前の、インチキと呼ばれていた陰陽師たちでも出来たことだぞ！」

「うぐっ……！」

それを言われてしまうと、何も言い返せない……。

今の“妖怪”や西洋の“妖魔”たちが、ただの怪談話や、都市伝説の類と認識されてしまっていた時代……私達人間が、科学では証明できない事を、頑なにうさくさいやら、合成写真やらと馬鹿にしていた時代。もう、今から150年も前の話なんだけど、確かにその時代にも、小さくはあるが、陰陽師の組織は、細々と存在していた。

その時の話は、歴史の勉強とかで習ってたけど。

今の時代から考えると、信じられないぐらいに、陰陽師や霊能力者・超能力者などといった存在が、インチキに捉えられていたそう。

そんな時代の、国すらも認めていなかった陰陽師たちでも、占いは出来ていたらしい。

なのに、陰陽師が国からも認められ、一端の“戦力”や“財産”

と捉えられている時代に生きる私が、占いなどといった、基本中の基本も出来ないというのは、一言でいえば“落ちこぼれ”なのだ。  
「それだと言うのに、お前という奴は……自分の力の強さに溺れて、他の修行者たちと比べ、基本的な技術に対しての認識が甘すぎる！」  
「で、でも！ 火をバババーって起こしたり！ 水をドバババーって出したりするのは。私、他の人たちにも負けてないもん！」

これは、“落ちこぼれ”の私にとって、唯一の誇れる所なのだ。  
“神通力”というのは、修行する事で、後天的に力を強くしていくるもので、先ほど関係ないといった、仏教にある神秘的な力の事を指すらしいのだけれど……昨今の世の中では、陰陽師たちが“妖怪”たちと争っていた時に改良を加えていったお陰で、かなり認識が変わった力のことなただけ。六通神？ だっけ？ それが、確かこう……色々種類があつて、超能力の様な現象とは違った……：「ごめんなさい、座学を確りと受けていなかった私には、説明が出来ません。ただ、私に分かるのは、空をビューンと飛んだり、速く動いたり、相手の心を読んだりする能力ってだけです……うう、ごめんなさい。」

そして、霊力っていうのは、“妖怪”にとつての“妖気”や“妖力”と同じ、先天的にある、不思議な力の事で。これが大きければ大きいほど、神通力で使う能力の凄さが上がったり、陰陽師の技術で行う技の範囲や強さ、効果が上がったりするんだ。

この二つの能力が、私はもともと、生まれたときから強かったみたい。

えへへ、つまり私は“落ちこぼれ”であると同時に“天才！”というわけ……「確り制御できなければ、ただの宝の持ち腐れだ！」  
「うぐ……」

この会話二度目の、それを言われると反論が出来ない……。  
そう、そうなのだ……私の力は、確かに他の人に比べて“べらばー”に強い。

だけど、力を一箇所に集束させたり、絶妙な力加減で、一箇所だ

けに力を加えるなどといった、繊細な事が出来ないのだ。

「全く……お前は、全然、今日までの自分というものを振り返ってこなかったのだな」

「だ、だって。なぜか私、力を制御しようとすると、変に力が入っちゃって……」

「それは集中力が足らんからだ。お前は昔から、座禅すらもまともに出来なかったからな」

「それは言いすぎだよ！ 私だって、座禅“は”出来てたもん」

「ふん、だが“は”だろ？ 何を言われても、本来なら言い訳など出来る立場ではないんだぞ？」

「……はい」

シユンとする私……。

ああ、どうして私は、こう、色々抜けてるんだろう……。

お母さんは、私のことを変なところで抜けてるって言ってたけど、あれは確実に、我が子鼯鼠の目線だ。

纏めた食器を手に持ちながら、落ち込んでいる私に。

相変わらず、胡坐をかき、背を向けたままのお父さんが、改めて真剣な声音で話し始めた。

「だがなあ、お前も、今日から修行のために、“妖怪たちの学園”に通わなくてはならない」

「うん、それは楽しみだよ！ ご近所以外の妖怪の人たちと触れ合うなんて、私にとっては初めての経験だから！」

「まあ、確かに、今の世の中の若者は皆、お前と同じ認識かもしれないがな」

「え、何が言いたいのか？」

「お前は確かに、何も考えないで戦えば強い。それは認める……だがな、これがもし、何らかのトラブルで妖怪たちと戦う様であれば、お前は確実に苦戦する。更に相手が悪ければ、ただの“餌”にしかならん。また更に言えば、“鬼”からしたら、お前は格好の獲物だ」

「そこまで言わなくても……」

「これは事実だ。私も昔、あの学園で修行をしたが、何度死に掛ける思いをしたか……思い出そうとしても、多すぎて思い出せぬぐら  
いだ」

「言いすぎって事は？」

「ない。確かに、今の世の中は妖怪も人間も、争いという争いをしようとしてもしないし、差別もしない。むしろ、楽しんで共存しているくらいだ……だがな、それは社会の眼があるからというのも、また事実。しかし、あの学園には、世界中の妖怪や妖魔が集まっていて更に言えば、まだ、社会というものを理解していない若者たちもいる」

お父さんの言っていることは、本当のことだ。

現代社会、人間と妖怪は、比較的友好関係の中で生活している……それはもう、近所に妖怪の方が住んでますというくらいに。

だけど、そんな社会に出ている妖怪たちは、学園で社会に出ていると許可された方たちだけなのだ。

つまり、これから私が通うことになる学園は、妖怪たちに社会のルールを教える場所でもあるのだ。

「妖怪や妖魔は、お前のような高い霊力や神通力を持った者を喰らうと、自身の力を増すことが出来る……今でこそ、そんな残忍な事は行われなくなったが。お前が生まれる前は、週に一回は、人間同士の殺人の様に事件になっていたのだ。当時ほど危険ではなくなつたが、そんな中に、お前は行くのだぞ？ 一年は遅れているが」

真面目な、本当に真面目な話をしている最中に、このオッサンは、人の痛いところを的確に突きやがった……もう、別に、仕方ないから遅らせただけなんだもん！

ただ、霊力や神通力以外の項目があまりにも低すぎて、修行を始められなかっただけなんだもん！

はは……私が悪いよね、うん。

だけど、私にも、お父さんには言いたい事がある。

「でも、今は、そんな悪い人はいないんでしょ？ だったら、普通

に学園生活を満喫するだけで良いじゃん」

「ふん……お前は馬鹿だな」

酷い！

“馬鹿か？”とかじゃなくて、実の娘に向かって、この親は馬鹿だなと、やんわりと断定した！

「何でよ！ 時代が違っただから、お父さんが考えている様な人なんて、少数かいなかのどっちかだよ！」

「その少数が、お前を狙ったらどうする？ お前は、自分で自分の身を守れるというのか？ もし、相手が、大妖の息子だったり娘だったりすれば、お前など、一瞬で食い殺される」

「こ、怖いこと言わないでよ……不安になっちゃうじゃない」

「私は、それほど、お前が心配なんだ。真面目に基礎に取り組んでいれば、これほど心配しなくても済んだ筈なのだ……だが、それをお前は」

「あゝもういい！ 聞き飽きたよ、その言葉は！ とにかく、満喫するのは良いけど、しっかりと警戒だけはしておけて事でしょ！？ そんなこと、私にだって出来るもん！」

「あ、待て！ 話は終わってないぞ！」

いつまでも、うだうだと同じ様な事を言われるのは、堪ったものじゃない……。

もう頭にきてしまった私は、お父さんとの会話を強引に切り上げて、そそくさと持っていた食器を片付け、新しい学び舎へと登校するための仕度に向かった。

だけど、もし、このお父さんとの会話を、もっと真面目に私が聞けていたら……。

この後に待っていた、私の学園生活が、もう少し良いものに変わっていたのかもしれない。

## 隠された学園

「はあッ！　なぜ、私が、おぬしの馬鹿に巻き込まれなくてはならんだ！」

「すまない……だが、お婆さんが、重い荷物を背負っていたんだ。可能な限り持つてあげるのが、俺たち若者の……」

「“たち”を付けるな！　それで遅刻しそうになるのなら、おぬしだけでやっていればいい！」

「すまない……しかし、あの方々は、今の時代を築いてくれた、いわば“恩人”……」

「ええい！　おぬしの恩返し癖は知っているが、今は、そんな無駄話などせず、走ることに集中しろ！」

「すまない」

こいつは、本当に……。

今、私こと九尾妖狐くおふようこと、隣を走る酒天童子しゅてんどうしは、絶賛遅刻寸前のチキンレースを慣行中だ。

原因は、隣を走る、この無駄に体がデカく厳つい木偶の坊、または“馬鹿鬼”にある。

私たちは、先ほどまで、いつも通り、かなり時間に余裕を持って、学園まで登校している途中だった。

だが、こやつが、偶然、歩道橋を登れないでいる、重い荷物を風呂敷に包んで背負っている婆を見つけての……“大丈夫ですか？

よければ、俺が持ちます”とか抜かして、無駄な敬老精神を発揮しおったのだ。

こやつには、昔から変な癖があつての。

一度、自分が恩を感じた相手には、全力で恩返しをするという、“鬼”にあるまじき癖があるのだ。

そのせいで、結局こやつは婆の家まで、その“婆ごと”運んでい

ったという訳だ。

結果は、この通り。

せつかく、かなりの時間の余裕を持って出たはずなのに、遅刻寸前の緊張感を味わうという感じだ。

「本当にぬしわ！　どうしてこう、後先のことを考えられんだ！」  
「すまない」

先ほどから、すまないの一点張りの童子に、私は悪態をつきながら、学園まで続く、道路道を走っていく。

くそ……こういう時に、妖術や妖力を使えば、こんな無駄に体力を使う行為など、せんで済むのに！

国家権力め……何が、有事の時以外、指定された場所以外での妖力や霊力の使用を禁ずるだ！

そんな事を、心の中で吐き捨てながら、私と童子は、なかなか都市開発の進んだ街から、少し人里離れた様な、山道へと入っていく。まあ、山道といっても、ちゃんと舗装された道路もあるし、ゆるやかな坂を作り出すために、かの有名な“いろは坂”の様に曲りくねっているのだが。

「ええい！　なぜ、こんな面倒な道を作ったのだ！」

「仕方ないだろ。当時の人たちが、自分達の生活を……」

「うるさい黙って走っておれ！　はあ……これでは、時間に間に合わないか！」

曲りくねった坂道を、私と童子は馬鹿正直に走り続ける……。

確かに、私たち“妖怪”……いや、私と童子は、妖怪と人間の“混血”なのだが、それでも、普通の人間よりも強靱な肉体を有している。

証拠に、先ほどから、私達が走っているスピードは、オリンピックの短距離走での世界記録を軽く超えるスピードだ……おそらく、100mの直線の道なら、5秒とかからず走りぬいて見せるのだから、いかんせん、ついすっかり妖力を使ってしまうと、公僕の連中が出てくるので、これ以上のスピードは出せぬのだ。

更に言えば、この加速しづらい道のり……ああ、これは遅刻確定かのう。

そんな風に、私が内面だけではなく、外見からも落ち込んだ雰囲気醸し出していると……。

「どうした妖狐？ そんな暗い顔をして……」

「おぬしのせいだろうが！ 遅刻をしたら、反省文を書かなくてはならんだぞ！？ それも原稿用紙二枚分！」

「すまない……」

「謝るぐらいなら、この状況をなんとかしてみせろ！ 誰のせいでこんな急がなくてはならなくなったのだ！」

私が半ば、当然の八つ当たりを童子に浴びせていると。

突然、こやつのいつもは眠そうにしている表情が、真剣なものへと変わった。

「分かった、まかせてくれ」

「は？ て、ちょ！ 何をするのだ！？」

私が何を言っているのだ、こいつは？ という、呆れた表情を、後ろを走っていた童子に向けていると。いきなり、童子が走る速度を上げ、前を走っていた私のことを、その鉱石の様に頑強に鍛え上げられた両腕で抱え上げ始めた。

走っている最中に、いきなり抱き上げられてしまったがために、私は驚きの声を発してしまう。

いわゆる“お姫様抱っこ”という持ち方で、私を抱えたままの童子は、これまでとは比べ物にならないスピードで、坂を走り始めた……こやつめ、今まで変だと思っていたら、私に合わせていたな？

「少し、飛ばすから、掴まっててくれ」

「もう掴んでおるよ。というより！ 最初から、こうすれば良かったのだな！」

あまりのスピードに、私の長い金髪が、風になびき、童子の右腕を撫でている。

こやつの太く頑丈そうな首に、私は両腕を回しながら、もはやス



ピードカメラの倍速の様に風景が流れていく様を眺めていた。

そして、ふと、こやつの顔を、抱きかかえられた状態のまま見上げる……。

ザンバラに眼にかからぬ程度に伸ばされた、白い前髪に、刈り上げたように短い、それ以外の黒髪……。いつも眠そうにしている瞳は、今は私を遅刻させまいと真剣に見開かれており、なかなか眼光鋭い、いい眼をしている。眉毛は黒くて少し太く、鼻はまあ、見れる程度には筋が通った、いい鼻をしている。輪郭は、体もデカイ事から、顎も頑丈そうに出来ているのだが、基本的に引き締まっているため、あまり太くは見えず、むしろ普通の輪郭の見える。

「うん？ どうした妖狐？ 少し速すぎたか？」

そんな風に、こやつの顔を観察していると、不思議そうな視線で見下ろされてしまった。

こやつの腕の中で収まっていた私は「別に、心地よい速度だ」と、心なしか、自然と出てきてしまった微笑みを向ける。

まあ、強いて言えば、“お姫様抱っこ”のせいで、少し、履いている短いスカートからパンツが外に見えているのではないかと思うぐらいなのだが……妖怪である私としては、特に気にもしない事なので、あえて口には出さない。

そうこうしていると、いつの間にか、童子の奴は坂を上り終え、今度は下りへと入っていた。

相変わらず、妖怪である私からみても、尋常ではない強靱な肉体を持つている童子は、下り坂であろうと、カーブであろうと、走る力を緩めず、柔軟かつバネの様に機能する足首やつま先を駆使しながら、人ではありえない速度で曲がったり、下り坂を下っていったりしている。

童子が走り抜ける度に、周りを緑で染めている木々が揺れ、葉を散らしていく……。

「もう少しで山を越えられる、そうしたら“結界”だから、そこで一旦降ろすぞ？」

「分かっておる……はあ、面倒臭いのう。いちいち、結界を通り抜ける事で、出席を取るなど」

「そう言うな。人間側の学校では、出席は教室に集まったときに点呼で取るそうだから、むしろ楽な方だと思う」

「そうは言ってもな。これでは、学校をサボる事も出来ぬではないか」

「サボる？ いや、この出席の取り方でなくとも、それは出来ない事だろう」

「分かっておらぬな、おぬしは。世の中には、出席を取るときに、別の者に返事をさせると言う……」

「そろそろ着くぞ」

他愛も無い会話を続けていると、いつの間にか、童子は山越えを果たしていた様だ。

童子に抱きかかえられたままの私の視界に、山を挟んだ隣町の“寂れた”風景が広がる……。

ここから先は、私とこやつが通う妖怪学園の学び舎へと続く、結界の境目だ。

という訳で、童子が私の事を、ゆつくりと地面に降ろした。

「ふむ、では、行くかの」

アスファルトの地面に、学園指定のローファーで足を着けた私は、持っていた鞆を、肩に担ぐように乗せながら、視界に広がる、隣町の“寂れた”風景へと歩を進める。童子も、私の後に着いて来る。

しかし、そこで私は、ある奇妙な光景を眼にした……。

「なんだ、あれは？」

「うん？ うちの学園の制服を着ているみたいだが……この匂いは」

「ああ、これは人間のものだな」

それは、結界の境目付近を、不思議そうな表情で徘徊する、うちの学園指定の女子制服を着た、“人間の女”の姿であった。

あるえ〜〜〜？

おかしいなあ、確かに、この辺の筈なのになあ……見渡す限り、人気の無い寂れた町にしか見えない。

転入初日の、ドキドキ感と共に、家から“ないしょ”で神通力の力を使いながら、普通の人ではなかなか歩いて行こうとは思えない距離を、ひとつ飛びしてきた私は

実際にはコントロールに

手間取って、かなり体力を使っただけ

この見渡す限りの光

景に、最初のドキドキ感をどこかへと置き去りにしてしまった。その代わりにと言ってはなんだけど、転入初日に遅刻確定という、ある種のドキドキ感が、私に重く押し掛かってきた……いや、本当にマジでやばい。

何なのよ〜〜これは！

ちやんと、地図に書いてある方向に一直線で飛んできたし、住所もちゃんとチェックしたんだよ！？

なのに、あるのは一つの盆地を丸々使ったと言われている、巨大な学園ではなく、ただの寂れた町並み……何これ、私は、家族グルで行われたドッキリにでもばかされたのかしら。

割と本気で焦っている私は、オロオロと視線を彷徨わせながらも、必死に学園を探そうとする。

しかし、どんなに視線を巡らせても、どんなに別の角度から見ても、学園どころか、人っ子一人いない……は、そうか。これは、ただ私の迷う様を楽しみたいという、お父さんの悪趣味な遊び

「おい、その人間。何をしているのだ？」あれ、人がいたみたい。

その女性だと思われる人の声に、ある種の救いを感じた私は「はい！ 何でしょうか！」という、初対面の人から見れば、馬鹿丸出しの返事を返してしまう。

「いや、何でしょうかって……私は、おぬしに何をしているのかを聞いたのだぞ？」

声の方向へと振り向き、ようやく救いが私にも訪れたと感じていた矢先……私は、眼を奪われるって、この事なんだなと、初めて実感していた。

私が振り向いた場所には、一人の背の高い女性が立っていた……。朝の日差しを反射させる、きめ細かな長い金髪に、少しだけ吊り上った、切れ長な綺麗な瞳が特徴的な、細く整った顔立ち……。まるでモデルさんの様に、しなやかに均整の取れたプロポーションでありながら、強い主張をする形の良い胸。スラッと長い足を、短く改造された学校指定のスカートで見せ付けながら、その柳腰といったも良い、細く柔軟そうな腰に片手を当てる、強気な立ち姿。そしてなによりも、女性の何ものにも染められていない白い肌が、私の眼を奪い取っていた。

ああ、こんな背が高くて、かつこい女の人になりたかったんだ、私……。

「おい、どうした？ さっきから私の顔を、マジマジと見おってかに……何かついているのか？」

「え！ あ、いえ、何もついてませんよ！？」

しまった……あまりにも浮世離れた綺麗さに、見惚れすぎていたみたい。

流石に、初対面の人を、いきなりマジマジと見るなんて、相手にとっては気分の良いことじゃないものね……。でも、本当に綺麗な人だな。

「それで、おぬしの格好を見たところ、うちの生徒みたいだが……」  
言いながら、謎の綺麗な女性の方は、私の足から視線を上げていき、再び私と目を合わせた。

そういえば、確かに、この方も、私と同じ制服を着ている……。あ、学年を示す、ネクタイの色も赤で、私と同じだ。

「はい、今日転入して来たんですけど……学園が見つからなくて」「見つからない？ ああ、なるほどのう……。童子、ちょっと来てくれるか？」

私がちょうど良いと、助けを求めようとしたとき、目の前の謎の綺麗な女性は、後ろに首だけを回し、童子と呼ばれる人と呼んだ……  
「て、デカッ!？」

「どうした？ 何か、問題でもあったのか？」

「いや何、どうやらこの人間。今日転入してきたばかりらしいのだ」  
童子と呼ばれる、とても大きな男性は。

ザンバラに眉辺りまで伸ばした白髪の前髪に、それ以外は刈上げに近い長さの黒髪という、ちょっと目立つ髪形をした人で。顔は引き締まっているのだけど、眠そうな目や黒い眉毛などのおかげで、それほど怖くは感じられない…… だけど輪郭も整ってるから、顎とかはガッチリってほどじゃないけど、頑丈そうだし、首の筋肉も凄い筋張ってて、とても強そうな印象しか浮かばないんだけどね。

体格も、パツパツの白い無地Ｔシャツから浮き出る、ブロックミたいな胸の筋肉や、ゴツゴツとしている、ハッキリと六つに分かれた腹筋とか、もはや、これが本当のマッチョマンかと圧巻される程の威圧感を放ってるし。それに、厚い胸板と反比例した腹回りの細さとか、丸太みたいに太く鍛え上げられた腕とか…… もう、プロの方ですかと聞きたくなるぐらいに、見事な肉体をしていた。

でも、どうやら学園の生徒では無いみたいだ。

だって、着ているのは学園指定の制服じゃなくて、さっきも言った白い無地のＴシャツに、上半身を脱いで、腕袖を腰で巻いたグレーのつなぎ姿だもの…… こんな格好をした人が、高校生な訳ないものね。

私が、謎の綺麗な女性に呼ばれた、童子と言う、190cm以上はありそうな男の人に、若干驚いていると……。

「少し、我慢しててくれ」

「え？」

謎の綺麗な女性との会話を終えた、その大きな男の人が、私の目の前まで、履いているハイネックのシューズの足音を鳴らしながら、ゆっくりと近づいてきた。

そして、私の目の前に、無意識に流れ出ているのであろう威圧感を放ちながら佇んだ。

もはや見上げるしかない、その男の人に。

「あ、あわわわわ……」

私は、眼を涙目にしながら、ガタガタと怯えるしかなかった……だつて、すつごく怖いんだよ!?

「本当に、すぐに終わるから、ジツとしてくれ」

「わわわわわ……」

言つと、童子と言う男の人は、私の目線に合わせる様に中腰になり。

「スンスン……」

「えッ!?!」

突然、私の匂いを嗅ぎ始めた……。

「な、何してるんですか……これ?」

あまりにも理解不能な事に、私は、どう反応して良いのか分からないといった表情で、謎の綺麗な女性に、助けを求める。

「まあ黙って待っておれ。すぐに終わる」

「は、はあ……」

どうやら、女性の方も止める気は無いようで……。

私は取り合えず、この知らない初対面の男の人に、体の匂いを嗅がれるといった行為を、黙って受け入れるしかなかった……。

すると。

「妖狐。やつぱり、お前の言つた通りだ。この人は、“生徒手帳”を持っていない」

「そうか、やりの」

童子と呼ばれる男の人が、私から身を引き、再び、謎の女性に向き直つた……妖狐さんつて言つんだ、あの人。

「なら、話は早い。人間」

「はい?」

今度は妖狐さんが、私の目の前まで近づいてきた。

やっぱり、近くで見ると、更に栄えるな……。

「これから、一緒に結界の中に入るから、私の手に掴まっておれ」

「え、あ、はい……」

差し出された、細く、綺麗な手に、私はそつと自分の手を置く。

正直、結界とか言われても、何が何だか分からない私に……あれ？

そういえば、前にお父さんから、今いる世界とは、違う空間を特殊な結界を使って作り出せる事が出来るとか、習ったことがあったかも。てことは、これから入る結界の中に、学園が存在するのかな？

そんな事を私と考えていると、妖狐さんが、掴んでいた手を引張りながら、廃れた町並みの風景へと歩を進めていった……すると、不思議なことが起きた。

なんと、妖狐さんが、何も無い、廃れた町並みの風景しか広がっていない空間に、まるで吸い込まれるように、もしくは体の正面から“めり込んでいく”ようにして、消えていくではないか。

「な、何これ……」

その光景に、若干気味悪がっていると。

遂には、妖狐さんと繋いでいた私の手まで、何も無い空間に入り込んでいく……何だか、何も無い空間に入り込んでいく度に、そこから向こうの部分が消えていくから、正直気味が悪い。

その現象は、すぐに私の体の正面まで訪れた。だけど、なんとなくだけど、結界の中へと入り込んだ手の感覚と、繋いでいる妖狐さんの手の感触は感じられるから、安全だと理解できた。

そして、私の体の正面や、全体が、何の問題もなく、結界の向こう側へと入り込んでいった。

「うわぁ………凄い」

「ふふ、そうか？」

私は、目の前に広がる光景に、感慨の声を漏らしてしまう……。

「お父さんから聞かされてはいたけど……改めて実物を見ると、本当に凄い」

「まあ、ある意味で世界中の15から18までの世代の妖怪たちが、一箇所に詰め込まれているのだからな。人間であるおぬしに驚いてもらわねば、こちらが妖怪として困るというものだ」

まるで新人生を歓迎するかのように、真っ直ぐに続く、赤レンガの道に、その道を飾るようにして並べられている、きちんと手入れの行き届いた桜並木たち……だけど、私が驚いたのは、そこではない。

だって、その桜並木の道を行き交う人たちは、皆、軽い“変化の術”は使っているが、所々に妖怪としての特徴が見られる、人とは違う姿をした人たちなんだもん。

あ、あれって、雪女って妖怪だ！ 新雪の様な真っ白の着物も着てるし、なにより“彼女の周りだけ、妙に白い靄が掛かっている”。多分、彼女の周りだけ、異様に温度が低いのだと思う。

今、私を追い越した人、頭にやたら立派なんだけど、先端が丸まってる一本角が生えてた……もしかして、“麒麟”っていう聖獣！？ え！ この学園って、そんな伝説級の妖怪までいるの！？

それに、さつきから、学園まで続く広い一本道の更に先。学園の向こう側に見える、山みたいな人影って……。

「あのう……あそこに見える、山みたいな人影って、もしかして、人型をした山ですか？」

あまりに現実離れた大きさの人影に、私は思わず、隣にいる妖狐さんに、恐る恐るといった感じで尋ねた……。

この妖怪学園は、外界から中を見られないように張っている境界のせいで、いつも内部は少し雲がかかった曇り空になっているって、お父さんの話で聞いたことがある。だから、向こう側に見える、山のような人影が、私には“ただの山のように見えてしまう”……というより、見えてほしい。

だけど、私の反応を見て、楽しそうに微笑んでいる妖狐さんの口から出てきた言葉は、私の常識を、軽くねじ伏せるものであった。「何を言っておる、あれは“でいだらぼっちの田中”だ。あやつは、



あまりにも体が大きすぎてのう。毎日、私らとは違って、“あの辺”で授業を受けているのだ……可哀相にのう”

「え、ええ……」

「だがのう！ 今年の新入生に、西洋の方から“サイクロプスのジヨシユ”という者が来ての！ ここ入学式からの三日間は、“あの辺”から聞いた事も無い馬鹿でかい笑い声が聞こえてくるのだ！」

「そ、それは良かったですね」

「うむ！ やはり、学び舎には心を許せるものがないとな！」

もの凄く嬉しそうに、同級生であろう“でいだらぼっちの田中さん”の事を話す妖狐さん……。

多分、同じ妖怪として、田中さんに、ようやく友人が出来たことが、よほど嬉しいんだと思う。妖怪の世界って、結構人付き合いが頻繁に行われているって、お父さんから聞いたことがあるし。

「あれ？ そういえば、童子さん……でしたっけ？ あの方は、やっぱり学園には入ってこれないんですか？ 今もいませんし」

そこでふと、私は気づいたことを妖狐さんに聞いた。

すると、妖狐さんは“何を言っているのだ、こいつは？”という不思議そうな表情を私に向けてきた……。

「やっぱりだと？ 何を言っておるのだ。あやつも、列記とした私と同じ学年の生徒だぞ？」

「えっ！？」

案の定、表情と同じ事を言われてしまったけど、私が驚いたのは、そこではない。

「だって、あの人、制服もネクタイも着ていませんでしたよ！？」

鞆も、学園指定の物じゃなくて、私物みたいでしたし……」

「あ、ああ……それはのう」

私が、あの、どう見ても同じ学年には見えなかった童子と呼ばれていた男の人の話をしていると、なんだか、妖狐さんが気まずそうに言葉を詰まらせ始めた……。

すると突然、妖狐さんのすぐ横から、“ぬっ”と水面に波紋を広

げる様な歪みを何も無い空間に広げながら、いま話しに上がっていた童子さんがゆっくりと“現れた”。

私も、こんな風に、突然何も無い空間から出てきたんだな〜っと、結界の不思議さと凄さを、改めて実感していた。

「いや、これは朝、妖狐に制服を全て燃やされてしまっ……」

現れたばかりの童子さんは、これまでの会話が、まるで向こう側から聞こえていたかのように、私と妖狐さんの話に、その眠そうな眼のまま入ってきた。

え？ てか、燃やす？

制服を燃やすって、どういう事なのかな？

「あれは、おぬしが何をやっても起きなかったからであろうが！

私のせいに、するでないわ！」

「それは、素直にすまないとは思っているが……何も、部屋を丸焦げにする事は無かったと思う」

「だったら、おぬしが自分で起きれる様になれば良いだけであろう！ 毎日、朝早くから目覚ましの音で起こされる、私の身にもなってみろ！」

「……すまない」

何だか、会話の内容だけ聞いてると、この二人って、まさか同棲とかしてるのかな……？

いや、でも、妖狐さんの話を聞くと、童子さんも同じ高校二年生みたいだし……いくら何でも、年頃の男女が、同じ部屋で寝食を共にするなんてありえないよ。最近、一人でラーメン屋に入れるようになった、大人な私でもしてないのに……同じ年齢の二人が、そんな進んだ関係になっている訳が無いもん。

私は、こう見えても、転入前の女子高では、結構“大人に近づこうとしている可愛い女の子”とか言われて、クラスの中でも、一番“大人に近づいていた”のだ。

「だいたいな！ おぬしは、どれだけ目覚まし時計を揃えれば気が済むのだ！」

「あれは、色々な人たちから譲り受けて……」

「もう貰ってくるな！ あれだけ大量の目覚ましが同時に鳴っても起きぬのだから、おぬしには必要は無い！」

「……それは、言い過ぎじゃ」どこがだ！」……すまない」

「……ただ、二人の会話は、どう聞いても、寢床をお互い知りえてい  
る感じにしか聞こえない。」

「もしかして、本当に同棲してるのっ！？」

「あ、あの！」

「うん？ なんだ人間？」

「……聞いてもたつてもいられなくなった私は、二人の間に思わず口を挟  
んでしまう。」

「それに、妖狐さんが不思議そうな顔で振り返る。」

「お二人は、その！ ど、同棲しているんですか！？」

「昔から、私は思ったことを“ズバツ！”と言ってしまうタイプな  
んだけど……今回はかりは、流石の私でも緊張を禁じ得なかった。  
だって、同棲って事は、もしかしたら      とか、お風呂場で洗  
い      っ      ことかしてるかもしれないじゃない！？」

「そんな事、何の遠慮もなしに聞ける筈ないじゃない！」

「別に、しとらんが？      ただ、お隣さんというだけだ」

「そ、そうなんですか……？」

「おう。まあ、コヤツとは、同じ布団で寝た事もある、昔からの仲  
だからの。普通のお隣さんよりは、まあ深い関係を持っているのは  
確かであろう」

「妖狐さんは、そう言いながら、隣に佇んでいる童子さんを親指で  
指す……」

「そんな雑な扱いをされていても、童子さんは、顔色一つ変えない  
で、妖狐さんの言葉に肯定の頷きを見せた……随分と、妖狐さんに  
雑に扱われるのが慣れている様子が、その事から見て取れた。」

「多分、というか確実に、尻に敷かれているのだと思う。」

「そんな会話をしていると、妖狐さんが、おもむろに、その細い左

手首に巻いていた、小くて可愛い腕時計を覗いた。

「むっ。少し、しゃべり過ぎたかの……童子に運んでもらったから  
といって、余裕を持ち過ぎてしまった様だ」

「え、もう、そんな時間なんですか？ 私てつきり、まだ時間がある  
と思つてたんですけど」

「ほれ、見てみる。もう8時15分になる……そろそろ学園の先公  
どもが、校門を閉める準備に取り掛かつてる頃だろう。急がねば、  
理不尽な叱責を受けるぞ」

確かに、妖狐さんが見せてくれた時計の針は、そろそろ8時15  
分を指そうとしていた。

「だけど、確か学園が遅刻者を認定する時間つて、8時25分だつ  
た筈……どうして妖狐さんは、あと10分も余裕があるのに急ごう  
としているんだろう？」

「理不尽な叱責……ですか？」

「そうなのだ……うちの学園の先公どもと来たら。実質20分ギリ  
ギリに来てても、校門を先に閉められ『そんな心構えでは、お前は社  
会じゃ通用しない』とか偉そうにほざくのだぞ？ 信じられるか？」

「それは、酷いですね……」

「そうであろう、そうであろう」

「うんうん……と、分かる人には分かるのだと言外に語る様な頷  
きをする、妖狐さん。」

「いや、それは先生方が、社会に出たときの5分前行動を、俺達に  
教えようとして……」

「良い子ちゃんのおぬしは黙っておれ！ そして、私にこの事で意  
見をしたいのなら、今度から自分で起きられるようにしろ……」

「……すまない」

「どんな事を言おうとしても、妖狐さんの理不尽な叱責に、すぐ謝  
つてしまう童子さん……多分、こういうのが、頭の上がない人と  
言ふのだと思う。」

「おっと、こんな事をしている場合ではなかった……童子、また、

頼めるかの？」

「ああ、分かった……」

うん？ どうしたんだろう……と、二人の突然のやり取りに、私が首を傾げていると。

「きゃっ!？」

突然近づいてきて、目の前で屈んだ童子さんが。私のお尻に下から肩を押し付け、そのまま私を肩に担ぐと、軽々と私は持ち上げられてしまった。

当然、いきなりお尻に肩を付けられてしまった私は、びっくりした声を出す……けど、童子さんは、全く気にして無い様子で、今度は胸下で腕を組みながら待っている、妖狐さんに近づいていった。そして、そのまま……童子さんは、その太く鍛え上げられた腕を、妖狐さんの細く引き締まっているウエストに回すと。

「お、おぬし！ もう少し、持ち方というものを考えんか!！？」

まるでダンボールを抱える宅急便の方みたいに、妖狐さんをお荷物宜しく、脇腹と太い左腕で抱え始めた。

その扱いに、当然の様に抗議する妖狐さんだったけど……。

「すまない、初対面の人に、同じ扱いは出来ないから……」

どうやら、私が小人の様に、童子さんの丸みを帯びるぐらいに発達した筋肉が特徴的な肩に腰掛けさせられているのは、初対面の方専用の、特別扱いだった様だ。

そう考えると、悪い気は……いや、正直、私自身、こんな子供みたいな扱いは、少し嫌かもしれない。

荷物みたいに抱えられている妖狐さんなんて、待遇が不満なのかさつきから長い手足をジタバタさせてるし……童子さんて、良い人みたいだけど、ちょっと、他人の扱いが不器用な人みたい。

「じゃあ、行くぞ」

「ま、待て！ おぬし、まさか、このままの体勢で、私を学園に入れるきか!？ ならぬ！ ならぬぞ！ こんな姿が、あのいけ好かないヴァンパイアの小娘に見つかったら……」

必死の妖狐さんの抗議も虚しく。

「ちゃんと、掴まっている？」

「あ、はい！」

童子さんは、人では考えられないスピードで、目の前に広がる桜並木の道を、爆走し始めたのでした。

このあと、童子さんが出す尋常じゃないスピードで発生した風の壁を耐えていたせいで、久しぶりに腹筋が筋肉痛になってしまったのは、言うまでも無い事でした……。

## 妖怪たちの学び舎

もはや桜並木の道に、走る事で生んだ風で桜吹雪を作ってしまった童子さんの力強い走り。

それに、童子さんの肩に座った体勢で、多少なりとも霊力を使った神通力で障壁を張ったけど、耐え切れずに腹筋が筋肉痛になってしまった私……そして「なぜ、さっきみたいに抱えてくれんのだ……」と、不貞腐れながら、何とも無かったかの様に、童子さんの左脇に抱えられている妖狐さん。

たかだか、転入初日の登校で、色々な事があつたけど……。

無事に、私は転入先である国立妖怪学園の校門を通ることが出来ました。

本当に、本当に……腹筋が痛いです。

「う……お腹が……」

「何をやっているか童子！ 早く、私を降ろさぬか！！」

「すまない……やり過ぎた」

童子さんの脇に抱えられていた妖狐さんが、ジタバタと暴れ始める……ああ、そんな動いちゃうと、後ろからパンツが見えちゃうよ。私の目の前には、今、国立妖怪学園の風景が広がっている……。

四階建ての白い校舎が、その何の飾り気も無い外見を、私に見せてくれれば、校門から校舎まで続く道には、ここまでの道同様、桜並木が広がっている。

そして、さらに言えば、私たちみたいに結構危なく遅刻になりそうであった生徒<sup>ようかい</sup>たちが、童子さんからゆっくりと降ろしてもらった私の後ろや、妖狐さんの後ろから、ぞくぞくと校舎の方へと走り去っていく……なかには、人間である私に、先ほどの二人みたいに気づいた生徒もいたようで、何度かこちらを見てくる人たちもいた。

実際、生徒が妖怪などといった、人とは違った存在でなければ、普通の高校の様に見えるなど、私は思った……まあ、みんな、ある程度は変化の術を使ってるから、本当に普通の高校にしか見えないんだけどね。

「たつく。まあよい、行くぞ童子！ 間に合ったは良いものの、教室に遅れては、世話無いからな」

「分かった……ああ、えつと……」

妖狐さんに促された、童子さんが、上から困ったように、私を見下ろしてきた……。

本当に、威圧感が半端無いです。

ですが、多分、別に私に対して威圧感を放っているのではなく、自然と私を感じ取ってしまっているだけなのだと思います……それに、童子さんが困ったような表情をしているのは、違った意味だと思いますし。

「どうしたんですか、童子さん？」

「いや、君の名前が分からないから……」

「あ、そっか！ すみません、私、こんなに助けて頂いたのに……」

「いや、別に構わないんだ。困ったときは、お互い様だから……」

「いえいえ！ 童子さんと妖狐さんが現れなかったら、私、結界にも気づかなかっただろうし。それに、学園まで運んでてもらっちゃったし。お礼を言うのは、こちらの方ですよ！」

本当に、外見に似合わず腰の低い人だ……こんな視界にも入りそうに無い私に、ペコペコと高い位置から頭を下げ続けているし。日本人らしいといえば、らしいのかな？

そして、そういう私も、童子さんに変わらず腰の低い人間なのだ……証拠に、さつきから童子さんに負けじと、頭を下げ続けている。

こういうのを、社会じゃ“おじぎ合戦”というのだろう。

多分、日本人は、こんなんだから、何世紀も前から海外の映画とかで、似たような演出をされてしまうのだと思う。

私と童子さんが、延々と続けられそうな“おじぎ合戦”を繰り広



げていると……。

「おい童子！ 馬鹿をやつてないで、急ぐぞつ！！」

いつの間にか、学園校舎の玄関口付近まで歩いていた妖狐さんが、私と童子さんが着いて来ていないのに気がついて、眼にも止まらぬ速さで、童子さんのところまで駆け寄ると、その童子さんの太い右腕を取った。

それと同時に、“キッ！”と私のほうに、鋭い睨みを向ける……。底冷えしそうな程に、鋭く冷たい睨み……。だけど、それでいて見惚れてしまいそうなほどに、白くて綺麗な顔つき。

ここまで美人だと、どんなことをやっても、絵になつてしまうのだなと、私はこのとき、見惚れてしまった妖狐さんの睨みを向けられながら感じていた。

「おぬしも早く、職員室に向かったらどうだ？ それに、童子はこう見えても“鬼”の一族の者なのだぞ？ あまり近づき過ぎるな」

「え……？」

「何を呆けた顔をしておる。童子に喰われたくなかったら、早く職員室に行く事だな」

「おい妖狐。俺は人も妖怪も喰わんぞ？」

「うるさい！ 大体、おぬしもおぬしだ！！ 人間の女なんぞに、へらへらしおつて！！」

あれ……。もしかして妖狐さん、童子さんと私の“おじぎ合戦”に嫉妬などしておらん！ うわ！ 心を読まれた！？

「ふん！ おぬしも神通力に多少の心得はある様だがの、私にかかれば、その程度の人間の技術、本の頁を捲るよりも容易いことだ！」

「は、はあ……」

なんだか、結構自信のあったうちの一つが、馬鹿にされたみたいで悔しい……。だけど、確かに常日頃から、お父さんに『お前の神通力は、ただ力を垂れ流しているだけに過ぎん』とか言われてたから、あながち間違つても無いのかも。

「それよりもほれ！ 急ぐぞ童子！ 急がねば、SHRに遅れる！」

もう私の事など眼に入らないかの様に、妖狐さんは童子さんの太い腕を両手で綱引きの様に引っ張り続ける。しかし、童子さんの体は、地に根が張っているかのように、びくともしない……なんともシユールな絵だ。

「くそ！ なぜ動かん！ ほれ行くぞ、童子！」

「待て妖狐。たぶん、この娘は、職員室の場所も知らないと思うんだ」

「もしや、そこも案内する気なのか？」

「ああ」

「却下だ！ そんなもん、通りかかった先公にでもやらせれば良いのだ！！」

「だが、しかし……」

「おぬしの言い分など、聞いても碌な事にならん！ だから早く行くのだ！」

二人のやり取りに、他の周りにいた生徒達も、何事かと視線を集めてきた。

流石に、なんだか居た堪れなくなってきたので、私は「あ、あの……大丈夫ですよ？ 職員室ぐらいなら、なんとか辿り着いてみせますし」と、二人の間におずおずと割って入った。

私の言葉に振り向いた二人が、同時に高い視線の位置から私を見下ろす……。

正直、とつても威圧感が凄かった……とくに、妖狐さんの“もっと早く言え”というオーラが混じった眼が特に。

「ほれ、こやつも、こう言っておるのだ。私らも、早く教室へ向かうぞ」

「本当に、大丈夫なのか？」

「は、はい。これぐらい出来ないと、これからが心配ですから」

「そうか……なら、“気を付けてな”？」

「え、あ、はい。どうも、ありがとう御座いました」

そう言って、童子さんは、妖狐さんの引かれる手に従って、校舎

の玄関まで連れ去られて行ってしまった……あの肉体を引っ張れるなんて、妖狐さんも、やっぱり妖怪なんだなあ。

二人を見送り、校舎前で一人残ってしまった私は、そんな事を考えながらも、とりあえず、一人で職員室を探そうと、歩を進めるのでした。

特に代わり映えのない玄関に下駄箱……特に代わり映えのしない校舎一階の廊下。

床はワックスがかけられているのか、廊下の明かりを反射させるぐらいに、ぴけぴかに磨かれ、その明かりである蛍光灯も、全て新品の様に白光を放っている。生徒達の教室は全て、二階以降にあるので、一階には教員の雑用を任されている数人の生徒達しかいない……しかし、それでいて、上の階から聞こえてくる生徒達の笑い声や話し声は、鏡花が過ごしていた人間の学校と大差ないくらいに騒がしい。まあ、たまに『これは人なのだろうか?』と思うような奇声も聞こえてくるには聞こえてくるのだが。

そんな中を、鏡花は、下駄箱に常備されている外来者用の借り物スリッパを履きながら、キョロキョロと視線を彷徨わせながら歩いていた。

（本当に、妖怪の方たちが生徒っていう以外は、普通の学校なんだなあ……まあ、これならすぐに職員室も見つけられそうだし、楽で良いんだけどね）

鏡花は、一階のやたら長い廊下を、スリッパと地面を擦らせる音を鳴らしながら、歩いていく。

パタパタではなく、ス……ス……ス……と、静かに響く、その足音は、鏡花の歩き方が、摺り足である事を教えている。

（えっと、職員室、職員室……あ、これは保健室か）

普通、職員室って、校舎の中心辺りにあるもんじゃないの？

そんな疑問を抱きながら、鏡花が職員室を探していると……。

「うん……こりゃあ、人間の匂いか？」

「え？」

鏡花の後ろから、掠れた様な男の声が聞こえてきた……それに驚き、鏡花が振り向くと。

「おお、やつぱり人間か。通りで美味そうな匂いが漂ってる訳だ」

「……な、何か用ですか？」

そこには、黒の長髪を肩まで伸ばした、細長い男子生徒が立っていた……ネクタイの色を見るからに、青だったので一年生の様だ。しかし、彼の常にニヤけている表情や、ふらふらとした佇まいが、女性である鏡花の警戒心を煽る。

「いやなに。見たところ二年みたいだけどよあ……確か、今の学園に人間つてのは一年と三年合わせて“二人”しかない筈なんだあ」

「は、はあ……」

「それなのに、二年の人間が、スリッパ履きながら、こんなところをウロチヨロしてやがる……おまけに、美味そうな匂いと、魅力的な靈力を垂れ流しながらなあ」

言いながら、細長い男子生徒は、少し怯え始めた鏡花へと歩み寄ってきた。

その虚ろな瞳と、ニヤけた表情が、とても不気味だ……。

歩み寄ってきた男子生徒は、鏡花の前へと立つと、その長いストリートロングの黒髪の一房を、長く骨々とした右手の指で、愛でる様に掴み始めた。

「ふん……髪の毛に艶もあって、健康そのものじゃねえか」

「な、何を……？」

あまりの気味悪さに、鏡花は身動きしながらも、男の手から髪の毛を放す。

そして、当然の様に距離を取った。

「眼も丸く見開かれていて、唇も、細い首も、柔らかそうな体も……本当に美味そうだな、お前？」

「さつきから、何を言ってるんですか!？」

鏡花の声音が、思わず強くなる……。

当たり前だ、初対面の男に、美味そうだから何やら言われたら、流石に体を守るようにして、後ずさりせざる負えない。

そんな鏡花の反応を楽しむかのように、細い男子生徒は、その口端をいやらしく吊り上げる。

「この妖怪学園ってな？ 基本的に自己責任で、色々まかり通ってるわけよ……」

「……」

警戒心を緩めない鏡花が、男をその綺麗に見開かれた目で睨みつける……だが、全く持つて威圧感が無い。むしろ、小動物の威嚇を見ている様な感覚に陥ってくる。

「まあ俺も、まだ入学したばかりだけどよお。話に聞く限りじゃ、年々、この学園じゃ妖怪同士の喧嘩やらなんやらで、死者が出てるらしいじゃねえか……」

「……そ、そうなんですか？」

男の話に、冷や汗を垂らしながら、聞き返してしまった鏡花……。

「ああ……それに、これは三年に一度とかのペースらしいが、修学目的で入学した人間が、他の妖怪に喰われるって事件も起きてるらしいんだ。危ないよなあ？ なあ？」

（ま、まじですか……）

「そんな危ねえところに……アンタみたいな、美味そうないや靈力を垂れ流した人間が、何の用心もなしにうろついてやがる」

こ、これはもしか、私、目をつけられた？

背筋に、嫌な寒気がしたのを鏡花が感じ取った……。

どう見ても、どう解釈しても、目の前の一年の男子生徒は、私を狙っている……。

お父さんから危ない危ないとは聞かされてたけど、いきなりですか!？」

そう警戒心を高めながら、鏡花が、自分の身を守るために、身に

纏う霊力を高め、神通力で、体の表面に障壁を構築しようとした、その瞬間……。

「……そんなんだから、いきなりこんな目に合うんだ！」

「えっ!？」

目の前の一年の男子生徒が、視界から突然姿を消した……そう気づいた瞬間には、鏡花の後ろから、突風に似た、鋭い風が吹きすさんだ。

鏡花は、その突風に吹かれる髪の毛を必死に押さえながら、後ろへと振り返った。

そこには……。

「ちっ！ なに邪魔してんだ、こらー!!」

「邪魔するもなにも、女子の後ろから、いきなり仕掛けてくる様な奴に、返す言葉なんてねえよ」

今しがた、自身の前から姿を消した男子生徒が、鏡花を守るかのように目の前に立ち塞がっていた。

その体の表面からは、何か鋭利な刃物で切りつけられたかのように、赤い切り傷を作っている。

「だ、大丈夫ですか!？」

男子生徒の怪我に鏡花は狼狽するも、修行中の身ではあるが己も陰陽師の端くれと、鞆から数枚の札を取り出し、助けてくれた男の前に出ようとするが……それは、目の前に立つ男子生徒が腕で制した。

「これぐらいは大丈夫だ！ とにかく、今は後ろに隠れてろ！」

「で、ですが！」

「いいから隠れてろ！ 切り刻まれたいのか!？」

「っ!？」

鏡花を守る男子生徒が声を張り上げると同時に、再び、突風にた鋭い風が、廊下に吹きすさんだ。

「ちっ!？」

その鋭い風を、体の正面で腕をクロスさせながら受けた男子生徒

は、制服を切り刻まれ、その奥にある肉体にも、鋭い裂傷を付けられていた。

後ろにいた、鏡花の顔に、男子生徒から飛び出た赤い血が、風に乗って付着した。

それを指でなぞって、驚きに顔を染める。

「こ、これって……っ!？」

「アンタは、そのまま後ろに向かって逃げる！ 正直邪魔だ！」

男子生徒が、正面を見据えたまま叫ぶ。

赤い血を見て、狼狽を隠せない鏡花であつたが、この血が何が原因で出たのかを確かめようと、男子生徒の向こう側を覗いた……そこには、両腕の前腕に、半円を描いたような鋭利な刃物を“生やした”、外見自体は人間だが、とても人とは思えない姿をした、妖怪の姿があつた。

あの前腕の外側に生えた刃物……もしかして、あの人は“かまいたち”!？

「どけよ、その男!!」

「早く!!」

鏡花が、そうこうしていると、“かまいたち”の男子生徒が、その両腕に生えた半円の刃物を構えながら、こちらに突貫しようとして、後ろ足で廊下の地面を蹴りだした……瞬間、猛烈な突風が起こる廊下。この突風に、廊下のガラスというガラスは割れ、鏡花の長い黒髪は、押さえなければ痛いぐらいに揺らされていた。

あまりの風の強さに、鏡花が目を瞑つてしまう。

しかし、そんな鏡花を置いて、二人の妖怪の闘いは始まつた。

いつの間にか、鏡花を守っていた男の目の前に現れた“かまいたち”は、その右腕に生えている刃物で、男を切る付けようと、上から振り降ろすように、その右腕を、男に向かって振り抜いた。

男から見て、左斜め上から、斜めに振り下ろされる刃物……それを男は、後ろにいる鏡花の事を庇う様に、右の前腕と左の前腕をクロスすることで受け止めた。

クロスする前腕と前腕の間に挟まれ、捉えられてしまった“かまいたち”の右の刃……しかし、そのせいで、刃を止めた男の前腕からは、骨が削られる痛みと赤い鮮血が飛び散った。

「つつ！？」

「てめえには、用はねえんだよ！！」

刃を止めるために両腕を使ってしまった男の腹に、“かまいたち”の膝を抱え込むようにしてから放った右の前蹴りが突き刺さる……その前蹴りの爪先からは、上履きを貫いて、鋭く尖った“かまいたち”の爪が生えていた。

ザクリと……深く男の右脇腹に突き刺さる“かまいたち”の右の爪先。

「ふぐつ！？」

前蹴りの威力に、肺から空気を吐き出され、鋭い爪先に刺された痛みで、右の脇腹に熱い感覚を感じた男は、思わず“かまいたち”の刃を放してしまう。

「死ね！！」

開放された右腕ではなく“かまいたち”は、今度は反対の左腕を、前蹴りを引いくと同時に生まれた腰の回転を利用しながら、ひるんだ男の首を切り落とそうと、真っ直ぐに突き出した。

前腕の外側に生えていることで、普通に拳で相手を殴る様に前へと突き出せば、まるでギロチンの様に真っ直ぐに飛んでくる“かまいたち”の刃は、寸分変わらず、ひるんだ男の右の首筋へと迫っていく。

その時、異変が起こった……。

ガキンツ！！ 金属と金属が衝突したかのような、鋭い衝突音が、廊下に響き渡った。

「ちっ！？」

「な、何してやがる！？」

「私だって、戦えます！」

“かまいたち”の刃は、男の首には届かず、間に割って入った鏡



花が両手で前に出して構えている“術札”<sup>じゅっふだ</sup>によって、阻まれていた。打撃戦の間合いというのは、ひと一人、入れるかどうかという狭い場合もあるので、本当にギリギリのタイミングであった。

鏡花の神通力によって強化された“術札”は、“かまいたち”の左の刃を、触れるか触れないかの距離で“押し留め”、相手の攻撃を防いでいた。

“術札”……これは、陰陽師などが好んで使う、言わば商売道具の様な物で。材質は問わず、ただ術者が特殊な文字を書くことで、その効果を発揮する。といっても、主な効果は、術者が“こうなつて欲しい”と念じたものを具現化する能力で、例えば、今の様に“相手の刃を防ぐ物になって欲しい”と念じれば、紙の周囲に術者の神通力を使用した鋼鉄の障壁を作り出し、一つの防御として使用出来るようになるといった、大変便利な代物なのだ。しかし、防御になるといつても、相手の攻撃の威力に、持っている術札を放さないぐらいの実力がないと意味も無いのだが……その辺は、陰陽師は自身の体を神通力で強化する事によって補っているのだ。

「陰陽師が！ その程度で！！」

「っ！？」

左の刃を、鏡花の術札で止められていた“かまいたち”は”。

その刃を引くと同時に、今度は再び、それによって生まれた体の動きを柔軟に使って、右足による、“爪先を立てた”上段廻し蹴りを、鏡花の側頭部……とりわけ、左米神に向けて蹴り放った。

三日月蹴りと呼ばれる、この爪先による廻し蹴りは、両手で“かまいたち”の攻撃を防いでいた鏡花の左肩を悠々と越えて、まるで鎌の様に弧を描いた軌道で迫る。

しかし、またしても“かまいたち”の攻撃は、鏡花が体に張っていた神通力の障壁によって、左米神に刺さるか刺さらないかの位置で防がれてしまう。

苦虫を噛み潰した様な顔をしながら、蹴り出した右足を引き、一旦距離を取る“かまいたち”……。

「てめえ……ただものじゃねえな？」

術札すら使用しないで、障壁だけで相手の攻撃を防いだ鏡花に、“かまいたち”は警戒の眼差しを向ける……鏡花も、“かまいたち”から視線を外さぬよう、相手の“首下”を見続けてはいたのだが（お父さんの嘘つき！何が接近戦に持ち込まれた時は、相手の“首下”を見るよ！？全く相手の胸の動きも腰の動きも腕の動きも……何にも見えないじゃない！！）

“かまいたち”の動きの早さに、目が追いつかなかったせいで、とても対峙者としての威圧感は感じられなかった……これがもし、ただの稽古だったのなら、鏡花は情けなく大泣きしていたところであらう。

実際、格闘技などでは、相手の全体を見れるように、人によってどこに視点を置くかなどがあるのだが、どうやら鏡花には、“首下”の視点は合わなかった様だ。

「っ！おい、アンタ大丈夫か！？」

すると、鏡花の後ろから、あまりのダメージに膝をついてしまった男の驚きの声が聞こえてきた。

え、なに？                      その声に反応した鏡花が、後ろへと意識を向けようとすると。

「うん？へへ……なるほどな、別に、完璧に防いだって訳じゃねえようだな」

鏡花の左の米神辺りから、一筋の赤い血が、ツーツと垂れてきた……。

その光景に、対峙している“かまいたち”は、自身の有利は、まだこちらにある事を確信する。

「代われ！アンタじゃ、もう無理だ！」

「何ですか！？私より、アナタの方が……」

「左の米神を触ってみろ！攻撃が通ってるじゃねえか！」

「え、あ！ほ、本当だ！？ど、どどどうしよう！？」

男の言うとおり、鏡花は米神の血を確認した瞬間、あたふたと動

揺をし始める。

「だから代われって言うてんだ！ 大体アンタ、相手の動きが全く見えてなかったろ！？」

「うっ！？ それは言わないでよ！ バレてなかったかもしれないのに！！」

「あんだだけ、相手の動きに何一つ動かなけりゃ、誰だって気づくぞ！？」

確かに、鏡花は相手の攻撃に、ある意味で、何一つ微動だにしないかった……最初の男を庇ったときの動きですら、ほぼ偶然に近い、直感による飛び出しで成功させたものだった。

しかし、だからといって、こんな重症の人間を、また自分のために戦わせる訳にはいかない。

「でも、アナタだって、全然相手になつてなかったんですから、大人しく、後ろにいてください！」

「言うに事欠いて、何言つてんだ、お前！！」

「おい……てめえら、俺のこと忘れてないか？」

距離を取り、構えを取り直した“かまいたち”を置いて、言い合いを始めた二人に。“かまいたち”は、微妙に困った様な顔をしながら、自己の存在を主張する。

すると、ここで……この一階での騒ぎを聞きつけた、他の生徒たちや、職員室から出てきた教員たちが、ゾロゾロと集まってきた。

「ち……ギャラリーが増えちまったな」

「その三人！ 職員室の前で、なに喧嘩をしているのだ！？」

人が集まってきた事に、舌打をした“かまいたち”の後ろから、一人の教員が駆け寄ってきた。

「直ちに喧嘩をやめろ！ そろそろ授業が始まるんだぞ！」

教員の声に、鏡花が気づいた。

やった、やっと助けの人が来てくれた！

そう思い、鏡花が助けてくれと、声を張り上げようとすると。

「先生違います！ 俺と、その男で“序列戦”をしていたのに、

急に、その女が割って入ってきたんです！」

鏡花が声を張り上げる前に、“かまいたち”が割って入ってきた。その“かまいたち”の説明に、駆けつけてきた教員は「何？」と、明らかに怒ったような表情を始めた。

何のことやら、さっぱり分からない鏡花であつたが、とにかく助けを求めようと、再び声を張り上げようとするが……。

「その女子生徒！！ 生徒同士の“序列戦”に助太刀、または妨害をすることは、硬く禁じられていると、生徒手帳に書いてある筈だぞー！」

「へ？ え？ 何で、私が怒られてるの？」

いきなりの叱責に、鏡花は訳が分からないといった、困った顔をするが……。

「野郎……パチ扱きやつたな」

状況を理解していた、鏡花の後ろに膝をついていた男が、苛ついた感情を露にしながら、奥歯を噛み締めた。

「どついう事なんですか？」

「たぶん、転入したてのアンタには分からないと思うが。うちの学校には、“序列戦”つてのがあつてな……」

言いながら、男は少し辛そうな表情で立ち上がった。

「こいつは、生徒間での強さの位を決める戦いなんだ……」

「強さの位？」

「ああ……うちの学校は、表向きは妖怪が社会進出するのを目標としてるが。“裏側”は……」

「おい！ その女生徒は早くどきなさい！ いい加減に言うことを聞かないようなら、罰則を与えるぞ！」

男が話を続けようとすると、教員が、その男の言葉を遮る……。

「ちつ……話す暇も与えてくれねえのか……すまないな、全部話せなくて」

「いえ……でも、それより、アナタはもう、戦えるような体じゃっ！」

「妖怪を舐めるなって……これぐらい、放っておけば治る」

明らかに虚勢だと分かる態度……しかし男は、そのまま辛そうにしながらも、前にいた鏡花を片手でどかし、“かまいたち”と再び対峙した。

鏡花は、その男の真剣な表情と瞳に、言葉を失ってしまう……。

（なんなの、この学校は……最初に襲ってきたのは、あっちなのに、どうして、こっちが悪いみたいになってるのよ）

いくら経緯を知らないとはいえ、悪いほうの相手の言葉を鵜呑みにする教員……それに対して、意味の分からない理由で、反論もせずに受け入れる、目の前の男子生徒。

例え、人間と妖怪の価値観が違うといえど、この状況に、鏡花は理不尽を覚えずに入られなかった。

「さつきは女の邪魔で仕留めそこなったが、もう、その心配もない。大人しく、首を切られるよ」

「そりゃ、こっちも同じだ……これで、女の心配なんて、せずに済むからな」

「へっ、言ってるよ。どっちにしろ、てめえみたいな雑魚には、用は無いからな」

そんな鏡花など関係ないかのように、二人は再び対峙する……。

距離は、最初と同じで、接近戦を仕掛けられるような間合いではない……しかし、男の刺し傷から、既にボロボロの制服を染め上げる程の赤い血が滲み出ている。

傍目から見たって、男に勝ち目は無い。

だが、そんな時であつた……。

男と“かまいたち”の間の“天井”から、蜘蛛の巣状の裂け目が入ったのは……。

本当に、それは突然でした……。

私たちを襲った“かまいたち”の生徒と、助けてくれた男子生徒の間を別つ様に、一階廊下の天井が、まるで陥没するかのように落下してきたのは。

「な、何だ!？」

「天井が崩れたぞ!？」

「おい! 巻き込まれた生徒はいないか!? すぐに周りで確認し合いなさい!」

視界を遮るほどの埃と、廊下の地面にももの凄い衝突音を轟かせながら、周囲に破片を飛び散らせる、一階の天井だったコンクリートの塊たち……その光景は、まさに混乱の極みを生み出し、周りに集まってきた人たちが右往左往し始めていた。

だけど、そんな中で、私の目の前にいた、助けてくれた男子生徒は、崩れ落ちてきた瓦礫の上を、ワナワナと震えながら見つめていた。

次第に、最初に割れた窓ガラスのお陰で、視界を遮っていた埃が晴れていく……。

男子生徒が見つめていた場所を、私も埃が入らないように細めていた目を向ける。

そこには……。

「童子さん!? それに妖狐さんまで!？」

先ほど、私と別れて教室へと向かっていた筈の二人が。瓦礫の上に、まるで下々の者達を見下ろす王者の様に、悠々と佇んでいた。

立ち上る埃が薄れていくのと同時に、鏡花の声が、瓦礫の上に立つ二人に届いた。

「ふむ。まあ、無事だったようだな……流石に、転校初日の転入生に死なれては。最後に見送った立場として、目覚めが悪くなるから。」

「ああ、良かった」

その声を聞いて、二人は互いに安心する……。

「しかし、まあ……いずれは襲われるとは思ってはいたが、職員室に向かうだけで襲われているとはのう。流石に予想外だったわ」

妖怪にとつて、人間……ましてや霊力の強い者を食すことは、己の力を底上げする効果を持ち、非常に美味しい獲物として見られることが多い。故に妖狐は、最初に見たときから『ああ、こいつはトラブルの元になりそうだ』と予想を付けていたのだが、流石にトラブルに巻き込まれるのが速すぎると、ある意味で驚嘆を覚えていた。「済まないが、妖狐。虎熊<sup>こくま</sup>を見ていてくれないか？ アイツは怪我をしている、匂いで分かる」

「そんなもん、おぬしが“三階から床をぶち抜く”前から知っておるわ。舐めるでない」

「そうか、頼んだぞ」

「任せておけ」

仕方ない奴め……胸中で、そう呟きながら、妖狐は晴れかけている埃煙を突き抜けて、鏡花と、童子に虎熊と呼ばれた男がいる場所へと、瓦礫の小山から飛び降りていった。

童子は、それも見送らずに、“かまいたち”のいる方へと、視線を向け続けていた。

「すまぬ、来るのが遅れた」

埃煙を突き抜けて、瓦礫の前にいた鏡花と虎熊のもとへと下りてきた妖狐は、開口一番、あまり心の籠っていない謝辞を入れた。

「よ、妖狐さん……あつ」

妖狐の姿を見て、これまで“かまいたち”の危機に晒されていた鏡花が、ペタンと腰を廊下の地面に落してしまう。おそらく、先ほどまで感じていた理不尽から開放され、安心したのか、腰が抜けてしまった様であった。

「妖狐様……」

虎熊も、妖狐の姿を確認した瞬間、気の抜けた声を、思わず出してしまふ。

そんな二人の姿を見て、妖狐は呆れたように前髪を掻き揚げながら……。

「はあゝ日ノ本最強の鬼とも謳われる、天下の大妖怪、酒天童子しゅてんどうじの配下である四天王の一人が。たかだか“かまいたち”程度に、この様とは、童子も苦勞が絶えぬの……同情すら覚えるわ」

「申し訳御座いません……」

深いため息混じりに、ボロボロの虎熊を罵る妖狐……。

妖狐の言葉に、虎熊は奥歯を噛み締め、拳を思わず固めてしまうほどの悔しみを露にする。

その様子に、腰を抜かしながら安心しきっていた鏡花が、吐き出してしまった様に反論する。

「そ、そんな！？ この人は、私を助けるために！」

「おぬしにとつては、そうかもしれないぬがの……コヤツは、毎度毎度こうやって調子に乗つては、大怪我をして童子に尻拭いをさせてしまっているのだ。大方、今回も相手の力量も測らずに、格好を付けて、西洋の騎士ナイトでも気取りたかったのであるう。もし相手の力量が測れていたのなら、最初から、娘を連れ去って逃げていれば済んだのだからな」

「で、でも！」

「はい、仰る通りです。申し訳御座いません……」

鏡花が反論を続けようとすると、それを虎熊が震える声で遮る……。

それを、虎熊よりも背の高い妖狐が、見下すように見つめながら軽く聞き流した……どうやら、虎熊とは、もう話す口は持っていない様であつた。

「ところで、さっきは聞き忘れていたのだが、おぬしの名は何と言うのだ？」

虎熊から、視線を地面に腰を抜かしている鏡花に向けると、妖狐



は、特に興味も無いといった様子の軽い口調で、名を尋ねた。

突然話題を変えられた鏡花は、一瞬納得が行かないといった表情をするも、取りあえずは名乗っとかないと、今後の会話が続かなそうだったので、名乗る事にした。

「えっと、安部あべ鏡花です……鏡花って呼んでいただいて結構です」

「安部？ おぬしは陰陽師であつたな？ さつき感じた霊力や霊気、神通力からして、私は、そう予想していたのだが……」

これまで鏡花に、特に特別な興味は示していなかった妖狐であつたが。鏡花の名字を聞いた瞬間、表情が一変し、真剣なものへと変わった。

「はい、一応陰陽師としての修行として、この妖怪学園に一年遅れで転入させられたんですけど……それが、どうかしましたか？」

「なるほどのう……」

鏡花のキョトンとした顔のまま発せられた答えに、妖狐は興味深そうに頷き、目の前で悔しそうに表情を俯かせていた虎熊に視線を戻した。

「虎熊よ、面を上げよ」

「……はい」

「良くやつた、私直々に褒めてやる。確り喜びを噛み締めるが良い」  
「……は？」

突然の対応の変化に、言われた通り面を上げた虎熊も、鏡花同様、キョトンとした顔をする。

「ふふふ……いつまで経つても、私たちの学年に修行に来る人間の陰陽師が来ないと思ったら。なるほど、これは思わぬサプライズだわ。これから楽しくなるぞ……ふふふ」

いきなり含み笑いを漏らしながら、意味深な言葉を口にする妖狐に、二人は顔を見合わせながら、首を傾げる……。

そんな二人を無視しながら、妖狐は、「さて、朝の余興も、これで終わる。後はゆっくり、童子の部下の尻拭いを見学するのでしょうか、なあ？ 二人とも」と言つて、その場から振り返り、

既に立ち込めていた埃が晴れた、瓦礫の方へと視線を向けた。

立ち込める埃が収まったところ、童子は、瓦礫の上から己が部下を傷つけた相手を見据えていた。

体は細く引き締まっついていて、身長は大体170後半、両腕に生えている半円を描いた弧の字型の刃と、爪先から上履きを貫いて伸びている鋭い爪が武器……顎は細く、目も細い。

「なにジロジロ見てんだよ……人の“序列戦”を邪魔しやがって。ただで済むと思ってるのか!？」

おそらく、それでも変化の術は解いていないのであろうが……ほぼ解けかけている状態であり、これが全力に近い実力と見て間違いない。

「何か喋れよ！ おい！ 聞いてんのか！ この木偶の坊!！」

感じ取れる妖力と妖気は、問題ではない……あえて問題を挙げるとすれば、重心が真っ直ぐに落ち着いているところだろうか？

おそらく、なんらかの格闘技に通じているのであろう。

「ちっ！ いけすかねえな……テメエ」

「おい、君……流石に“彼は止めておいた方が良い”」

「あん！ 外野は黙ってる！ こっちは獲物も相手も逃がすわけで、苛ついてんだよ!！」

先ほどまで“かまいたち”の“序列戦”を認めていた教員が、恐る恐る“かまいたち”に注意を呼びかけるも、頭に血が上った“かまいたち”には、聞き入れてもらえなかった……教員が去り際に放った“どうなっても知らないぞ”という小さな呟きも、“かまいたち”には届かなかった。

そんな中でも、童子は眠そうな眼のまま、“かまいたち”を静かに見下ろし続ける。

「おい！ 降りて来いよ!! こなきや、こっちから行くぜ!!」

瓦礫の上で、静かに佇んでいた童子に、“かまいたち”が右腕を振りぬき、次いで左腕を振り抜いた。

どう考えても間合いの外からの“素振り”、だが、その“かまいたち”の素振りは、鋭い風の刃となって、童子の肉体へと迫り狂う。眼に見えない風の刃が、突風に紛れて、童子の肉体へと迫り、その厚く鍛え上げられた胸板へと衝突した……刹那。

バシユウ 鋭利な刃物で肉体を切り裂く音ではなく、空気を霧散させる気の抜けた音を発しながら、風の刃は、その刃を散らしていった。“かまいたち”の起こした風の刃は、童子の着ていた無地のＴシャツを切り裂き、ザンバラに伸びていた白髪の前髪を揺らすだけに被害を留めてしまった。

「な、何……っ？」

この状況が信じられないのか、“かまいたち”は不思議そうに瓦礫の上に立っている童子を見つめる……。

確かに当たったはずだ……なのに、なんで、あの肉体に傷がついていない？

おかしい、さっきの奴は、全身を浅く切り刻まれるくらいには傷を作っていた筈なのに。

起こっている事態を受け入れられぬかの様に、“かまいたち”は再度、両腕の刃を立てながら、童子に向けて素振りをする。同時に起こる、突風と風の刃。

しかし、それでも……。

バシユウ 先ほどと同様、気の抜けた音を発しながら、童子の無地のＴシャツを切り裂く程度にしか、効果を発揮しなかった。「な、何でだよ！？ くそっ……！」

再び、“かまいたち”は童子に向けて、両腕の刃を立てながら、何度も素振りを繰り返す。

もはや吹き止まぬ突風、もはや連続で飛んでくる風の刃……。だが、それでも童子の肉体に、一つとして裂傷を与えることは出来なかった。

（い、意味わかんねえ……どうして、アイツは何の障壁も張って無いのに、俺の“風斬り”を防げるんだ！？）

何度も何度も繰り返すうちに、次第に“かまいたち”の息は乱れ、ついには両腕の刃を振り回すのも止めてしまう……。

はぁ……はぁ……と、肩で息をする“かまいたち”。

既に、自身の刃の重みも億劫なのか、両腕を垂れ下げている。

「てめえ……どんな小細工してやがんだ！」

声を張り上げるも、いまだ瓦礫の上から一步も動いていない童子に反応はない。

ここまで相手に何も出来なかったのは、初めてだ……相手の損害といったら、来ていたＴシャツが切り刻まれて、すでに無くなっている事ぐらいだ。

どうなっている……本当に、何がどうなっているんだ！？

“かまいたち”の脳裏に、延々と同じ言葉が流れ続ける……しかし、答えなど見つからない。

そこでふと、“かまいたち”は瓦礫の上で佇む、童子の肉体に眼が奪われた。

厚い鉄板を二枚並べた様な大胸筋に、小さな鉄球を積み重ねた様にハッキリと筋別れた腹筋郡……太く鍛え上げられた首に更なる補強を与えるために、もはや丸みを帯びる程に鍛え上げられた僧帽筋に、それに連なって太い腕を支えている、見事な三角を描いた三角筋……岩石の様に屈強な両腕もそうだが、それよりも、下から見てもハッキリと分かるほどに、胸周りと腹回りが反比例している逆三角形の上半身。

まさか、な……まさか、あの“肉体のみ”で防いだってことは、ねえよな。

童子の上半身を改めて確認した“かまいたち”の脳裏に、もしも真実だとしたら最悪な考えが浮かび始める。

（ありえねえ……そんなの、絶対にありえねえ！！）

胸中で必死に否定しながらも、他の要因が見つからぬ“かまいたち”。

障壁を張っているような妖気も妖力も感じられない……おまけに、

いまだ身動き一つしていない。

なら何だ、なぜ、目の前の瓦礫の小山で佇む、あの木偶の坊は、俺の風の刃を無傷で防げる！？

己が實力に、余程の自信を持っていたのであろう……“かまいたち”の男は、そんな疑心暗鬼を振り払うかのように、もはや考え無しの特攻を、童子に仕掛けた。

特攻のために、後ろ足であつた左足を蹴り出すだけで、周囲に突風を巻き起こす“かまいたち”の踏み込みは、一瞬とも言える速度で、瓦礫の小山で佇んでいた童子の前へと辿り着いた。

もはや、既に振りかぶっていた左の刃を、相手の首へと突き出せる間合い……しかし、それは、相手も同じであつた。

いつの間にか、これまで身動き一つ取っていなかった童子が、その大きく拳<sup>けん</sup>腕の目立つ岩石の様な右拳を、左肩を前に出しながら、肘を曲げた状態で、右の肩甲骨を使って振り絞っているではないか（こいつ、俺のスピードに反応してきやがったっ！！？）

驚きに“かまいたち”が眼を見開くも、もう振りかぶっていた左の刃は止まらない。

左の腕に生えた刃を立てながら、“かまいたち”が童子の右首筋目掛けて、振りかぶっていた体勢を開放した。

刃が、真っ直ぐに刃を立てながら、童子の首筋に迫っていく……しかし、あと首筋まで拳二つ分と迫った所で

ガシャアアアンツ！！！！

“かまいたち”の左の刃が、童子の眼にも止まらぬ速さで足先や膝、腰や胸まで連動させて振り抜かれた、右のショートフックで、まるで飴細工の様に碎かれてしまった……。

「は？」

そして、童子の右ショートフックの威力と勢いは、刃だけでは飽き足らず“かまいたち”の左前腕まで、“くの字”に折砕いていた

……。

あまりの出来事に、折られた左腕を振り抜いた体勢のまま、思考を停止させる“かまいたち”の男……そこに、更なる暴力が襲い掛かる。

右のショートフックを振り抜いていた童子は、左に捻転していた体の捻りを最大限にまで活かして、足の爪先を、今度は反対の右方向へと回し、それに膝を連動させ、力の流れを作り出し、腿、股関節と力が流れたところで、腰を同じく右方向に切る事で、更なる力を流れに加えていき……腹、右の肩甲骨を右方向に切った瞬間に、返す刀の左フックを、飛び込んできた“かまいたち”の右の横つ面に叩き込んだ。

グシャッ！……！と、相手の顎を己が拳が砕く、鈍く生々しい打撃音が、周囲に響き渡る。

童子の拳をもろに受けた“かまいたち”は、打ち抜かれた方向に頭や首を弾き飛ばし、そのままの勢いで、体丸ごと、横の壁に吹き飛ばされた。

壁へと蜘蛛の巣状のひび割れを作りながら叩きつけられた“かまいたち”は一瞬、そこで叩き潰された蚊の様に壁に張り付いていたが、そのままズルズルと、血のラインを引きながら、一階の廊下へとずり落ちていった。

瓦礫が散乱する、一階の廊下へと意識を沈めていった“かまいたち”の男の首は、痛々しい“突起”を作りながら折れ曲がり、顎を砕かれた口からは大量の血を吐き出させ、更には殴られた衝撃で少しだけ飛び出てしまった眼球が、彼の細かった瞼を大きく見開かせていた。

そんな自らが仕留めた相手を、一瞥する事も無く、童子はそのまま瓦礫の小山から降り、妖狐のもとへと向かった。

周囲の妖怪である筈の生徒や教員たちは、この、あまりに単純な暴力が生み出した光景に、ただただ、眼を見開き、驚愕するしかなかった……。

圧倒的だった……。

この言葉しか、童子さんの“戦い”とも呼べなかった出来事に述べる感想は浮かばなかった。

あれ程、私と虎熊さんが手も足も出なかった相手を、たったの二撃……いや、やろうと思えば、多分一撃で倒せていたと思う。

というより、本当に童子さんが、二発だけしか攻撃をしなかったのかも、分からなかった。

どうして二発と判断したのかと聞かれれば、それは私には二回だけ、打撃音だと思われる音が聞こえてきたからだ……だけど実際に、その二発の音も、全く間髪が無かったので、自信は無いのだけど。

「妖狐。その娘と、虎熊の様子はどうか？」

あまりの出来事に、事態が飲み込みきれていなかった私の目に、上半身裸の童子さんが、瓦礫の小山から降りてくる姿が映った。

「虎熊は少し危ないが、大した事は無い。鏡花は、可愛い顔の左米神にちよつとした傷がついているくらいだ」

“かまいたち”の男を圧倒し、相変わらずの眠そうな眼をした童子さんを、妖狐さんは、何事も無かったかの様に迎えた。

童子さんは、そのまま私の前まで歩いてくると、腰を抜かした私の視線にあわせる様にして膝を地面に着いた。

「すまなかった……やはり、俺が職員室まで着いていけばよかった」  
小さく頭を下げながら、私に本当に気にした様子で謝ってくる童子さん……。

そんな、別に童子さんは悪くないのに……。

「いえ、その……別に気になさらなくても良いですよ。実際、助けてもらったのは事実なんですし」

そう言いつつ、私は蜘蛛の巣状のひび割れを起こした壁の付近で転がっている、童子さんが倒した“かまいたち”の男の人へと視線

を向けた。

左腕に生えていた刃は、前腕ごと破壊され、首はありえない方向に折れ曲がり、顎にいたっては力なくだれ下がっている……目も少しだけ眼球が外に飛び出た状態で、仰向けで天井を仰ぐようにして倒れている。あれって、生きてるのかな？

昔、修行中に現れた妖怪を、お父さんが倒した時は、もうちょっと綺麗に倒していた気がする。

そんな風に、私が“かまいたち”の男の人を見ていると。

「鏡花。そんなに妖怪が倒れた姿が珍しいか？」

「え？」

妖狐さんが、少し楽しそうな声音で、私に聞いてきた……あれ、なんだか機嫌が良くなってる？

「安心しろ、妖怪は、ああなっても、治癒してくれる者が優秀なら、死にはせん」

「それって、本当なんですか？」

正直信じられないといった表情で、私は見上げる妖狐さんに返す。だって、あんなになっっている状態で、生きているなんて……正直考えられないんだもん。

「本当だ、証拠に、ほれ……先公どもが、落ち着いているだろ？」

本当に死人が出れば、どう世間に知られないように揉み消すか、てんやわんやしている筈だからのう」

「揉み消す……ですか」

「ああ。実際、この学校では毎年死者が出ておる……原因は様々だが、取り分け、今回の様なトラブルや、“序列戦”での事故が多い」また、“序列戦”……さっきも、虎熊さんと呼ばれている、私を助けてくれた人が言っていたワード。

本当に気になっていた私は、自然と口に出してしまっていた。

「あの、“序列戦”って、何なんですか？　こんな事が起きても、他の人たちからの助けがないなんて……」

「異常か？　それは、おぬしの価値観であろう？　私らにとっては、



ごく当たり前の事だよ。生徒間同士で戦い、相手より自分が強いと証明した者が、序列を上げ、妖怪社会のピラミッドの一段上へと登る……それは、遙か昔から行われてきた、妖怪たちの風俗と言っても良い。いいか？ “序列戦” とはな、これを学園のみで行う、妖怪社会の縮図の様な制度なのだ」

妖怪とは、人間と交流を始めた今でも、独自の文化を守り抜きながら生きている……昔、お父さんから聞かされた言葉を、私は今、ふと思い出した。

「まあ今回は、あぬしが狙われたのは“序列戦”とは関係の無いトラブルだったみたいだがのう。覚えておくといい……おぬしも学園に籍を置く限りは、この制度からは逃れられない。次も、私や童子、その虎熊の様な助けが入るとは思わぬ事だな。まあ、巻き込まれたくないのなら、強くなれというだけの話だが」

脅かすように、片眉を上げながら、私を見てくる妖狐さん……すると、今まで黙っていた童子さんが、スッと、膝を着けていた廊下の地面から立ち上がった。

「妖狐。俺は、先生方に天井を壊した事と、この騒ぎの事について謝ってくる。だから、二人を頼めないか？」

「おう、好きにしろ」

「分かった、なら、行つて来る」

「ああ、さっきは格好よかったぞ」

そう言つて、立ち去ろうとする童子さんに、妖狐さんは思い出し、たかのように微笑みながら、賛辞の言葉を送った。それに童子さんは、軽く片手を挙げる事で答えて、先生たちのもとへと歩いていった。

この様子を見て、私は何だか妖狐さんの機嫌の良さが、少しだけ理解できた気がした……多分、仲のいい人の、自分の好きな姿を見て上機嫌になっているのだと思う。

「さて……頼まれたからには、私も何かせんとな」

童子さんを見送った妖狐さんが、私へと歩み寄つて来る……。

「ほれ、顔を上げてみい」

「え、あ、はい」

私の顎を、妖狐さんは、その白く細い指で“くいっ”と、軽く持ち上げると、なにやらマジマジと私の顔を観察し始めた……。

わわ！ 顔が、顔が近いよ！

「ふむ……やはり、怪我は米神のところだけかのう。これなら、薬でも塗っておけば治るな」

「薬、ですか？」

妖狐さんの顔が近い事に、必死になって動揺を隠していた私だけど、たぶん、両頬が熱い事から、相当顔が真っ赤になっていたと思う。

「妖怪には、色々な薬草を調合して、薬として売るのを商売にしている種族もいてな。それから譲り受けたものなら……」

言いながら、妖狐さんはスカートのポケットをガサゴソと弄る……

…「お、あつたあつた」

スカートのポケットから取り出されたのは、ラベルに“塗り薬です”と書かれた、絵の具の様な形をしたチューブ式の塗り薬だった……今時チューブなんて、珍しいなあ。

「“人間には試したことは無いが”、まあ大丈夫だろうからな。我慢しろよ？」

「え？」

今、確実に、妖狐さんは不穏な事を言った……。

人間に試したことが無い？

そういえば、妖怪と人間の体って、頑丈さに比べ物にならない程の差があつて、肌も例外ではないって、TVで聞いたことがある……そんな妖怪が使う塗り薬を、人間である私に使う？

これって、もしかして、少し危険なんじゃないかな？

「こうやって、指に塗り薬をちよつとだけ出して……」

私が頭の中でTVで言っていた事を思い出していると、すでに妖狐さんは、その右の細指に、キャップを外したチューブの中身を、

ご飯粒程度の小ささで出していた。

そして、全く躊躇することなく、私の左の米神辺りに出来ていた傷に、薬を塗りつけようとする……けど、させない！

「むっ？」

妖狐さんの、薬の付いた右人差し指が、私の米神に迫った瞬間。

私は、眼を瞑るほど力みながら、首を横に振って、薬が付くのを避けた……その様子に、少しだけ目が細まる妖狐さん。

だけど妖狐さんは、細まった視線を私に向けたまま、再び、右の人差し指に付いた薬を、私の米神に塗ろうと手を伸ばす……けど、やらせない！！

「むむっ？」

嫌々と唇が震えるほど噛み締めながら、私はまた、妖狐さんの薬を避けた。

妖狐さんは片眉を吊り上げた……。

そして再度、私の米神に薬を塗りつけようと、右人差し指を近づける……後生だから！！

ガシッ！

ああ！？

「うー！ うー！」

「ええい！ 逃げるな、この小娘！！」

妖狐さんは持っていたチューブを、その辺に捨てると。

何度も薬から逃げようとする、私の顎を、反対の左手で鷲づかみにする……そして、そのまま、私は抵抗虚しく、妖怪御用達の塗り薬を、左の米神にぬりぬりされてしまった。

あれ……なんだかスーってする。

「ふふ、気持ち良いのか？ 抵抗する力が無くなってきたおるぞ？」

「ふあ……」

鷲づかみにされてしまっているせいで、ひよっとこみたいに開きっぱなしの私の口から無意識に、しまりの無い、だらしないため息が漏れ出てしまう……。

だって、しょうがないじゃん……こう、一気に傷口から熱が抜けていく感覚が、スーってしてて気持ち良いんだもん。

「抵抗しなければ、可愛いものじゃないか……食べてしまいたいぐらいだぞ？」

「ほへへ」

傷口に触れるか触れないかの絶妙な触れ方で、くりくりと円を描くように、優しく塗ってくれる妖狐さんの神がかった手つき……これに、このスーって感覚が合わさったとき、だらしのない顔をしない人間なんて、いないと思うんだ。

そうこうしていると、妖狐さんは、私に薬を塗り終わったみたいで……。

「あつ……」

「何だ？ 名残惜しい顔なんてしおつて。そんなに気持ち良かったのか？」

終わった途端に、余韻に浸ることなく離される妖狐さんの指に、私は思わず声を漏らしてしまった。

それに“仕方の無いやつめ”といった表情で、私を見下ろしてくる妖狐さん……。

私は、もじもじと恥ずかしがりながらも「は、はい……気持ち良かったです」と素直に答えた。

「そうか。薬を塗ってやっただけで、ここまで喜んでくれるなら、私も嬉しいよ」

優しくに微笑みながら、そう言って、私から離れていく妖狐さん……。

どうやら、私の治療は、もう終わりで、今度は重症の虎熊さんの治療に移る様だった。

「さて、問題はおぬしだが……どうするかの？ 私は治療系の術は使えんだ。放置で良いか？」

「「ええっ!？」」

然もあらんと、軽い声音で発せられた妖狐さんの言葉に、私と虎熊さんは思わず驚きの声を挙げてしまう……だけど、そんな私と虎熊さんの反応を心外に感じたのか、妖狐さんが、その形の良い大き

な胸を張りながら、両手を腰に当てるといふ堂々とした姿勢を取った。

「何を驚いておる？ 私は妖怪だぞ？ 人や治癒系の術が得意な種族ならまだしも、私は他人を治す様な便利な術など覚えてはおらん。覚えておるのは、敵を焼き尽くし、蹂躪する様な、ド派手な術だけだ。見くびるでない！」

「いや、見くびってはいないと思いますが……」

さっき、頼まれたからには何とかしないと、とか言ってたじゃん！？

私は、喉の途中まで上り詰めていた、この言葉を、何とか抑えながら、取りあえずは困ったような声を出すことで、その場をしのいだ。

さっきの塗り薬の件もあるし、妖狐さんに逆らうのは止めておいた方がいいと、無意識の内に理解していたのかもしれない……。

いや、そんな事は、どうでもよかったんだ。

それじゃあ、お腹とか刺されてしまった虎熊さんの怪我は、どうすれば良いの？

そんな事を考えていた私は、自分を助けてくれた虎熊さんの事を、いつの間にか心配そうな眼差しで見つめていた。

“ かまいたち ” の男の人に切られた制服や体には、無数の裂傷がみられ、右の脇腹には、あの鋭い爪先で刺された傷跡が、痛々しく、今も血を流し続けている…… 気丈に黙って妖狐さんの前で、気を付けの姿勢で立っているけど、多分、相当辛いのだと思う。

ジーっと、虎熊さんの横顔を、腰を抜かしたままの体勢で見つめていると、妖狐さんが、私の視線に気付いたみたいだ。

「おい鏡花？ 何を虎熊の横顔を、マジマジと見ているのだ……ハッ！ まさか、おぬし、たった一回助けてもらっただけで、心を許してしまったのではあるまいな！？ やめておけ。こやつを思ったところで、苦勞するのは目に見えておる…… おぬしなら、もっと良い男を見つけられる筈だ」

私が虎熊さんを見ている事に気がつく、妖狐さんは焦ったように、私の両肩を掴み、諭す声音で、真剣な眼差しを向けてきた。わざわざ膝をついてまで、全力で私を諭そうとする妖狐さん……何も、本人がいる前で、そんな事を言わなくても良いのに。

「べ、別に、そんなんじゃないですよ？　ただ、傷が酷いですし、早く治さないとって思っただけです」

「そうか……ふう。若者は、すぐに気の迷いを起こして、どうでも良い男に惚れたりするからの。おぬしも気をつけるのだぞ？」

そう言つて、妖狐さんは、額の汗を拭う仕草をとる……別に、汗一つ掻いても無いのに。

でも実際、惚れたりほしなにしても、恩は感じているのは確かだ。

何とか、この恩を返す事は出来ないかな……と、考えていた私に「そういえば」という考えが浮かんだ。

「うん？　なんだ、急に思い出したかのような声を出して？」

「え、ああ、ちょっと、思い出した事がありました」

どうやら急に浮かんでしまった事で、声に出してしまった様で、妖狐さんが訝しげな表情で私を見る。

「ただ、そんな視線を向けられても、今は良く思い出したと、自分を褒めてやりたい気分なのです。」

「何を思い出したのだ？　昨日の晩飯か？」

「そんなどうでも良いことを思い出したぐらいで、嬉しそうに声に出すような人に見えます、私って？」

「いや、外見なら、なかなか可愛らしくて魅力的だぞ、おぬしは？　それに、霊力も神通力も高いし、何より“家柄”が……っと。とにかく、おぬしは愛でたいほどに可愛らしいぞ」

なんだろう……途中、聞き取りづらいところがあったけど。

まあ、今は良いや。

とにかく、妖狐さんの褒め言葉はこそばゆいけど、今は早く、思い出した事を実行しないと。

「えっと、なんだか、そんなに言われると嬉しいんで恐縮ですけど……そんな事より、思い出したんですよ！」

「何をだ？」

「私、治癒系の術が使えるんですよ！」

瞬間、この場の空気が凍りつく……。

うん、分かってますよ……こんな空気と視線を向けられれば、誰だって、相手が何を言いたいのか気付くってものですよ。

「そ、その……あまり、そんな目で見ないでください。私だって、忘れてた事に驚いてるんですから」

「いや、まさか、自分が使える術を忘れるような奴がいたとは……流石に、驚いてしまったのう」

気まずそうに、私から視線を逸らす妖狐さん……私は忘れない、さつき、場の空気が変わった瞬間、妖狐さんが、可哀想な者を見る目で、私を見ていたことを。そして、一瞬、虎熊さんが、吹き出しそうになつていた事も……いつか、見返してやるんだから。

「そ、そんな事より！ 私、ちゃんと思ひ出しましたから、早く虎熊さんを治してしましましょうよ！」

場の空気を変えるために、私は胸の前で“パン”と両手を叩くと、努めて明るい声音で、二人に言った。

「そ、そうだな。とりあえず、今は応急処置ぐらいの術で十分だから、頼めるかのう？」

「は、はい！ 任せてください！！」

そう言つて、私は元氣よく立ち上がろうとするのだけれど……。

「あ、あれ……？ た、立てない」

どうやら、まだ腰が抜けていたみたいです……うう、情け無いにも程があるよ。

「仕方ないのう……虎熊。治してもらえるのだから、おぬしから動かぬか」

「はい……」

妖狐さんの指示で、虎熊さんが、お尻すら床から上げられない、

私の前に近づいてきてくれた。

「あのう……手が届かないので、もう少し屈んでくれませんか？」

だけど、目の前で立たれてると、私の手が、虎熊さんの傷口に届かなかったので、なるべく上目遣いをお願いする……この辺は、前に友達から教えてもらった“男に自分の言うことを聞かせる3つの方法”が活きたみたいで、虎熊さんは、素直に指示に従ってくれた。上目遣い様々だ。

「とりあえず、上着を脱いでください」

「分かった」

服の上からだ、と、治療術をかける相手の肉体が意識しづらいから、邪魔だったので脱いでもらう。

すると、そこから露となったのが、年頃の男の子の体……。

うわあ、腹筋つて、本来は、こんな風に割れてるんだ……胸も硬そう。

「何を頬を赤らめているのだ？」

「え、あ、はい！？　すぐに治します、はい！」

いけないいけない……ついつい、初めて見る、年頃の男の子の上半身を凝視してしまった。

え、童子さんのはって？

あれは何だか、もはや一つの作品を見てみたいだったから、恥ずかしいって感じは無かったかな。

「えっと……まずは、この一番酷いところからですね」

邪念を振り払うように、私は、これから行う治療術に集中する事にした。

改めて傷口を確認すると、結構深いところまで刺さっていた事が分かった……こんな怪我をしても、辛そうだったけど立っていられるなんて、やっぱり人の姿に変わっていても、妖怪なんだなっけしみじみ思う。

指された箇所は右の脇腹……そこからは、いまだ血が流れ続けていて、綺麗に刺された傷跡が、生々しく赤い血液の通った肉を大気



に晒していた。

正直、あまり直視はしたくないほど、気持ち悪い光景だけど、そうも言ってられない……これで、少しでも恩を返すんだから。

「目を瞑って、気を落ち着けてください……今から、始めますね」

「……分かった」

そう言つて、虎熊さんは、静かに目を瞑った……。

私は、ゆっくりと一度、気を落ち着かせるために、意識を集中させると、虎熊さんの右脇腹の刺し傷に、両掌をかざす様に近づけた。

そして、私も虎熊さん同様、静かに眼を瞑る……。

（集中して……そう、相手の体温と鼓動を感じるように、靈力で相手を包み込む）

すると、私の体から、淡い青色をした、光のような靈気が発せられ始める……これは、私が先天的に持っている靈力の色。神通力のような、修行で得るような力ではなく、生まれたときから人自身が持つ、一種の命の色の様なものだ。

その種類はいっぱいあって、青は水、赤は火、緑は木、黄色は土、金は白といった、五行に沿って色分けされたものが主流なんだけど、実際には混在も<sup>ブレンド</sup>あるから、本当に数え切れないほどあるらしい。その中でも、青の水は、人の大半を構成している水分を感じ取れる、または操れるために、治療術に最も適した色だと言われている。

私から発せられた、淡い青色の靈気が、目の前にいる虎熊さんの全身を。私がかざしていた両掌を通じて、まるで蚕の繭の様に包み込んだ後、次第に、全身のラインをかたどる様に凝縮されていく。

（体温は、やっぱり少し下がってるけど、問題は無いみたい……鼓動も焦るほどのものじゃない。凄い、これが妖怪の体なんだ……）

虎熊さんの体を包み込んだ靈氣を通じて、私に、彼の血液の流れや様々な情報などが流れ込んでくる……これをやっている時は、対象者の体温を全身で感じるため、とても暖かい気持ちになるのだけだ。今は、少し虎熊さんの体温が下がっているみたいで、通常よりも暖かくない気がする。だけど、それでも鼓動に異常はないのだから

らと、私は改めて、妖怪の生命力に驚いた。

（心臓から血液の流れを感じながら、傷がどれだけ深いのか、血管や内臓・筋肉の損傷具合を探る……やっぱり酷い）

胸中で、さっき思い出したばかりの治癒術の基本を復唱しながら、虎熊さんの傷を確認する……どうやら、右脇腹を深く刺されたことで、肝臓に穴が開いてしまっていたようだ。

そこからは大量の血が出ていたけれど、虎熊さんは、それを妖力を使って、塞き止めていたみたいだった……多分これは、以前お父さんが言っていた、妖怪の自己防衛本能が働いた結果だと、私は当たりを付けた。

（よし、刺し傷の具合は確認したから、後は治すだけだね……）

実際、私にとって難しいのは、ここまでの怪我の具合を把握する作業なんだ……理由は、ただ霊力の使い方が大雑把っただけならしいのだけど。正直、どんなに集中しても、こういうのだけは、何故か得意にならない。

まあ、そんな事はともかく、ちゃっちゃと傷を治しちゃいまいしよ  
うか。

そう考えた私は、まずは穴の開いた肝臓に、私の水に特化した霊力を注ぎ込む……すると、血管の流れをコントロールされ、水気の霊力を得た肝臓は、みるみる内に、穴の開いた箇所を塞ぎ始めていく。これは、内臓にも筋肉があることが理由の現象で、水気の霊力を流し込まれた筋肉の細胞が、急激に活性化し、その自己再生機能を極限までに高めるのが原因みたいだけど……細かい事は、私には分かりません。

だって、細かい事を考えながらやると、私って失敗しちゃうから、結構感覚でやってる部分が多いんだ……人に言くと、お前頭悪いなとか言われるので、悲しくなるから絶対に言わないけど。

何の問題も無く肝臓の穴を塞いだ私は、この後、同じ要領で、虎熊さんの全ての怪我を治していくのでした……。

（これほどとは……驚いたな）

目の前で、行われている鏡花の治療術を見て、妖狐は思わず胸中で驚きの声を漏らしてしまう。

青い靈気で包まれた二人……その一方の、虎熊が負っていた全ての傷が、みるみる内に元に戻っていく。

（靈力の使い方は、雑にも程があるが。それにしても、この治療能力は、凄まじいな……流石は安部家の者、腐っても鯛とは、まさにこの事か）

鏡花の高い靈力と、もともと水に特化している才能によって、細かい技術こそ無いものの、半ばごり押しで進められていく治療術であったが……結果は一目瞭然、既に虎熊が負っていた傷は、完治寸前にまで来ていた。

心なしか、鏡花の靈気に包まれている虎熊の表情が心地良さそうになっている……。

そんな光景を眺めつつ、妖狐が腕を組みながら黙して立っている。

「すまない妖狐。俺はこれから、この壊した天井を直す作業を手伝わないといけないらしいから、先に教室に向かってくれ」

先ほどまで教員に、今回のトラブルの事と、天井の事について謝りに行っていた童子が戻ってきた。

「……はい、終わりました」

同時に、鏡花の治療術も終わった様であった。

ゆつくりと、虎熊が閉じていた瞼を開ける……。

「……凄い。全部治ってやがる」

自らの体を直に触れながら、さっきまで肝臓に穴が開くほどの深い刺し傷があった右の脇腹を確認した虎熊は、鏡花の治療術の凄まじさに、思わず驚きの声を漏らしてしまう。

「これ、虎熊よ。まずは礼だろうに」

「あ、すみません妖狐さま……その、ありがとよ、治してくれて」  
腕を胸下で組んでいる妖狐が、驚きに呆然としていた虎熊に礼を述べるように注意すると。虎熊は、素直に目の前で、いまだに廊下の地面にお尻をつけていた鏡花に頭を下げる。

「そんな、私こそ、ありがとございます。虎熊さんが、あの時、庇ってくれなかったら、私、もしかしたら死んでいたかもしれないから」

頭を下げてきた虎熊に、鏡花も同様に頭を下げる。

「安部さん、俺からも礼を言わせてくれ」  
「え？」

すると、そんな二人のやり取りに、突然、いまだ上半身裸の童子が、真剣な面持ちで割って入ってきた……心なしか、眠たげにしていた目が、少しだけ開いている様な気がする。

「君が虎熊を守るうとしてくれた事は、さっき先生から聞かされた。それに、怪我まで治してもらっては、虎熊の主である俺からも、礼を言わなければ、君に失礼というものだ」

「そ、そんな……別に良いですよ、私だって助けてもらった身ですし」

「いや、そういう訳にはいかない……」

童子は首を振って、鏡花の遠慮を退ける……この時、童子の隣にいた妖狐が「ああ……また悪い癖が出おった」と、ため息を吐きながら疲れたように呟いていた。

「相手に何かしらの恩義を感じたとき、それを返すのは当然のことだ。もし返さなかったのなら、そいつは恩知らずと言う事になってしまう」

「いや、その理屈は……」

「だから、何か困ったことがあったのなら、その時は俺に言ってくれ。護衛だろうと荷物運びだろうと、何だってやってみせる」

「は、はあ……」

困ったように生返事を返すことしか出来ない鏡花に、童子は何か

を勘違いした様子で満足そうな顔を見ると、今度は傷が癒えたばかりの虎熊へと視線を向けた。

「虎熊」

「はっ！」

童子の呼びかけに、短く返事を返しながら居ずまいを正す虎熊……。

その光景に鏡花は、さっきの妖狐の話通り、二人が何らかの主従関係の間柄にある事を、漠然としながらも理解する。

「今回は相手方の妄言という事で、先生に納得してもらえたし、まだ俺が、お前に“序列戦”に参加することを認めていないという事も伝えた……だから、安心しろ」

「はっ！ お手を煩わせてしまい、まことに申し訳ございませんでした！」

「別に、そんなに畏まらなくてもいい。俺はただ、お前が無事だったことだけで十分なんだ。今後は、もう無茶はするなよ？」

「はっ！」

二人の妙に仰々しいやり取りに、鏡花は面を喰らった様な気持ちになる。

すると、そんな鏡花に、妖狐が、静かに耳打ちをしてきた。

（さっきも言ったが、童子は虎熊の主でな。その関係は、あやつらの祖先から続いている関係なのだ……）

（そうなんですか？）

耳打ちで小声の妖狐に合わせ、鏡花も小声で話し始める。

（ああ、本当だ。というより、おぬしも陰陽師なのであるう、そのくらいは知っておけ）

（は、はあ……）

よく分からないといった様子で返事を返す鏡花に、少し呆れ顔をするも、妖狐は説明を続ける。

（で、だ……この妖怪学園では、規則として“序列戦”を挑む場合、相手の了承を得た後に始めるというものがあるのだが。これは、ま

あ妖怪のプライドからして、殆ど断らないのが当たり前での、有って無いようなものなのだ)

(それが、童子さんと虎熊さんの話に、どんな関係があるんですか?)

(この規則には、一つの例外があるのだ)

(例外?)

(そう、例外だ……簡単に言ってしまうえば、主従関係にある妖怪で、従者として主人の支配下に入っている妖怪は、主人の許可無く、“序列戦”に参加してはならないもののだが……これには理由があつての。もし、従者が勝手に“序列戦”を受け、主人に黙って死んでしまった場合、そこから新たに従者を殺めた相手と主人の争いが始まってしまう。それが妖怪社会で大きな権力を持つ主人なら、下手をすれば、大小問わない戦争が起こっても可笑しくはないのだ)

(戦争……ですか?)

(そうだ)

ゴクリと、鏡花は息を呑んだ……。

昨今の人間と妖怪が交わっている社会では、こと争いという概念が希薄になっては来ていると、“表の情報では”謳われてはいるが、鏡花のような、妖怪たちと争う力を持った者達の間では、小さなざこざから、大きないざこざまで、様々なトラブルが起こっていることは周知の事実なのだ。

その事は、まだ修行中の身とはいえ、鏡花も父親である大鏡から聞かされ、ある程度は理解している。しかし、鏡花の場合は、ただ聞かされただけであつて、事実を垣間見たことすらない……それが、今回の命の危険があつたトラブルや、身内ではなく他者からの言葉によつて、急に現実味を帯びてきた。

人間と妖怪は、一世紀以上前から、ある大きな出来事が切欠で交流を深めてきた。これにより、現在では、妖怪側の戦力も相まって、非常に対等な関係を築けている……鏡花にも、実家の近所には、妖怪や混血の友人が何人かいるくらいだ。だが、争いがあるのも、ま

た事実。

現実というものを理解し始めた鏡花の胸中を察してか、妖狐が、小声ではあるが、少しだけ、気が紛れるような微笑ましい声音で、話を続けた。

（まあ、それも今では殆ど起きてはおらんから、安心しろ……ここ最近、起こった荒事と云ったら。去年に起った、いけ好かぬ小娘ヴァンパイアが、学園中に夜行人の出来損ないを放った事ぐらいだ）  
（それって、普通に危ないじゃないですか……何が原因で、そんな事になったんですか？）

こちらの事を察してくれた妖狐の声音に、少しだけ気が紛れる思いをするも、鏡花は苦笑を禁じ得なかった。

しかし、鏡花に原因を聞かれた妖狐は、何かを思い出したのか……その白面とも言える、美しく整った顔立ちを、怒りに歪ませながら、震える声音で口を開いた。

（いやなに……原因は些細な事だったのだ）

（妖狐さん、顔が怖いです……）

（あの糞小娘が、身の程も弁えずに『童子が欲しい』とほざき始めての……ルーマニアの由緒ある貴族の出らしいが、自身より格上の妖怪を欲しいなどと……片腹痛いを通り越して、腸が煮えくり返ったわ）

もはや、耳打ちはしているが、鏡花を見ていない妖狐の鋭い目は、冗談ではなく人を殺せそうな程にぎらついていた      ああ、多分、この原因の途中を聞く限り、妖狐さんと、そのヴァンパイアの娘がトラブルの発端だったんだろうな      と、鏡花は珍しく察しのいい答えに自然と行き着いた。

「何しているんだ？」

「……うん？ おお、童子か、もう話は済んだのか？」

そうこうしていると、虎熊との話が終わったのか、童子が不思議そうな視線で、何やらコソコソとしていた二人を見下ろしていた。

かけられた声に気付いた妖狐は、先程までの怒りに歪んだ表情を

治めながら、耳打ちしていた鏡花から立ち上がって、童子に向き直った。

「ああ。もう話も終わって、アイツは教室に戻した」

「そうか、なら、私も行くとするかの」

「いや、俺はこの修繕を手伝わないといけないから、先に行つてくれ」

「ふん……生真面目なやつめ」

言いながら、童子も含めた、この場にいた三人が、廊下に小山を作るほどの鉄骨やらコンクリートの瓦礫の塊に視線を向けた……。

これの修繕って……上は三階までの吹き抜けになっちゃってるし、どれくらい掛かるんだろう？

「なんだ？ 呆けたように天井なんて見おって」

「え？ いや、これを直すんですか？」

腰を抜かした状態で、吹き抜けになつてしまった一部の天井をホケッと眺めていた鏡花に、瓦礫の小山から視線を外した妖狐は、締まりの無い彼女の顔を指摘するかのように声をかけた。

それに、鏡花は“こんなもの、学生に直せるの？”というニュアンスを乗せながら尋ねた。

「まあ、直すとは言つても、童子は手伝いだけであろつからな。主にやつてくれるのは、用務員の“ぬりかべ”さんだ」

「“ぬりかべ”さんですか……」

「そうだ、“ぬりかべ”さんだ」

もう、何から何まで妖怪尽くしの学校なんだなと、改めて身に染みたのを感じ、ははは……と、乾いた笑みを浮かべる鏡花。

「では、ほれ、行くぞ鏡花」

「え？」

そんな乾いた笑みを浮かべていると、妖狐が少しだけ身を屈め、腰を抜かした状態の鏡花に手を差し伸べた。

「どっちにしろ、そんな状態では、職員室にも一人で行けぬであろう？ 今日はどうせ、朝のSHRは遅れるだろうから、私が連れて



行つてやる。感謝するのだな」

そう言つて、妖狐はニツコリと微笑む……。

その微笑に、自然と安心感を覚えた鏡花は、廊下の地面にお尻を着いたままであつたが、ゆっくりと差し出された手を取つた……妖狐と鏡花の掌が重なつた瞬間、腰を抜かしていた鏡花が“グイ！”と体ごと引き上げられた。

「まだ、自分では立てぬか？」

「はい……すみません」

「そうか、なら私が抱えてやろう」

「え？ うわっ！？」

立ち上げられたものは良いが、ヨロヨロと覚束ない足取りの鏡花の様子を見て。妖狐は、その細腕からは考えられない力強さで、鏡花の膝裏と背中中に手を回し、いわゆるお姫様抱っこで、人ひとりを楽々と抱え上げて見せた。

それに驚きの声を上げる鏡花……心なしか、頬が紅潮しているようにも見える。

「まずは職員室に行つて、おぬしが在籍するクラスの担任を見つけろ。そうしたら、後はその担任に任せれば良いからな」

「は、はい！」

同性ではあるが、抱えられた状態で見上げる妖狐の顔立ちや、体に当たってくる豊満な胸は、鏡花の思考を停止寸前までに追い込むには十分な威力を誇つており、思わず可笑しな返事を返してしまう。しかし、それに妖狐は特に気にした様子は見せず、お姫様抱っこで鏡花を抱えたまま、この瓦礫が小山になつた廊下を悠然とした歩調で立ち去つていった。

## 妖怪たちの学び舎（後書き）

この小説は、これまで作者が書いてきたようなノープランな感じではなく、確りとプロットを建てて書いていこうと考えているので、かなり遅い更新になると思いますが、何とぞ、ご理解の方をお願いします。

## 不運の転入初日

転入初日、SHRでの挨拶！

新しいクラスメイトとの初顔合わせ！！

ご近所以外の、妖怪の方々との初めての交流！！！！

さつき起こったトラブルなんて、なんのその！！！！

ワクワクが止まらない、新たな環境への変化と修行への始まりに、私は胸を高鳴らせ……。

そして、見事に玉碎されました……ええ、既に挫折しそうです。

「えゝそれでは、お前らの新しい仲間から自己紹介があるから……」  
そう言って、無事、転入を果たしたクラス担任の先生が、教段の下に立っている私に、視線を向けてくる……これは、私に自己紹介をしろと促しているのだろうけど、まずは、このクラスの状況を見渡してから言って欲しいよ、本当に。

「えっと……私立聖上女子高等学校から転校してきました、安部鏡花<sup>うか</sup>と言います。実家が陰陽師の家系で、この学校には修行のために来ました。これから残りの二年間、よろしく願います」

私は、なるべく元気良く自己紹介を述べながら、45 に上半身を傾ける理想的な一礼を、目の前にいる29人の新しいクラスメイトの人たちに向ける……そして、ゆっくりと長い黒髪を揺らしながら頭を上げると。

『おい、見ろよ……』

『ああ、美味そうな肉付きをしてやがる』

『可愛いなあ……特に、あの“眼が美味そうだ”』

『へえゝ……ねえ？ あの娘って、“こつちの世界”に興味ありそ

うかな？」

『さあ？ でも、それっぽい雰囲気はあるから、一回押し倒してみれば？』

自分達とは異なる種族である、私に対して、様々な会話のやり取りが行なわれていました。

その男子生徒、明らかに蛇みたいに二股に別れた舌で、私を見ながら舌なめずりするのには止めてください……本当に背筋に悪寒が走ったから。

窓際のボーイッシュな赤髪をした女の人、眼とか言わないで、私を食べても、絶対に美味しく無いよ。だって、ジャンクフードとか大好きだから、きつと体に悪い老廃物とか溜まってるだろうから。

えっと、その……廊下側の最後列のお二人、というより“お姉様”がた”。私を、そんな眼で見ないでください。なんだか、恥ずかしくなってくるので……てか、あなた方、隠す気も無さそうな尻尾の先が“ハート型”だから、サキュバスですよ？ サキュバスって、普通逆の趣向に旺盛な種族なんじゃないですか？ なんなんですか“こっちの世界”って！？ 私、それっぽい雰囲気なんて、これっぽっちもありませんから！！

「じゃあ安部の席は、そうだなあ……」

私の自己紹介が終わったと見ると、ごく一般的な机や椅子が並べられた、三十人学級によくあるクラスの風景を、担任の先生が教卓に両手をつき、教段の上から見渡す。すると、窓際最後尾の机と椅子に座る、一人の女子生徒が、プラプラとダルそうに“ここだ”と自分の存在を主張しながら手を挙げ始めた。

「うん？ どうした九尾？」

どうやら、その自己主張が先生に届いたようで。聞かれた女生徒、九尾妖狐くおこいひさんは、何やら良い事を思いついたかのような笑みをニヤリと浮かべながら、黒板の前に立つ私に視線を向けた。

その少しだけ吊り上った、切れ長の綺麗な瞳と眼が合った瞬間、私の胸の鼓動に、ドクンと跳ね上がるような感覚が襲った……心な

しか、両頬が熱い。

「鏡花とは、さつき知り合った仲での。席ならちょうど、私の隣が空いてるから、そこに座らせればよい」

先生とは眼を合わせず、私に視線を向けたまま軽い声音で、そんな事を言う妖狐さん……。

きめ細かでガラス細工の様なストレートロングの金髪に、細く整った顔立ちと輪郭、モデルを思わせるスレンダーかつ、出るところは出ている背の高いプロポーションは、とても同年代とは思えない、大人びた雰囲気醸し出して……だけど、ふんぞり返って座っている姿で、その辺は±0といった所に落ち着いていた。でも、それでも、本当に綺麗な人だなあ……。

「そうなのか、なら安部。あそこで手を振っている、横柄な奴の隣に座ってくれ」

「……あ、はい、分かりました！」

「うん？ なにを、そんなに驚いたような声を出しているんだ」

「いえ、別に何でも無いです、えへへ……」

いまだ眼を合わせ続けている妖狐さんに、いつの間にか目を奪われていたのか。

私は、先生から掛けられた声に、一拍の間を開けた、ちよつとだけ上ずってしまった返事を返してしまう……なんだか、今日は色々調子が狂うことばかりだよ。

やっぱり、新しい環境って、無意識の内に緊張しちゃうのかな……さつきから、朝もそうだったけど命の危険だって感じてるし。

そんな事を考えながら、私は妖狐さんと眼を合わせたまま、高鳴る鼓動を抑えながら、先生に指定された席へと歩いていく……あれ？　なんで私、妖狐さんから“眼が離せない”んだろう。それに、近づく毎に、胸の高鳴りが抑えられなくなってくる……体が、火照ったように熱い。

「ほれほれ、早く、ここに来るのだ……」

私の様子を知ってか知らずか、妖狐さんは、そう言って、妖艶な

微笑みを浮かべながら手招きをしてくる……それに、つられるように吸い寄せられていく、私の意識と体。

窓際の列と、その次の列の間を歩きながら、私が何だかぼーっとしている……。

パンッ！！

「うわッ！？……あれ？」

先生に促された席まで、あと数歩と言うところで、突然、私の耳に誰かが手を叩く音が響いた。

その短くも頭にまで響いた音に、これまでぼーっとしていた、私の意識がハッキリと覚醒する……言うなれば、ちよっとした眠りから覚めたような、そんな感覚でした。

私の意識がハッキリとして、体の火照りも何もかも正常に戻ると、何やら視線の先で、さっきまで私の事を手招きしていた妖狐さんが「ちッ！」といった、忌々しそうな舌打をしていた。

「悔しがるのも勝手ですが、少々お遊びが“下卑にも程がある”のではないでしょうか？ 尻軽狐さん？」

「はんっ！ おぬしには言われたくないわ！ この色情魔の小娘ヴァンパイアが！」

私のちょうど後ろ辺りから、どこか透き通る様な少女の声が聞こえてきた……そして、窓際最後尾に座っていた妖狐さんが、その白面の眉間に皺を寄せながら、これまでふんぞり返っていた体勢から、机に手を付き、前のめりになってまで、声の聞こえてきた方向に妖気が漏れ出すほどの睨みを向ける。

「色情魔ですって……っ」

意識が覚醒し、正常な判断が出来るようになった私は、流石に妖狐さんが、これほどの睨みを向ける相手になったので、後ろを振り返る……すると、ちょうど教室の半分辺りの窓際の席に座りながら、こちらに首だけを向けていた、一人の“少女”と目が合った。

「オ、オホンツ！　べ、別に何と言われようと、このヴラド家の娘である私が、アナタわたくしみたいな、年中盛りきった品性の欠片も無い振る舞いしか出来ない下賤な女に、人並みの興味を抱くことなんてございませんで……そんなに睨んだところで、アナタ自身の底が浅くなっていくというものですわ」

私と目が合った瞬間、まるでフランス人形のような少女は、何かを誤魔化すかのように咳払いをしながら、睨みつけてくる妖狐さんに冷めた視線を送る……だけど、その色白で小さな体全体から出る禍々しい妖気は、妖狐さんから漏れ出ている妖気と比べても、ほとんど差が無い程に強力なものだった。

それに、この妖気を感じ……日本の妖怪とは異なった感覚だから、多分というより、容姿から見ても海外の妖怪、つまり“妖魔”のものだと断言できる。

「ほお……この私が、年中盛りきつてる品性の欠片も無い女とはのう。まさか、おぬしにそれを言われるとは……いやはや、世の中分らないものなのう」

「な、何が言いたいんですの？」

妖狐さんとは違った、軽いウェーブのかかった長いブロンドヘアが特徴的な少女は。どこか含みのある妖狐さんの口調に、努めて動揺を隠すように視線を流し目で妖狐さんから外していく……何この娘、私にすら動揺を見抜かれるなんて、凄く正直者で可愛い。

そんな少女の様子に“してやったり”と感じたのか、妖狐さんが、いやらしい微笑みを浮かべながら口を開いた。

「おぬし……一昨日、童子の部屋を覗いていただろ？」

「なっ！？　なんの事かしら、私にはアナタが何を言っているのか理解できませんわ。ちゃんと、現代人にも分かる言語を話してください？」

「あまり私を舐めるなよ？　おぬしが一昨日の夜、童子の部屋を、使いのコウモリを通して覗いていた事など、とうに気付いているのだぞ？」

「な、ななな何のことかしら！ わ、私にはサッパリですわ！」

「あれだけコウモリに、おぬしの妖気がこびり付いていれば、誰だって分かるものだから……それで、ばれてなかったと思っていた辺り、やはり、おぬしは救いようも無い小娘だ」

「い、言うに事欠いて、救いようも無い“ペッタンコ”な小娘ですつてえ……！」

ガタリと、私と同じ制服を着た、背の低い少女が、そのアーモンド形にハッキリと見開かれた、コバルトブルーの瞳を“血の様なワインレッド”に変色させながら、机の椅子から立ち上がった。

その細い四肢と白い肌は、本当に華奢な雰囲気醸し出していて、身長や容姿だけを見れば、とても15・6歳とは思えない幼い印象を、周囲に与えていたのだけど……さっきよりも、全身から溢れ出している妖気が、更に強力になっていつているのを見る限り、並みの妖怪なんて、少女がその気になれば一瞬で消されてしまうだろう。だけど、今の二人の言い合いを見ていると、なんだか危険な感じは一切しない……むしろ、微笑ましいと思ってしまうぐらいだ。

「別に“ペッタンコ”とは言っておらんだろう……まあ“絶壁”なのはフオローしように無いがのう」

呆れたように言いつつも、表情は勝ち誇りながら、自分の胸に手を添える妖狐さん……。

「ぜ、絶壁……っ」

それに文字通り絶句する、お人形さんの様な少女……。

確かに、あれ程の胸を見せびらかせられると、戦力の差を痛感させる終えない……分かる、分かるよ、その気持ち。

だけど、少女は違った……その小さくても、魅力的な膨らみのある唇を震わせながら、何とか反撃のために口を動かした。

「ま……まあ、胸の大きさは、この際、置いておくとして」

「それは仕方ない事だ。“勝てない勝負”をする程、時間の無駄は無いからのう」

「……」



ぐぬぬぬ……と、親の仇でも見るかのような目で、妖狐さんを睨み続ける少女。

頑張れ、負けるな！ 君が奮い立てば、同じ胸の無い人たち（特に私）の希望になる！！

「先ほど、年中盛りきった尻軽狐女と、私は言いましたよね？」

「……うむ」

両腕を胸下で組みながら、その鋭い視線を更に強める妖狐さん……。

しかし、それに構わず、少女は話を続ける。

「それを、アナタは否定しましたけど……なら、さっきのは、どう説明なさるのです？」

「さっきのだと？」

「ええ、アナタ……さっき、この転入生の安部さんに、私たちヴァンパイアが得意とする“魅惑”<sup>チャーム</sup>を掛けようとしていたのでしょうか？」

「む……流石に、バレておったか」

「“魅惑”<sup>チャーム</sup>？」

聞きなれない単語……。

私が頭为天辺に、クエッションマークを三つぐらい浮かべていると。少女がそれに気付いたのか、私に、少しでも優しい視線を向けてくれた……正面から見ると、本当に可愛で可愛いといった雰囲気を持つ少女だ。

「人間であると同時に、日本の陰陽師であるアナタには聞きなれない言葉でしょうが。“魅惑”<sup>チャーム</sup>というのは、我々ヴァンパイアが得意とする術の一つです」

「はあ……」

良く分からないので、気の無い返事を返しても、少女は何一つ嫌な顔もせずに、親切に説明を続けてくれた……。

「この術の効力は、文字通り、術に掛けた相手を、術者の虜にするもの……つまり、アナタは先ほど、もう少しで、その年中盛りに盛りきった雌狐に、手籠めにされる所でしたのよ」

少女の“気の毒に……”とでも言いたそうな表情を向けられた私は、ゆっくりと、少しだけ怒った様な表情を浮かべながら、ニヤニヤと悪戯娘の笑みを浮かべた妖狐さんに振り向いたのだけど。

「まあ、おぬしも満更でも無かったのであらう？ 即興で真似たものとはいえ、あの術は、心に少しでも、そういう隙が無い限りは効果でんからのう」

「で、ですが。まだ今日の朝に会ったばかりなのに……い、いきなり、そんな術を掛けるなんて、ひどいにも程があるじゃないですか！」

人を手籠めにするような術を掛けておいて、何一つ反省の無い妖狐さんに、私は珍しく、少々の怒気を孕ませた声を張る……た、確かに、妖狐さんって、綺麗な人だなあ〜とか思ってたけど、それとこれとは話が別だと思う。

「そう怒るでない。私も、おぬしと早く仲良くしたかっただけなのだ……確かに、やり過ぎてしまったとは思う、すまなかった」

「あ、謝ったって……」

「そうか……謝るだけでは足りぬと申すか」

流石に、簡単には許そうとはしない私に、突然妖狐さんが、シュンと表情を俯かせる……たぶん、頭の上に動物の耳とかあつたら、もの凄い感じに垂れていた事だろう。

「だけど、こんなに落ち込むなんて……朝からの振る舞いを見るに、妖狐さんって、子供っぽいところもあれば、ちよつとだけ落ち着いたような、大人びた性格の持ち主だと思ってたのだけど。やっぱり、私と同じ年の女の子なんだ。多分、これまで妖怪同士の交流が当たり前だったに違いない。だから、慣れない人間である私に対して、自信が無いから“魅惑”<sup>チャーム</sup>なんて術に頼ってしまったんだ。

「なんだ、可愛いところもあるじゃない……それだったら、これだけ反省した様子を見せてくれるのだから、許してあげないこともな

「なら、私のファーストキスを、おぬしに捧げよう……」

「なっ！？　なにを言ってるんですか！？」

突然、何を言い出すの！？　妖狐さん！？

あまりの突拍子も無い妖狐さんの発言に、私は頬に熱を帯びさせながら、後ろへと後ずさる。

だって、いきなり女の子同士で、キスをするとか言い出したんだよ！？

そりゃ、誰だって身を引くと思う。

「いや、良いのだ……それだけの事を、私はおぬしにしまったのだ」

ガタリと、窓際最後尾の席から、椅子をどかして立ち上がる妖狐さん……心なしか、瞳が潤んでいる様に見えるし、頬も恥ずかしそうに赤らめている。

そしてそのまま、妖狐さんは、私に視線を合わせないまま近づいてきた。

「よ、妖狐さん！？　お、落ち着きましょう！　私は怒ってなんかいませんから！　ね！？」

身長差が10？以上もあるので、私は妖狐さんを見上げるようにしながら、とにかく彼女を落ち着かせようとしているのだけれど……一向に、その紅潮させた、恥ずかしそうな表情を落ち着かせること無く、私の目の前までたどり着いてしまった。

「遠慮などしないで良い……妖怪の世界では、人の世の様な、同性同士の行為など気にしないのでな」

「遠慮なんかしてませんから！　とにかく、一旦落ち着きましょう！」

何とかして、妖狐さんを止めようと、必死に焦る私……。

だけど、そんな願いもかなわず、妖狐さんは、私の両肩をガツシリと掴んでしまう。

「不慣れなうえ、少しだけ粗相をするやもしれぬが……」

私の顔に息が吹きかかるぐらいに近い距離で、囁くように告げられた、その言葉に、なぜか私は、体を硬直させ、唇を必死に紡ぐ事

しか出来なくなってしまった。

「精一杯この初めての接吻を、おぬしに捧げる……だから、多少の事は、目を瞑ってくれ」

もはや感じられるのは、緊張に見開かれた、私の眼に飛び込んでくる、頬を赤らめ、目を艶かしく細めている妖狐さんの姿だけ……次第に、ゆつくりと近づいてくる妖狐さんの唇……。

白い肌と自然に調和を取っている、ちよつとだけ桃色に見える、魅力的な唇……。

ああ……私、これは流されちゃうかなあ。

そうやって、私が人生で初めてのキスを、同性相手に諦めかけた、その時

「すみません、おそくなりました」

教室の前の扉を開く音と共に、そんな男らしい低い声が、私と妖狐さんの行為で少しだけ騒がしくなった教室に、不思議と響いてきた。

その声を聴いた瞬間、妖狐さんが近づけていた顔を“バツ！”と離し、私を拘束していた手も同時に離れた。

「童子、もう廊下の修繕は……『童子様……ッ！』」

既に            どうやったのか分からないけど            赤らめてい

た頬を治め、さっきまでの白面に戻った表情を、ドア枠よりも大きな体のせいで顔が見えない童子さんに向けた妖狐さんが、言葉を発しようとする……。

突然、あのフランス人形みたいなヴァンパイアの娘が、椅子を弾き飛ばすような勢いで、童子さんの方へと走り始めた。

童子さんの方へと駆ける彼女は、西洋の妖怪、つまり妖魔の身体能力を駆使して、履いている制服のスカートや、そのブロンドの髪を靡かせながら、狭い教室の机並びを信じられないぐらいのスピードと小回りの良さを効かせながら、疾風の様に突き進み……そして

「おはようございますー！！ 童子様！！」

“ キュルン ” とかいう効果音が付きそうな、甘ったるい声を出しながら、童子さんの代えのシャツを着た腹部にタツクルをかました。

表情や外見、仕草は可愛らしかったのに、そのタツクルを童子さんの腹部にかました瞬間、教室中に“ ドン！！ ” という衝撃波が発するほどの音が、一瞬にして周囲に爆ぜた。

同時に、教室中のクラスメイトたちが、机の上に乗っている物が衝撃波に飛ばされないように、必死に抑えている姿も見られた……私？ 私は、あまりにも唐突なことだったから、バランスを崩して尻餅を付きそうになちゃったけど、目の前にいた妖狐さんに抱きとめてもらっちゃったよ。うん、とても良い匂いがするよ……。

「今日はどうなされたのですか S H Rに童子様の姿がお目見えにならないから、このユリア・ワラキア・チエペシュ・ド・ヴラド・ドラキュラ。胸が焦れてしまいそうでした」

教室中に広がった衝撃波の影響など、明らかに一般的ではない長い名前を名乗った彼女には眼中にもないようで……童子さんの腰に抱きつきながら、可愛い子供のような笑みを浮かべている。

そんな、彼女の愛らしい仕草を向けられつつも、童子さんは「すまない、まだ、先生に報告してないんだ」と言って、腰に抱きついてた彼女を、片手で引き離した……引き離された彼女は「あ、童子様！」と言って、最愛のものと引き剥がされてしまった悲劇のヒロインの様な絶望に満ちた表情をしていた。

「遅れて申し訳ございません、先生」

「おう、別に構わないが、廊下の修繕は終わったのか？」  
「やたら長い名前の少女……ユリアで良いかな？」

ユリアさんを引き離した童子さんは、そのまま190cmを超える体格の歩幅で、教段の上に立っている先生に向かって、深々と一例をした。

「いいえ。どうやら資材が足りないようで、今日一日は手を付けら

れないと、用務員の“ぬりかべ”さんが仰っていました」

「そうか……で、授業は普通にやっても良いんだよね？」

礼の姿勢を取っていた状態から、ゆっくりと頭を元に戻していきながら、先生の質問に答えていく童子さん。

「それについては、現在、学年主任の方々が集まって話し合っているそうです」

「なるほど……それで？ お前に対してのペナルティとかはあったのか？ 原因自体を聞けば、ある程度は軽くなっているとは思うが」先生と童子さんの会話を、私は妖狐さんに体を支えられたまま聞いていたのだけど……そのペナルティというワードが出てきた瞬間――瞬だけ、妖狐さんが私を支えている手に力を込めた。

どこか、童子さんの様子を心配しているかのように……。

「最初は、近くで見ていた先生が、ペナルティは無しでも良いと仰っていたのですが。校舎を破壊したことには変わりはないので、自分から申し出させて頂きました」

「ほう……まあ、社会で生きていくなら、それくらいの責任感を持つてもらわないと困るからな。先生は嬉しいぞ、お前の様な生徒がクラスにいてくれて」

「ありがとうございます。自分も、先生のクラスに在籍できた事を、誇りに思っています」

「そうかそうか。そう言っただけで、先生も教師冥利に尽きるってもんだ……」どうかの誰かさんは、先生である俺に対して、ため口どころか横柄な態度を取っているからな」

言いながら、先生は私の後ろにいる妖狐さんに視線を向ける……。  
「ふん……私に敬語を使って欲しいのなら、それなりのものになることだな」

妖狐さんは、そう面白くもなさそうに言いながら。先生から童子さんへと目を向ける。

「それで童子よ。結局、おぬしが申し出たペナルティは、どうなったのだ？」

「それも今、学年主任の方々が話し合ってくれている」

言葉遣いだとか、佇まいだとかは、確りとしているのに……やっぱりどこか、童子さんの眼は眠そうで、喋る口調もゆっくりとしたものなんだけど、周りの人は、それについて一切気にして無いようだったから、多分、朝から今までの間も踏まえて、これが童子さんの普通の話し方なんだろうと、私は当たりを付けた。

ま、今はどうでも良いことなんだけどね。

「良いといわれた罰を、自分で受けるか……どこまで馬鹿なのだ、おぬしは」

「すまない」

「すまないではない！ おぬしが罰を受けると言う事は、とぼっちりが私にも来るかもしれぬということなのだぞ……！」

「ちよつと妖狐さん！ あまり童子様を悪く言わないでもらえます！？」

妖狐さんが童子さんに声を張り上げると。いつのまにか、先ほど引き離されたユリアさんが、再び童子さんの腰元に引っ付くようにして、二人の会話に割り込んできた。

うん、この状況は、私でなくても分かるよ……確実に、話がややこしくなるね。

「おぬしには関係ないことだ、今は引っ込んでいてくれぬか？ これは、私と童子という“バディ”の問題だ」

「あらそうでしょうか？ 今回の元々の原因は、最初にアナタが、そのこの安部さんを職員室まで一人にしてみましたことが原因でしょくに……。副委員長である私にとっては、転入早々、トラブルに見舞われてしまったクラスメイトをサポートするのは義務とも言える事ですので……その諸悪の根源に指導を与えるのは当然のことだと思いますが？」

童子さんの腰元で虎の威を借っているユリアさん……。

そのこちらを見下す視線は、言外に勝ち誇っているかの様で……。というより、どうして、私たちの朝の様子を知っていたのだろう

か？

あ、そうか。さっき言っていた、コウモリが何とかって話しか。

「ふん！ 副委員長だろうが何だろうが、おぬしは“このルール”も忘れたのか？ 序列で自身よりも上位の存在に意見するとは……ヴァンパイアだけに、命など捨てるほどあるということか？」

鼻で笑いつつも、明らかに殺気立ち始めた妖狐さんの妖気の流れ……。

その妖気から感じられる妖力の強大さに、教室中の人たちが緊張に息を呑む。

妖怪というのは、お父さんが言うには、限りなく野生に近い本能と感性を持っているらしい……多分、今も妖狐さんの妖気に触れて本能的に危険を察知しているのだと思う。ただ中には、その強大な妖気の中でも平気そうな顔をしている人たちがいる。

それは常に眠そうな顔をしている童子さんに……その腰元で威を借っているユリアさん……更には先生に、意外と霊力だけは強い私……そして、最後に。

「その辺にして頂けませんか、妖狐さん？ ユリアも悪気があった訳ではないのです。だから、ここは妖気を収めてはくれませんか？」  
突如、妖狐さんとユリアさんの間に割って入ってきた、この長身の男性。

眼にかからない程度に伸ばされたブロンドの髪に、全てを見透かしたような赤く鋭い瞳。細く整った顎や鼻などのパーツは、本当に絵に描いたような完璧な造形をしていて、美男子とは、こういう事を言うんだなど、この時、私は始めて理解した。また、長身といつても、別に細くひよる長いという訳ではなく、筋肉が引き締まった、いわゆるソフトな体系をしている……なぜ分かったのかと聞かれれば、それは、この男性の人がなぜか、ワイシャツにネクタイを着けておらず、第四ボタンぐらゐまで肌蹴させているからだ。

だけど、そんな事よりも気になったのが、この人の現れ方だった。  
「妖狐さん……今、あの人、“いきなり現れました”」



あまりに不思議な出来事だったので、私はつい、いまだ絶賛妖気漏れ出し中の妖狐に尋ねてしまう。

しかし、当の妖狐さんは、さもあらんといった表情で答えて見せた。

「あれは、あやつらヴァンパイアの種族が、長年かけて作り上げたインビジブル“透明化”というやつでのう。光の屈折を特殊な妖気の膜でコントロールし、いわゆる透明人間になる。主に変態が好んで使う術だ」  
「妖狐さん、流石に訂正させてください。初対面の安部さんが、完全に引いていますから」

そりゃ引きたくもなると思うんだ……だって、透明人間だよ？  
いくらカツコよくて背も高くて美形な感じの人が、なっている人だとしても。そんないやらしい術を会得してる時点で、女性である私は身を守らないといけないと思うんだ。

故に私は、妖気をまだ出し続けている妖狐さんの背中に隠れた。

「おお、そうだ。怪しげな術を使う変態からは、確りと身を守らねばならんからの。安心しろ、そこにいれば、一先ず私が、おぬしを守ってみせる」

「妖狐さん、悪乗りしないでくれないかな？ 僕のこの術は、もとも力の弱いヴァンパイアが日の光から自分を守るために作り出したものですし、決して痴漢行為を働くために会得したものではありません」

「ああいう風に、爽やかな笑みを浮かべながら言うところが、また怪しいでの。騙されるでないぞ鏡花」

「はい、分かりました妖狐さん」

爽やか……というより、どこか困ったように身の潔白を証明しようとする、胸元をわざと開くようにワイシャツを着崩しているヴァンパイアの男の人。

確かに、初対面で、こんな風に、いきなり爽やかな笑みを浮かべるなんて、何か考え合っただのこともかもしれないから、油断は出来ない。というより、まず透明人間となって現れた辺りから怪しい。

そんなイケメンだけど怪しい男の人を、横目でみながらヒソヒソと会話をする、私と妖狐さん……すると、そこに、これまで童子さんの威を借っていたユリアさんが、ちよつと怒った顔で割って入ってきた。

「ちよつとお兄様！ 仲介役を買って出るのは結構ですが、その鼻に着くような“香水”の匂いを撒き散らすのは、やめてください！」  
匂いを嗅がないために鼻を摘みながらユリアさんに言われてしまった、美形な変態さん……もとい、ユリアさんのお兄さんらしいヴァンパイアの人は。焦ったようにして、自分の体、とりわけ、服についている匂いを嗅ぐ……。

「……しまった」

「……しまった、ではありません！ また、どこぞの女と遊んでいたでしょう！！ お兄様が、こんなセンスの無い香水をつけるはずがありませんからね！」

普段は            まだ会って、数十分ぐらいだけど

落ち着

いた雰囲気醸し出すユリアさんだけど、意外と怒ったら、子供っぽいというか、結構捲くし立てるような喋り方をするんだなあ。

そんな事を、ぼんやりと考えていたのだけれど……やはり、流石に朝の学校としての忙しい時間に、ここまで騒ぐのは拙かったのだろつ。

「お前らいい加減にしろ！！ そして席に着け！！ それから次の授業の準備をしとけ！！ 今の時間を何だと思つてやがるんだよ！！ ああん！！？」

酒焼けしたような渋い声をがならせながら、これまで黙つて事の成り行きを静観していた先生が、出席簿を教卓に叩きつけながら、私たちを怒鳴りつけた。

その大きな声に、私は“ビクン！”と体を跳ねさせてしまう……だって、大人の男の人が本気で怒鳴るのって、凄いビックリするんだよ？」

「童子を見る！！ ギャーギャー煩いお前らと違って、もうちゃん

と席に着いてるんだぞ！！」

先生がビシッと指をさしたところを見れば、最前列ど真ん中を陣取るかのように、すでにツナギと無地のＴシャツ姿の童子さんが、姿勢正しく次の授業の教科書などを机に並べながら待機していた。

「だというのに、クラス委員長である奴が、女との朝帰りを誤魔化しながらの登校！ 副委員長である奴が、周囲の事も考えずに、自分のためだけに行動する！！ 上位序列者である奴なんて、もはや勉強を受ける気すらないというより、基本的に学園を舐めてやがる！！！」

それと転入生！ お前も、転入早々クラスに馴染むのはいいが、他の奴らの妨害になる事だけはするな！！！！」

「先生！ 僕は別に、女性と朝帰りなど……」

「なら、その懐に入っている“昨晚のお楽しみ”の写真と、服に“吹きかけられた”香水の匂いは、どう説明するつもりだ？ うん？

ニコラエ君？」

先生の指摘に、慌てて懐を弄るユリアさんのお兄さん、ニコラエさん……すると、何かを見つけたのか。もともと色白の白い顔を、もはや蒼白にさせながら“まずい”といった表情をし始める。

「女と遊ぶのは構わんが、ほどほどにしないと、今日みたいに痛い目に合うぞ？」

「……は、はい、肝に免じておきます」

そんなやり取りを見ていた私だったけど、さっき先生に怒られた面子の中に、確実に私が入っていたことに“今気が付いた”のだけれど……今は、大人しくしたほうが良さそうだと、私は“大人の女性”らしい、落ち着いた状況判断で、この場を乗り切った。

S H Rも終わり、朝の騒動が嘘かの様に、皆席に着いて、次の授業に備えていた頃……。

皆にとつては朗報、転入初日の私にとつては、何ともいえない情

報がクラスに飛び込んできた。  
いわく

『今日の授業は全面中止、これから生徒達は規律正しく下校の徒に  
付くように』

とのことでした……。

この情報が飛び込んできたとき、思わぬ休日の到来に喜ぶ生徒達  
が大半を占めていたけど、私は喜ぶに喜べない心境でした。

だって、せっかく転入初日の、あの質問攻めだとか、新しい環境  
での授業だとかを期待して、完璧なまでの受け答えを用意してきた  
のにだよ？　これは、流石に虚しいよ……。

そんな風に、妖狐さんの隣の席でダレていたら、理由を知った童  
子さんに、本気の“土下座”をかまされた。

これには私も驚き、すぐに頭を上げるように言っただけで、頑  
として童子さんは頭を上げようとはしなかった。

なぜ、ここまで頑なに謝ってくれるのかと聞けば『君がクラスに  
馴染む折角のチャンスを、自分は潰してしまった』だとか『下の者  
を救ってくれた恩人に、自分のせいで不快な思いをさせてしまった』  
だとか……本当に真摯に謝ってくれていたのだけど、流石に教室で  
そんなことをやられてしまった日には、私が何だか悪党に見られて  
しまうし、それに、そこまで別に重要な事でもなかったから、なお  
の事困った状況に陥っていた。

だけど、それを救ってくれたのは妖狐さんだった……。

彼女は大胆にも、土下座をする童子さんの後頭部に向けて、踵を  
打点とした振り下ろしの“踵落し”を決めると、そのまま童子さん  
の頭を踏みつけながら、こう言ってくれた。

『将来、鬼の一族を背負って立つ男が、そのように易々と他者に頭  
を下げるでない！！　みつともないにも程があるだろうに！！』

うん……相手の頭を踏みつけながら言う台詞では無いんだと思うんだ。

だって、この時の二人の様子は、さながら女王様と奴隷を髣髴とさせる力関係だったもの……見てることだが、童子さんを気の毒に思っちゃったよ。

ちなみに、またユリアさんと童子さん絡みで揉めるのかなとか思っていたら、実はクラス委員長と副委員長は、今日の中止の穴埋めをするために、今後の日程を決めるための会議に参加していたので、特に新しい揉め事とかは起こらなかった……まあ、起こったら起こったで、困るんだけどね。

そんなこんなで、私の転入初日は、SHRを終えただけで幕を閉じてしまいました……。

非常に悲しい限りです。

さて、ところ変わって、いま私は、引越し先の学生寮の前に立っています。

どうやら、この学生寮には、学園の序列上位者とかいう人たちのみが住んでいるらしく、私の隣には、童子さんや妖狐さんが、同じく学生寮を前にして立っています。

だけど、どうすれば、こうなるのか……？

広い土地に建てられた、三階建ての白く清潔感漂う学生寮……もとい、二階一番左隅の二部屋に刻まれた、なにやら爆発でもあったのではないかと疑う、破壊跡。

周辺には、背の高い木々が風に揺られて、気持ちの良い葉が擦れる音を発しているのにも関わらず、二階一番左隅の二部屋のベランダは、黒く焦げていた……。

「なんだ、まだ直しておらんのか、あやつは」

「寮長も忙しいお人だから、仕方ないと思うが？」

「あやつのを使えば、十分もかからんだろうに……さては二度寝

をしておるな」

そんな寮の光景に、妖狐さんと童子さんの二人は、特に気にした様子もなく、普通のやり取りを交わしている……そうか、たぶん、こんなのは日常茶飯事なんだ。朝だってイキナリ襲われて、学校の廊下があんなになっちゃったんだし、これくらいは当たり前前の事なんだ。

現実逃避をしようにも、結局は、これから私に降りかかりそうな危険を考える事になってしまう。

何だかもう、あのお母さんがフライパンとオタマで起こしに来てくれる実家に帰りたい気分になってきました。

「何をしておる！ 早く寮に帰るぞ！」

「え？ あ、はい！ 待つてください！」

軽く現実には悲観していると、いつの間にか二人が寮の入り口で私の事を待っていた。

妖狐さんの声で、現実へと視点を戻した私は、白いコンクリートの地面を蹴り出し、これからお世話になる妖怪学園学生寮へと走り出した。

なんだか無駄に豪華な両開きの扉を開くと、そこには白の壁紙や大理石で出来たピカピカな地面が、ほとんど高級マンションの様な清潔感を漂わせ。意外に広い玄関の天井や、正面に見える、吹き抜けの螺旋階段……そして入り口すぐ横にある、寮の受付でもある力ウンターには、インテリア調の、骨董品のようなダイヤル式の電話が置いてあり、その近くのペン立てには、お高そうな万年筆が立てられていた。

何この高級感……そして、何この外見とは全く反比例した広さ。  
「驚いたか、鏡花？」

およそ学生寮とは思えない早々の光景に、私がほけ～としている

と、鞆を片手で肩に担いでいる妖狐さんが、どこか自慢げに聞いてきた。

「はい……その、これも何かの妖術なんですか？ 外の感じと、全く広さが違うから」

「ああ、その通りだ。ここには外からの認識を誤認させる、ある種の“幻覚”を生み出す術が施されていてな。これが解けると、この内装同様、豪華な学生寮が外からも拝めることが出来るのだが……」  
そういつて、どこか口を濁す妖狐さん……。

「出来るのだが……？」

「まあ、何だ……おぬしも知っておろう。確かに、妖怪学園は国立として成り立っている場所だが、こんな贅沢は本来許されておらんのだ。実際に、ここの外装が外に漏れ、他者の口づてに広まってみる……世間からはいわれの無い批判を浴びるに違いない。“税金の無駄遣いだ”だとかのう」

「そうなんですか、童子さん？」

妖狐さんの話の内容を確認するために、私は童子さんに小首を傾げながら聞いた。

童子さんは長身なので、上目遣い気味に見ることになっている。

「大体その通りらしいが……俺は分からない。やはり、そういった事は、妖狐に聞くのが一番いい」

いや、私、その妖狐さんの話しの確認をするために、他の関係者である童子さんに聞いたんだけど……。

そんな私の戸惑いを察知したのか、妖狐さんが「そやつに聞くだけ無駄だよ。何たって、基本的に何も考えておらんからの」……と、呆れたように「しょうがない」といった視線を向けていた。

「ま、とりあえず、そんな嘆いてもしょうがない事を語るよりも、おぬしを寮長である“ぬらりひょん”に会わせるのが先だろう。ほれ、行くぞ」

私と童子さんに、そう言い放つと、妖狐さんはローファーで大理石の地面をツカツカと鳴らしながら、真っ直ぐに歩を進めていつて

しまう。

これに、無言で付いていく童子さん……。

「あ、ちよつと待ってくださいよう！」

歩幅の違う二人の歩みに遅れた私は、置いてかれまいと、焦ったように小走りで駆けはじめた。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9446u/>

---

狐と鬼と私の妖怪学園

2011年8月15日03時19分発行